長野市の埋蔵文化財第22集

長野吉田高校グランド遺跡

1987・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

先人の残した様々な文化遺産を守り、後世に継承していくことは我々の責務であると考えます。なぜなら現在の歴史・文化の基層をなすものであり、時代時期の証言者的役割をになっており、更に将来の文化の発展向上にかくことのできない力量を宿していると認識するからであります。

特に埋蔵文化財に関しては、土地に刻まれた歴史であり、そのものが当時の時間的断面を示す生活史であり、また日本固有の信仰・宗教等精神史など文化の始源を内包するという他の歴史学の分野にない根拠資料という特色があります。即ち埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考える上での実証者であります。それ故に不動産的価値が大切であり、遺跡数に限りがあり、再生が不可能という弱点があります。

近年の開発進捗状況は著しいものがあり、更に大規模化していく傾向にあります。埋蔵文化財の保護か開発かと古く新しい問題をはらんだまま現在に至っていると認識しています。埋蔵文化財は国民共有の文化的財産、地域文化の基盤であることを再認識し、その保護策のための新たな模索を進める時期にきているのではないかと痛感しています。

さて、こうした意味からもここに長野市埋蔵文化財報告書第22集が刊行され、研究者はもとより市民の方々に公開できえましたことはご同慶に堪えないところであります。

この長野吉田高校周辺の遺跡の発見は比較的新しく昭和45年のことでありながら、弥生時代中期から後期に至る時期の重要な遺跡で、現在この地から出土した土器を基準に「吉田式」と呼ばれ、全国的に著名になっていると聞いております。今回の調査での幾多の遺構・遺物が発見されており、「吉田式」が更に充実した内容になったと自負いたしております。

最後になりましたが、長野県教育委員会・長野吉田高校の生徒の皆様をはじめ学校関係者、調査を企画指導をいただいた長野市遺跡調査会の先生方及び寒さを迎える折労苦をいとわず発掘調査に直接参加いただいた皆様に感謝申し上げますとともに、本書が広く活用されますことを祈念申し上げます。

昭和62年３月

長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会長　　奥村　秀雄

例　　言

1　本書は、県立長野吉田高等学校体育館新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
　遺跡名は、周知される「長野吉田高校グランド遺跡」に準ずることとした。

2　調査は、県立長野吉田高等学校と長野市教育委員会との契約に基づき、長野市遺跡調査会が担当した。

3　本書作成における、分担は下記の通りである。

遺構図整理・浄書	奈須野
遺物整理	横山
遺物実測・拓本	中殿・横山・千野・清水・青木
遺物浄書	千野・青木
写真	青木

4　本書の編集・執筆は、矢口の指導に基づき、青木・千野が行った。
　なお、Ⅱ「遺跡周辺の環境」については、長野市立博物館　和田博氏に玉稿を賜った。記して感謝申し上げたい。

5　調査の諸記録及び遺物は、長野市立博物館において保管されている。

6　本書の構成は下記の要領による。

（1）　Ⅲ「調査内容」については、遺構と遺物とに分けてそれぞれ記述した。
　遺構に関しては、遺構の検出状況とそれに伴う遺物の出土状況、更に遺構の構造を中心として検討を加えた。
　遺物の内大多数を占める土器に関しては、形態分類を中心として検討を加えた。実測個体は、可能な範囲で⅛破片までを復元実測して掲載し、観察結果を表にまとめた。実測の不能なその他の小破片については、文様を有する破片に限り拓影を掲載した。

（2）　掲載した実測図は次の縮尺による。

遺構		1：60
遺物	土器	1：4（拓影　1：3）
	土製品	1：2
	石器	2：3、1：2、1：4

（3）　遺構図中、ドットに伴う数字は遺物番号を示し、スクリーン部分は炉を示す。

（4）　遺物番号は遺構別とせず、通し番号とし、写真図版もこれに合致させた。

目　　次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過
　1　県立長野吉田高等学校体育館新築事業……1
　2　調査会及び調査団……2
Ⅱ　遺跡周辺の環境
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……6
Ⅲ　調査内容
　1　調査経過と調査概要……8
　2　遺構
　　（1）住居址各説……11
　　（2）住居址の構造……16
　　（3）住居址構造の比較……18
　3　遺物
　　（1）土器……32
　　（2）土製品……75
　　（3）石器……77

挿図目次

図1　調査範囲……1
図2　遺跡の位置……4
図3　遺跡周辺の地形……5
図4　遺跡内調査地点……7
図5　調査区全測図……9・10
図6　2号住居址……11
図7　3号住居址……12
図8　4号住居址……13
図9　5号住居址……13
図10　6号住居址……14
図11　7号住居址……14
図12　9号住居址……15
図13　10号住居址……16
図14　長野県内の弥生時代住居址……19
図15　1号住居址・8号住居址実測図……21
図16　2号住居址実測図……22
図17　3号住居址実測図……23・24
図18　4号住居址実測図……25・26
図19　5号住居址実測図……27
図20　6号住居址実測図……28
図21　7号住居址実測図……29
図22　9号住居址実測図……30
図23　10号住居址実測図……31
図24　出土土器形態分類……36
図25　2号住居址出土土器(1)実測図……37
図26　2号住居址出土土器(2)実測図……38
図27　2号住居址出土土器(3)実測図……39
図28　2号住居址出土土器(4)実測図……40
図29　2号住居址出土土器(5)実測図……41
図30　3号住居址出土土器(1)実測図……42
図31　3号住居址出土土器(2)実測図……43
図32　3号住居址(3)・8号住居址出土土器実測図……44

図33　4号住居址出土土器(2)実測図……45
図34　4号住居址出土土器(2)実測図……46
図35　4号住居址出土土器(3)実測図……47
図36　5号住居址出土土器実測図……48
図37　6号住居址出土土器(1)実測図……49
図38　6号住居址出土土器(2)実測図……50
図39　6号住居址(3)・7号住居址出土土器(1)実測図……51
図40　7号住居址(2)・9号住居址出土土器実測図……52
図41　10号住居址出土土器実測図……53
図42　2号住居址出土土器(1)拓影……54
図43　2号住居址出土土器(2)拓影……55
図44　3号住居址出土土器(1)拓影……56
図45　3号住居址出土土器(2)拓影……57
図46　3号住居址出土土器(3)拓影……58
図47　4号住居址出土土器(1)拓影……59
図48　4号住居址出土土器(2)拓影……60
図49　4号住居址(3)・5号住居址出土土器拓影……61
図50　6号住居址・7号住居址出土土器拓影……62
図51　9号住居址・10号住居址出土土器拓影……63
図52　土製品実測図……76
図53　石器(1)実測図……78
図54　石器(2)実測図……79

図版目次

図版1　遺跡の全景
図版2　1・2号住居址
図版3　2・3号住居址
図版4　3号住居址
図版5　4号住居址
図版6　5・6号住居址
図版7　7号住居址
図版8　8・9・10号住居址
図版9　住居址の発掘経過
図版10　壺形土器
図版11　壺形土器
図版12　壺形土器
図版13　壺形土器・甕形土器
図版14　甕形土器
図版15　甕形土器・高坏形土器
図版16　鉢形土器・甑形土器
図版17　壺頸部文様帯
図版18　土製品
図版19　石器
図版20　石器

Ⅰ　調査に至る経過

1　県立長野吉田高等学校体育館新築事業

長野市東北部の浅川扇状地には、数多くの遺跡が存在し、通称「浅川扇状地遺跡群」と名付けられている。この浅川扇状地の扇央部に位置する県立長野吉田高等学校においては、昭和45年のプール建設に伴って多量の遺物が出土し遺跡の発見に及び、弥生後期「吉田式土器」として型式設定されるに至った(笹沢　1970)。昭和50年には、長野市都市計画北部都市下水路事業に伴う第１次調査、51年には第２次調査が実施され、第１次調査においては該期の住居址７軒が検出されている。

昭和60年６月12日、同校体育館及び格技室新築に伴なう埋蔵文化財保護に関する協議申出を受けて、長野市教委社会教育課は建設予定地内での試掘調査を実施し、遺物包含層と遺構の存在を確認するに至った。この結果をもとに、施工に先立って破壊が予想される部分について、記録保存のための発掘調査が計画され、長野市教委・長野市遺跡調査会が調査を担当する運びとなった。なお、調査は発掘作業を60年度に終了させ、整理及び報告書の刊行は61年度に完了するものとされ、昭和60年10月21日をもって調査の着手に至った。

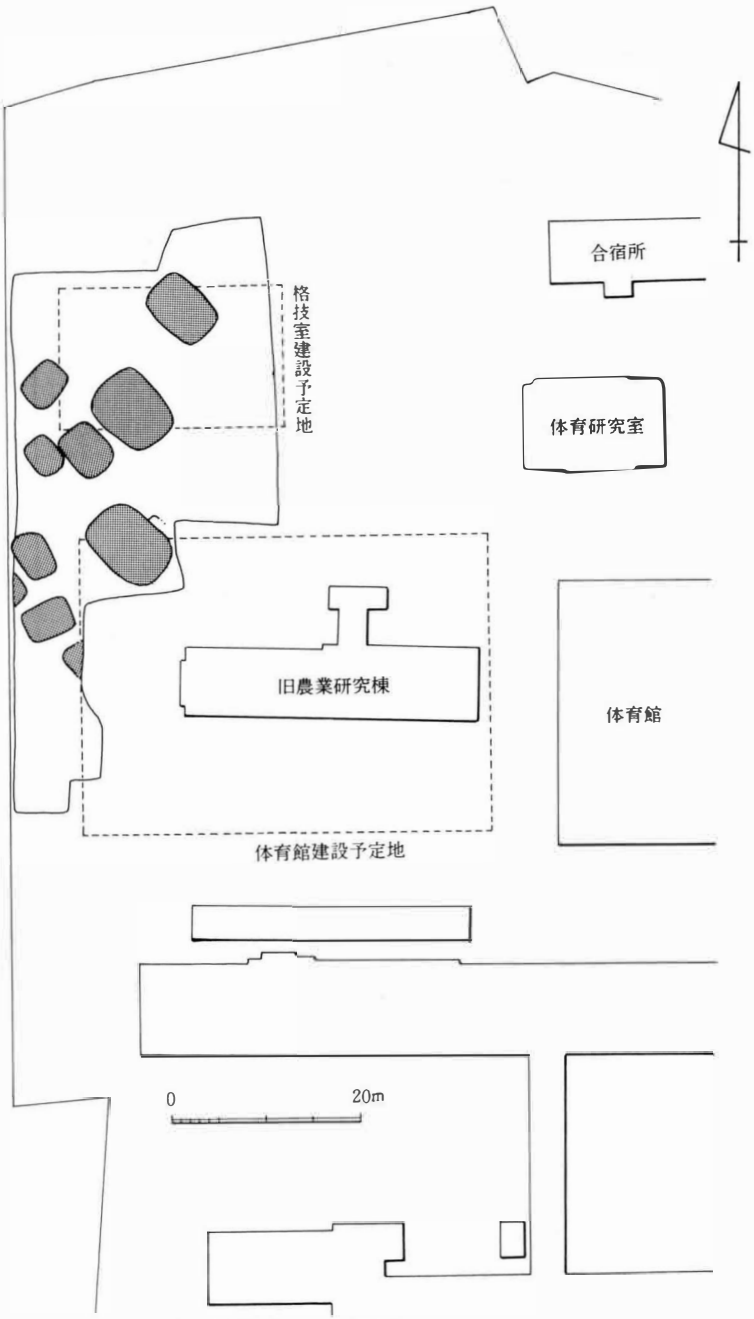


図１　調査範囲（１：800）

2　調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画及び、それに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

調査会　会　　長　奥村秀雄　（長野市教育委員会教育長）
　　委　　員　米山一政　（長野市文化財保護審議会長）
　　桐原　健　（長野市文化財保護審議会委員）
　　清水営一　（長野市教育委員会教育次長）
　　関川千代丸（長野市教育委員会文化財専門主事）
　　矢口忠良　（長野市立博物館学芸員）
　　監　　事　高野　覚　（長野市教育委員会総務課長）
　　事務局長　戸津幸雄　（～61・3）（長野市教育委員会社会教育課長）
　　吉見　敏　（61・4～）
　　局　　員　吉池弘忠　（長野市教育委員会社会教育課主幹）
　　山崎博三　（長野市教育委員会社会教育課主査）

調査団　調査団長　矢口忠良　（長野市立博物館学芸員）
　　調 査 員　山口　明・青木和明・千野　浩・奈須野由美（長野市立博物館学芸員）
　　中殿章子・横山かよ子（長野市遺跡調査会）
　　出河裕典・古岩井久仁（信州大学学生）清水隆寿（立正大学学生）
　　執 筆 者　和田　博（長野市立博物館専門主事）
参加者　青木朗子　井出つたえ　伊藤幸子　大久保みつ江　笠原博子　川島邦子　佐藤純子
　　杉浦芳子　八田明巳　花岡艶子　藤沢月子　丸山悦子　丸山たまき
　　長野吉田高校地歴班（牛山純一　越取高浩　島田浩明　高野　修　塚田真一　寺島康文
　　贄田　明　原　尚永　牧野哲也　宮沢直樹）

調査は、長野吉田高校の全面的な協力をえて、実施されたものである。関係各位に対し、厚く御礼申し上げたい。また、調査成果の整理から報告書作成に至るまで、長野市立博物館諸氏の御助力を頂いたほか、笹沢浩氏(長野県史刊行会)には種々御指導を賜った。記して感謝申し上げたい。

Ⅱ　遺跡の環境

1　地理的環境

飯縄山を水源として飯綱高原を東南に流下する浅川は、通称浅河原口を谷口として盆地に注ぐ。谷口近くでは流紋岩質の裾花凝灰岩地帯に断層線沿いの深い横谷を刻み込み、ブランド薬師の奇勝を形成し、ダム建設の話題もちらほら風聞する。

谷口付近は、地附山地滑りの引き金となった箱清水断層と三登山・霊園高地の南を限る西条断層(いずれも仮称)が直交している錯雑地形であり、油徴を示す浅川泥岩層の地滑り地域という地質的に軟弱な地点で、かつて新生代新第三紀中新世に生息していたクジラの脊椎骨が道路改修工事の際に発見された。戦時中まであった数基の油井も、採算がとれず閉鎖されて現在ではわずか１基のみが痕跡を留め、噴出する天然ガスを利用したガラス工場も廃業している。

浅川は、浅河原口を扇頂とし、上述の両断層に両翼を区切られた広大でしかも典型的な扇状地を形成し、扇端は約４km離れた平林―東和田―朝陽駅―西三才付近にまで及んで、以遠の沖積地に移行する。

現在の浅川流路は東南方向に流下し、扇頂から約2.5km下流の稲田・吉田境にある手力橋以下では天井川の様相を呈し、更に0.7kmほどのメガネ橋ではＪＲ信越本線の上を越えて浅川が流れている。この付近から更に約６km下流の大道橋付近では、流下する土砂の堆積が激しく、しばしば洪水の元凶となったが、近年の善光寺平土地改良事業によって幾分被害は軽減されている。

扇央にある手力橋より上流では扇状地形を再び浸食する回春作用を示し、河川砂防の護岸堰堤工事によってその拡大を防止している。またこの区間では、平均約¼の急流の大きい落差を利用した水車による精米所が、戦前には８軒も営業していた。

本遺跡は、このような浅川扇状地の扇央すなわち手力橋より0.5km上流の山田橋南方の標高390.2m地点にあり、微視的にはこの付近の浅川両岸特に右岸は自然堤防を形成し、南岸に押鐘、北岸に檀田・旧山田（山田は近世に稲田に移転）などの集落が古くから発達していた。

檀田・旧山田集落と神楽橋・若槻両団地との中間地帯に俗称檀田沖・稲田西沖があり、この地帯はかつての後背湿地と見られ、後者では主要地方道長野荒瀬原線バイパス(通称牟礼バイパス)や北部環状幹線道建設工事の際の所見では、数m下まで黒色乃至暗青色強粘土の湿地帯であった。また、前者の檀田沖は現在一面の水田地域で条里的地割遺構が観察され、両沖中間地域に白鬚・氷田(郡田)とが混同されたと推定される白氷・鬚田の小名も残されている。

本遺跡は、南岸の押鐘から連続する微高地の東端近くにあり、この微高地の尖端では、山田橋付近から吉田高校グランド東側を経て南東南へ伸びる１～２ｍの段差をもって、それ以東が落ち込んで旧河床の痕跡を示し、数年前まで帯状に水田地域が残されていた。

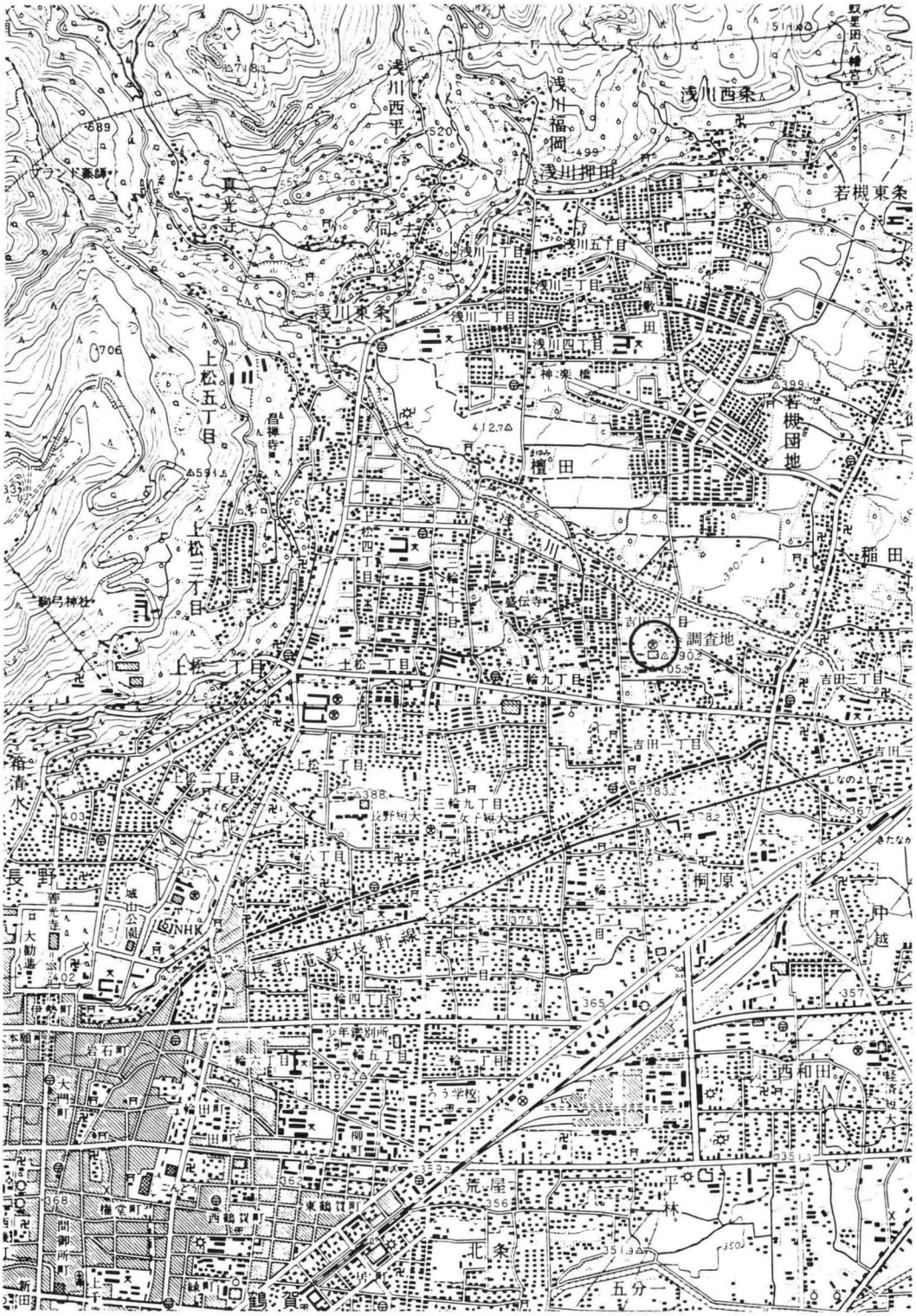


図２　遺跡の位置（１：25.000）

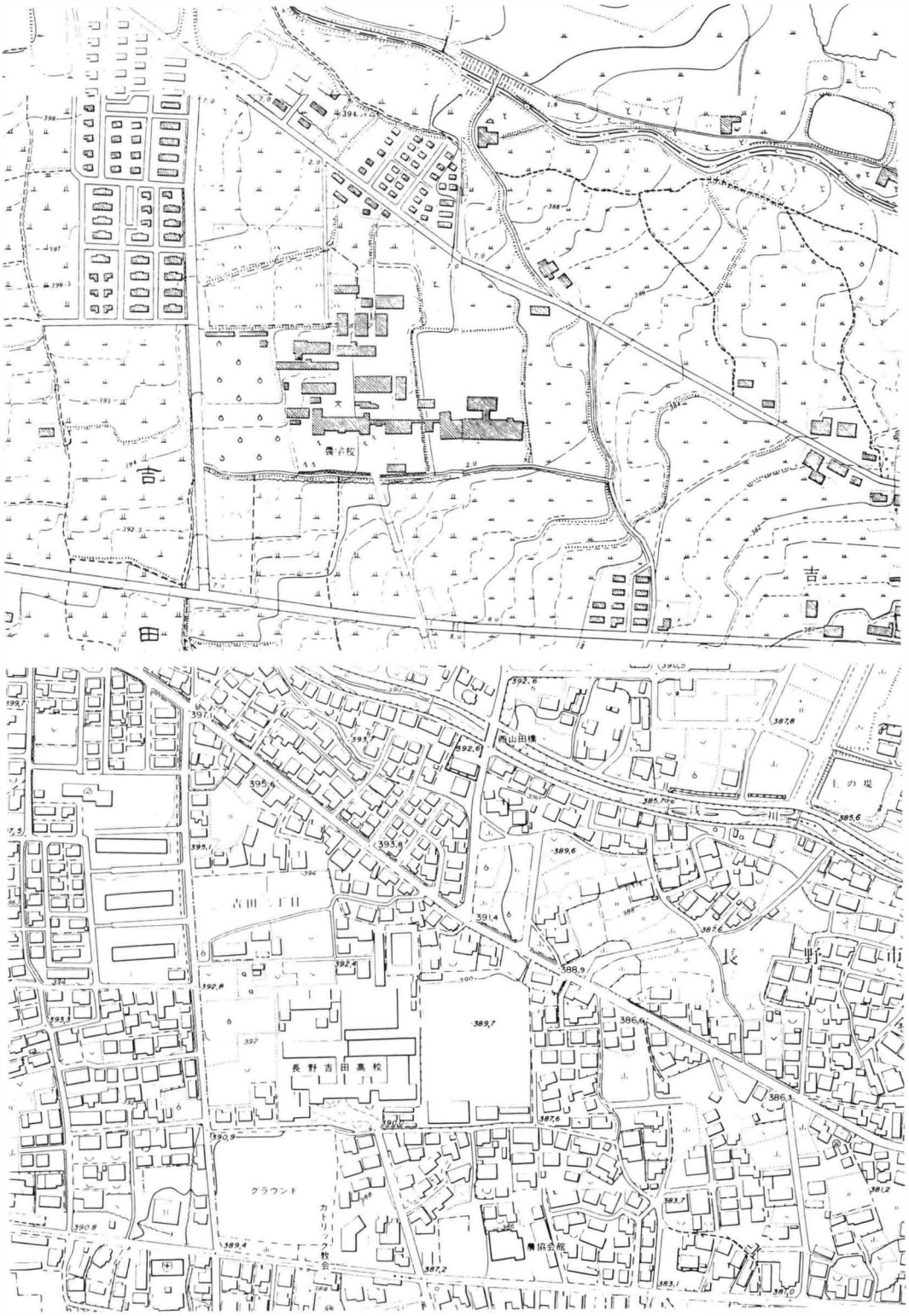


図３　遺跡周辺の地形（１：5,000）

上：大正15年測量、昭和27年修正　下：昭和49年測量、56年修正

2　歴史的環境

標高733mの地附山や霊園高地（746）・三登山（923）が、350～530mの比高差によって西北からの冷たい季節風をさえぎっている浅川扇状地は、日当たりの良い高燥な居住地域で古来から開発され、扇頂に近い赤萱平・湯谷遺跡(いずれも主として縄文期)をはじめ、神楽橋・徳間小学校・国鉄貨物基地(以上箱清水期)、駒沢新町・三輪小学校(古墳時代中心)等々扇状地周辺を主として、遺跡は枚挙にいとまないほど分布し、その大部分は浅川扇状地遺跡群に包括される。

本遺跡の東隣接地には昭和46年に調査された長野吉田高校グランド遺跡が微高地東端にあり、本遺跡北側の旧バレーコート敷地やその西の広町県住敷地では整地の際に多くの土器片や一部遺構も見られたという。

また、扇頂近くの扇状地面にあった湯谷古墳群をはじめ、扇状地両翼の山麓から山腹まで、特に地附山では山頂付近にまでも多くの古墳が残され、その当時からこの扇状地付近の開発が進んでいたことを示唆し、地附山山頂には前方後円墳も所在する。

律令時代には、この扇状地一帯は芋井・太田両郷にわたり、扇端の一部は尾張郷にも含まれていたと推定され、条里的遺構の存在が、扇端から沖積地にかけての古牧地区を最大として湯谷沖・檀田沖にも指摘されている。

扇頂付近を経て両山脚を縫う古くからの通路の存在が推定されると同時に、延喜官道以来の古道は扇端の湧水地帯に所在する集落を通過していた。

中世にはこの地域は若槻庄、吉田牧等の領域となり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・桐原・相ノ木・平林・和田等々の城館跡が、そこを拠点とした当時の武将や土豪たちの夢のあとをしのばせ、1399(応永6)年には扇端の石渡付近で小笠原守護軍と太田庄地頭の島津軍とが戦戈を交え、1403(応永10)年には小笠原氏に代わって信濃守護となった斯波氏の代官細川慈忠が、この付近が守護にさからう高梨氏の傘下であったことから桐原・若槻両城を攻撃している。この両戦が信濃の戦国時代の端緒となった大塔合戦(1400年)の前哨戦と、終焉とであった。

戦国時代から近世初頭の越後へ通じる本往還はこの扇状地を通過せず、長沼―松代通りとされたが、延喜官道と大同小異の道筋利用が多く、しばしば後者の通行禁止が発令されている。

慶長年間(1596～1615年)に五街道に次ぐ重要道路としていち早く北国往還が延喜官道よりやや扇央よりに整備され、諸村が街道沿いに集められ、若槻坂下地区に伝馬役を勤める荒町宿、吉田には松代藩の口留番所がそれぞれ設けられた。この往還は佐渡の金銀を江戸に運び、加賀藩主を筆頭に北陸諸大名の参勤交替路として重要であったばかりか、時代が下るにつれて庶民の善光寺等の寺社参りや生活物資輸送のにぎわいは、明治30年代の信越線開通まで続いた。従ってその間、本遺跡付近は、本往還からはずれた寒村を点在する一帯の耕地であった。

戦後の高度経済成長にともなって急激に人口の都市集中が進み、交通の動脈がかつての北国往

還である相ノ木通りからさらに扇央の城北線(ＳＢＣ通り)に移り、さらに若槻街村地帯を縦貫していた旧県道から県道バイパス開通(61年度)はさらに住宅地化に拍車をかけ、浅川流路以南はほとんど住宅地化し、以北も次第に宅地に変化している。

そんななかにあって本遺跡周辺は吉田高校の前身である上水内農学校が創設され(明治41年)て以来広々とした校地を実習農場として確保していたため、本遺跡もその一角に温存されてきた。しかし、同高校の農業課廃止その他によって旧農場も次第に変貌しつつある。　　(和田)

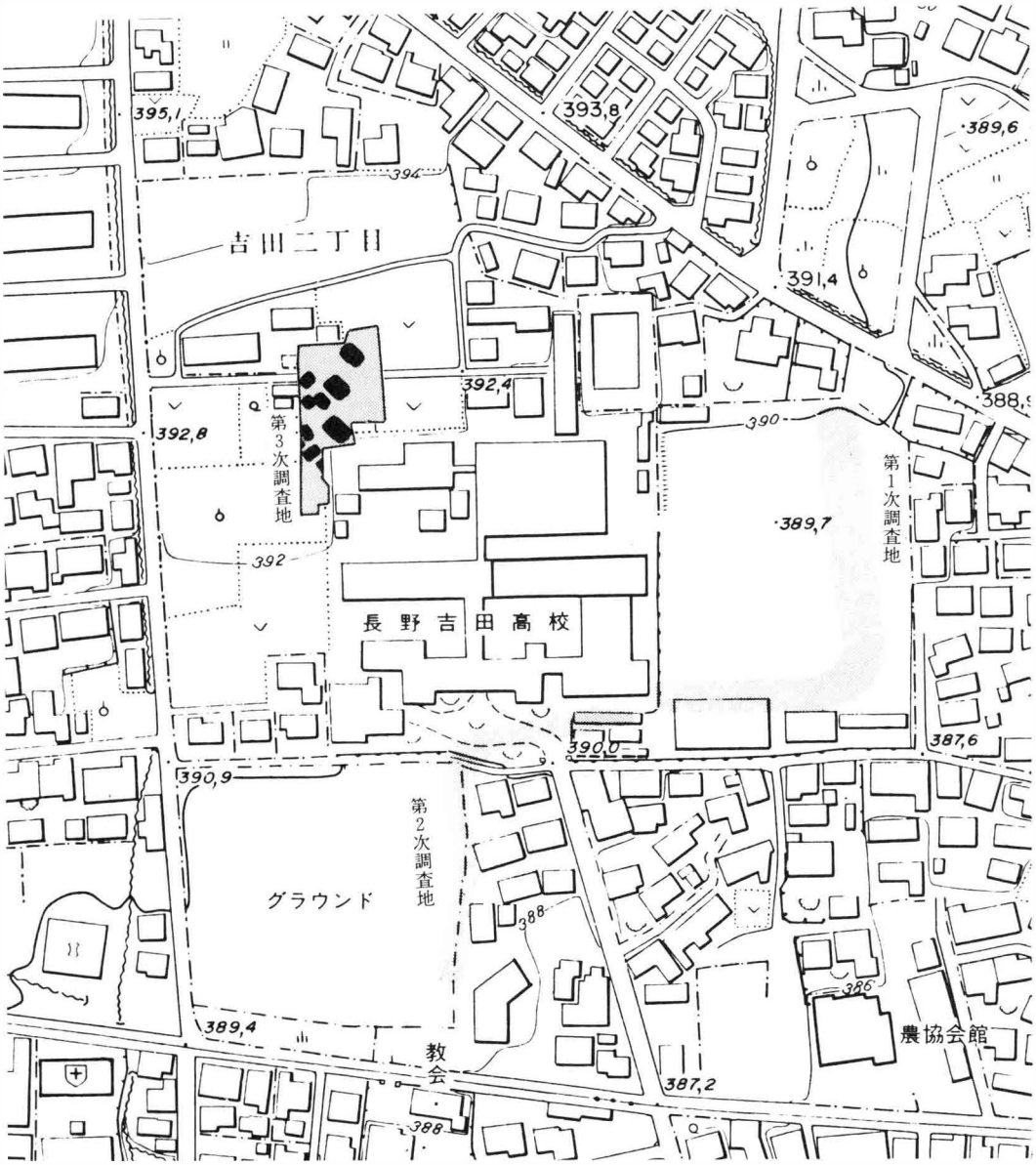


図4　遺跡内調査地点（1：2,500）

Ⅲ　調査内容

1　調査経過と調査概要

（1）調査経過

調査は昭和60年10月21日をもって開始された。体育館及び格技室建設予定地は、旧農業科研究棟敷地部分と、新たに長野吉田高校敷地として編入された信州大学農場部分とに分けられるが、このうち旧農業科研究棟部分については、かつての校舎建設の際に２ｍ近い落差を持って大幅に削平されており、確実に遺構が失われているものと判断されたため、調査の対象となった範囲は、果樹園及び水田として利用されてきた信州大学農場部分に限られた。

遺構は現地表より１ｍ内外の深い位置に存在し、耕作土層から続く厚い粘土層下の、礫混じり黒褐色土層が遺構の確認面であることが試掘調査のおりに確認されていたため、バックホーを援用しながら遺構確認面までの粘土層を除去した。翌22日より作業員を動員して検出作業に着手し、遺構の確認とともに随時掘り下げ調査に移行した。遺構確認作業においては、確認面とした黒褐色土と遺構内覆土との判別が微妙である場合が多く、一部の住居址においては、床面の露呈をもって初めてその存在が確認されたものもある。28日までには、ほぼ遺構の分布状況を把握するに至り、11月４日には遺構の掘り下げと並行して測量作業を開始した。16日には全ての遺構における記録作業が終了し、18日の機材撤収をもって現場における作業を完了した。

（2）調査概要

調査地は、水田造成により平坦面を形成しているが、本来の地形は南東方向への緩斜面を呈していたものと考えられ、１次調査において住居址が検出されたグランドとは３ｍ近い標高差を有するものである。土層序は、表層耕作土層下に黒色あるいは黒灰色の厚い粘土層が堆積しており、地表下１ｍを境として次第に凝灰岩の砂礫を包含した黒褐色土層へと移行し、下位にゆくほど色調は漸移的に黄褐色へと変化する。同層は、部分的に多量の礫を混入するなど、変異の大きな土層であり、遺物が包含されていない点から自然層として理解されるもので、遺構の掘り込みも同層上面において確認される。

検出された遺構は、住居址10軒であり、ほとんど重複しない分布状況を示している。住居址の所属時期は出土遺物から弥生時代後期前半とされる「吉田式」期に限定されている。住居の主軸方向は北西あるいは北東方位を示し、地形の傾斜に沿った形で構築されているといえる。住居の規模は、長軸８～９ｍの大形住居と、５ｍ内外の小形住居に分けられる。住居の構造は、平面形態・柱穴・炉などの配置にそれぞれ共通した特色を有しており、若干の時間差は考慮されるものの、集落遺跡としては単相の構造を示すものとして把握される。

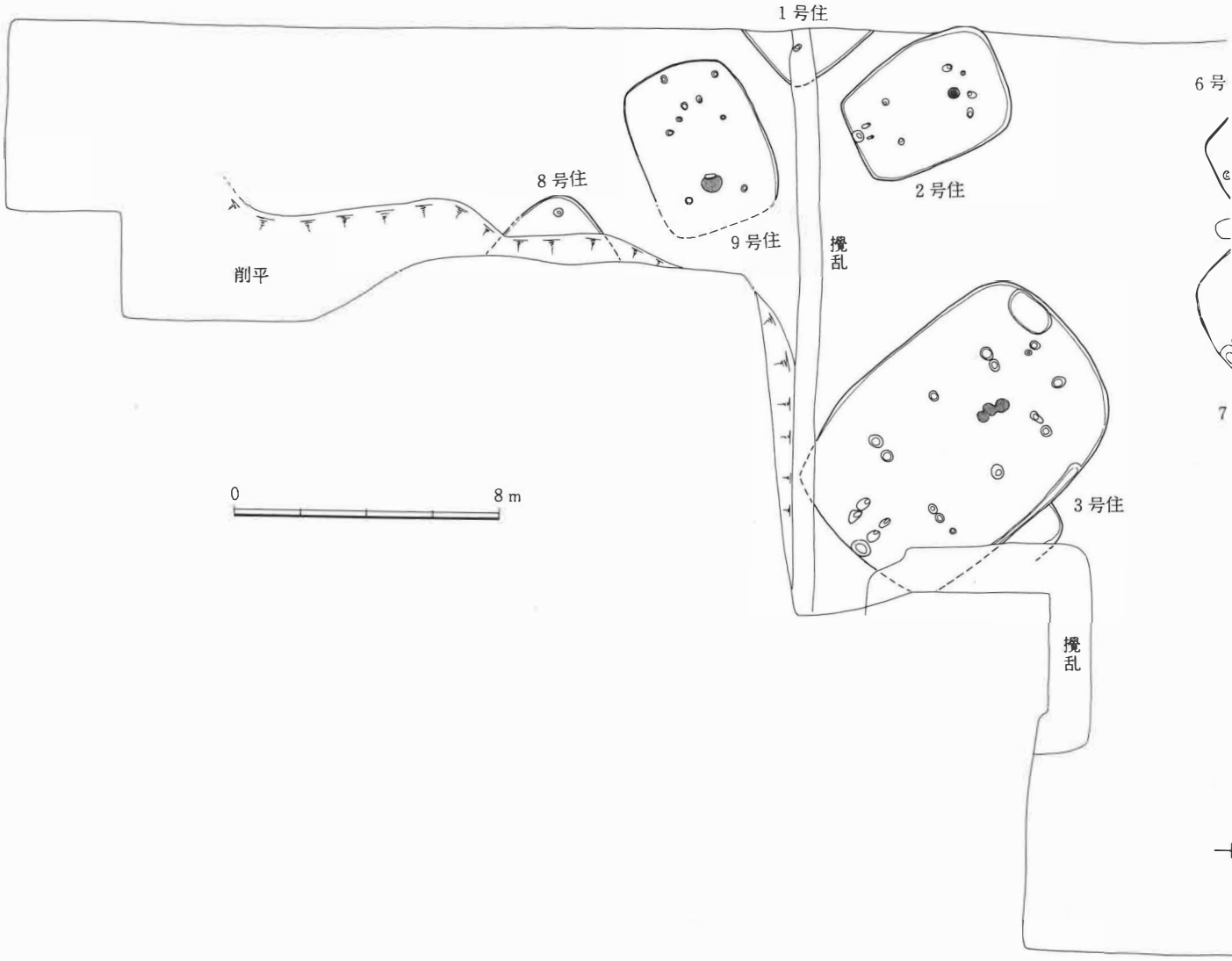


図5　調査区全測図（1：200）

2　遺　　構

（1）　住居址各説

1号住居址(図15)

中心軸を北東方向にとる小形住居と推定されるが、大部分が調査範囲外であり、東壁隅のみの検出にとどまる。また、農業用水路の掘り込みにより、床面の一部は攪乱を受けている。検出面からの深さは10cm内外と浅く、床面はやや軟弱であり、主柱穴となる可能性が考えられるピットが認められるのみである。

出土遺物

実測不能な土器小破片と剝片が(図53―７)検出されたのみである。

2号住居址(図６・16)

中心軸を北西方位にとり、5.0×3.6mの隅丸長方形を呈する小形住居である。検出面からの掘り込みは深さ35～20cmを測り、床面の状況は軟弱である。主柱穴(１～４)は短辺1.6～1.2m・長辺2.3mに配列される。支柱穴には、主柱配列北側(５・６)と南側(７・８)とに２本１対のものがみられ、後者は楕円形のやや斜めの掘り込みによる。また後者に接した南壁際には径30cm・深さ15cmのピット(９)が存在し、出入口に関連した施設を予想させる。炉は直径30cm・深さ５cmほどの凹みを呈し、底面は火熱を受けて焼土塊が形成されている。

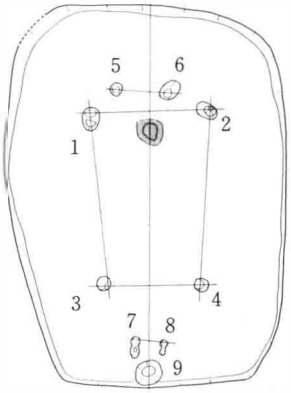


図６　２号住居址（１：100）

出土遺物

土器(図25～29・42・43)・ミニチュア土器(図52―６)・土製円板(図52―14・21～23)・凹石(図54―４・５)が出土している。

覆土上面から土器破片が極めて多数包含される状況にあり、検出遺構中最多の出土量となっている。復元の結果ほぼ完形となる土器が数個体含まれるものの、いずれも原形をとどめた形での出土ではなく、その他多数の土器破片と混在して検出されており、住居址埋没過程に廃棄された遺物として位置付けられる。

3号住居址(図７・17)

中心軸を北西方位にとり、9.4×6.5mの隅丸長方形を呈する大形住居であり、検出された住居址中最大規模になる。東隅及び南隅は構築物と用水路により破壊を受けて失われている。また東壁には、床面より５～10cm高い張り出し部分が認められる。別遺構が重複している可能性も考

慮されるが、その切り合い関係は把握されていない。検出面からの掘り込みは深さ40～20cmを測り、床面の状況は壁際を除いて堅緻である。また、住居西隅には10cmの高まりを有するベッド状の貼り床が、東壁際には深さ10cm内外の周溝が存在する。主柱穴には、短辺2.9～3.0m・長辺4.3～4.5m の6本配列(1～6)と、その内側に短辺をやや短くさせた4本配列(7～10)とが認められる。支柱穴には、主柱配列北側(11・12)と、南側(13・14、15・16)とに2本1対のものが存在する。後者は50cm隔てて2対存在し、いずれも楕円形の斜めの掘り込みによっている。また、南壁際には径50cm・深さ40cmのピットが存在し(17)、出入口施設の存在が予想される。北壁のやや隅寄りには貯蔵穴と思われる長径1.5m の楕円形ピットが存在する(18)。深さは20cmを測り底面には薄い炭化物の堆積を認める。炉は径30～40cm、深さ5cm内外の円形地床炉が3つ連なった状態にある。いずれも底面はよく火熱を受けて焼土塊を残すが、このうち、最終的に使用された状況を示すものは、主柱穴北側短辺寄りのものであることが土層断面の観察により判断される。この点から、3つの炉は同時に使用されていたのではなく、時間的経過により次第に北側へと移動していった点が推定される。

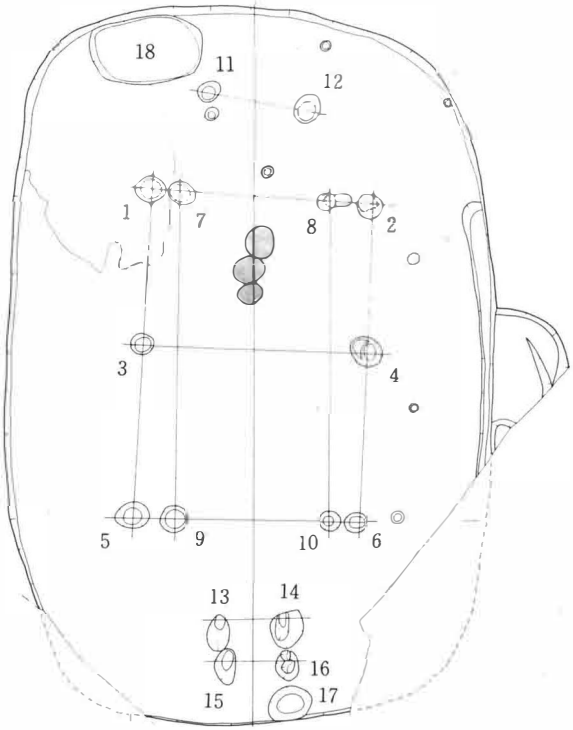


図7　3号住居址（1：100）

主柱あるいは支柱配別に見られる二重構造、炉の重層性、貯蔵穴、ベット状施設など、本住居址には他に見られない構造上の特殊性が抽出される。柱穴の二重構造と炉の重層性から、補修や改築を経ながら連続して長期にわたり住居が使用された点が確認される。住居址の規模も考えあわせて、集落内で特別な性格をもって営まれた住居址である可能性が強い。

出土遺物

土器(図30～32・44～46)・ミニチュア土器(図52―1～5・9～11)・土製勾玉(図52―12)・土製円板(図52―15～20・25～34)・敲石(図53―2)・剝片が出土している。

出土量は豊富ながら、住居の規模を考慮すれば多量とは言えない。土器破片中には2号住居址出土個体と接合するものが含まれており、南壁付近から復元可能な個体が集中して検出されている。また、祭祀遺物として位置付けられる土製品(ミニチュア土器・土製円板・土製勾玉)が多数出土している点は特筆され、住居構造に見られる特殊性とともに注意される。

4号住居址(図8・18)

中心軸を北西方位にとり、8.2×6.6mの隅丸長方形を呈する大形住居であり、3号住居址に次ぐ規模を有する。検出面からの掘り込みは、北壁において深さ25cmを測るが、南壁は検出時には既に失われた状況にあり壁の立ち上がりを検出するには至っていない。床面の状況は壁際を除いて概ね堅緻である。主柱穴(1～6)は短辺3.5～3.0m、長辺5.2～4.9mの6本配列になる。支柱穴には、住居中心軸上のもの(7～9)、南壁の出入口施設に関連すると思われる2本1対のもの(10・11)、壁際に不規則に配列されるもの(12～16)が認められる。炉は直径45cm・深さ5cmほどの円形の凹みを呈し、底面は火熱により焼土塊が形成されている。

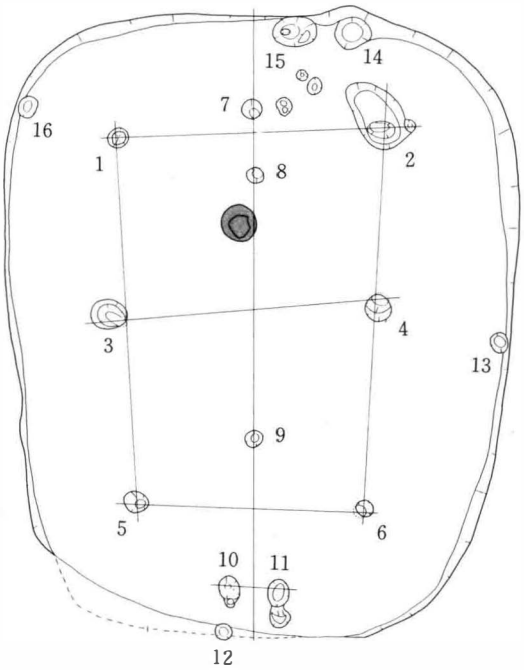


図8　4号住居址(1：100)

出土遺物

土器(図33～35・47～49)・ミニチュア土器(図52―7)・磨製石鏃(図53―3)・石核(図54―1・2)・剥片(図53―8・9)が出土している。出土量は豊富であり、覆土中に土器破片多数が包含される状況にある。床面出土の土器は比較的原形を保つものが多い。

5号住居址(図9・19)

中心軸を北西方向にとり、7.9×5.1mの隅丸長方形を呈する大形住居である。南隅は検出時に既に失われた状態にあるが、検出面からの掘り込みは、北隅で深さ20cmを測る。床面は軟弱であり、住居址自体が礫層中に構築されているため、凹凸の激しい状況にある。主柱穴(1～4)は短辺1.9～1.4m、長辺4.0～3.7mに配列され、大形住居のうち唯一の4本配列による。支柱穴には、主柱配列北側の中心軸上(7)と南側に2本1対のもの(6・7)とが認められる。また後者に接した南壁際には、径50cm・深さ30cmの円形ピットが存在し、出入口に関連した施設を予想させる。炉は径40cmの浅い凹みを呈するものの、炭化物

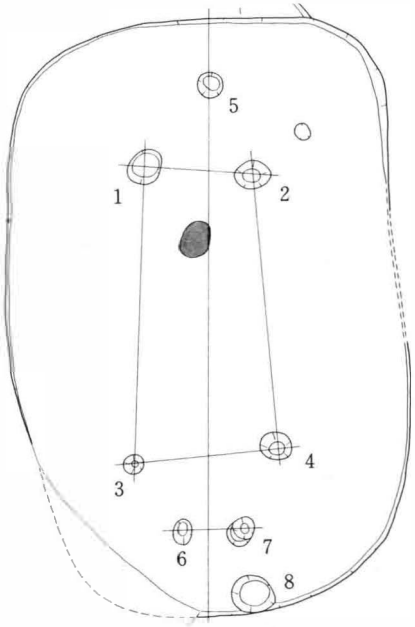


図9　5号住居址(1：100)

の堆積は少なく底面もさほど火熱を受けた状況にはない。

出土遺物

土器(図36・49)・磨製石鏃(図53―5・6)が出土している。出土量は僅かであるが、比較的原形をとどめた土器破片が多く床面及び床直上に位置している。

6号住居址(図10・20)

中心軸を北西方位にとり、4.3×3.4mの隅丸長方形を呈する小形住居である。7号住居址とは東壁を接して構築されているが、同部分に溝状の攪乱が及んでいるため、その切り合い関係は明らかではない。また、西隅も攪乱により失われている。検出面からの掘り込みは深さ10～5cmを測り、床面の状況はやや軟弱である。主柱穴(1～4)は短辺1.6～1.3m、長辺2.0～1.9mに配列される。支柱穴には、主柱配列北側の中心軸上(5)と南側に2本1対のもの(6・7)とが認められる。炉は長径40cm・深さ2～3cmの楕円形を呈し、底面はよく火熱を受けて焼土塊が形成されている。

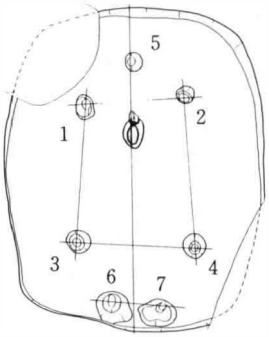


図10　6号住居址（1：100）

出土遺物

土器(図37～39・50)が出土している。

出土量は極めて豊富で、覆土上面から土器破片が多数包含される状況にある。特に北壁際では大破片が集中して見られ、住居址埋没過程に投棄された出土状態を示している。

7号住居址(図11・21)

中心軸を北西方位にとり、5.7×4.4mの隅丸長方形を呈する小形住居である。6号住居址とは西壁を接して構築されているが、同部分に溝状の攪乱が及んでいるため、その切り合い関係は明らかではない。また、東隅付近は掘り込みが浅く壁を検出するには至らず、北隅も攪乱により失われている。検出面からの掘り込みは、最大で深さ21cmを測り、床面の状況は概ね堅緻である。主柱穴(1～4)は短辺0.9～0.8m、長辺2.9～2.8mに配列され、著しく短辺の短い長方形を呈する。支柱穴には、主柱配列の北側(5・6)と南側(7・8)とに2本1対のものが見られるほかに、北壁際に径15cm・深さ10cm程度の小穴が存在する(9～12)。南側の2本1対支柱に接した南壁際には、径75×45cm・深さ20cmの楕円形ピット(3)が存在し、出入口に関係した施設を予想させる。炉は長径70cm・深さ10cmの楕円形を呈し、南縁に棒状の川原石を埋置し

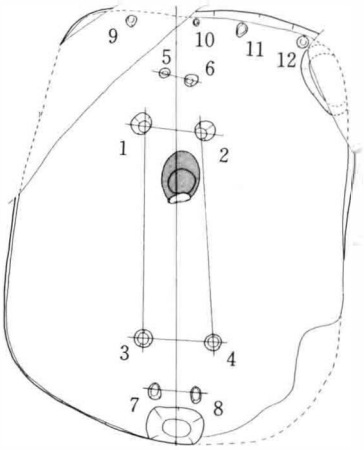


図11　7号住居址（1：100）

て炉縁石としており、底面は火熱により焼土塊が形成されている。

出土遺物

土器(図39・40・50)が出土している。

出土量は豊富であり、床面上から復元可能な土器破片が一括して検出され、住居廃絶直後に遺棄されたものと判断される。また、炉を中心とした床面には、断片的な炭化材が散在しており、他の住居址には認められない埋没状況を示している。

8号住居址(図15)

中心軸を北西方位にとる大形住居と推定されるが、西隅の一部を残して大部分が攪乱により破壊されている。検出面からの深さは、最大で20cmを測り床面はやや軟弱である。床面には深さ10cm程度の凹みが数ヵ所に存在するものの、いずれも柱穴とは認め難い。

出土遺物

土器(図32)・凹石(図54―3)・磨製石鏃(図53―4)が出土している。

出土量は僅かである。磨製石鏃・凹石は床面から若干浮いた状態で出土した。

9号住居址(図12・22)

中心軸を北東方位にとり、5.1×3.8mの隅丸長方形を呈する小形住居である。検出時には既に床面が露出した状況にあり、東壁の立ち上がりは確認されず、検出面からの掘り込みも最深で5cmを測るのみである。床は黒褐色土中に貼床されたもので、部分的に堅緻な床面が遺存している。主柱穴(1～4)は短辺1.7m・長辺2.3～2.1mに配列される。支柱穴には主柱配列の西側に2本1対(5・6)のものが確認される。炉は直径60cm・深さ5cmの凹みを呈し、西縁に棒状の川原石を埋置して炉縁石としており、底面の中央部分には焼土塊が認められる。

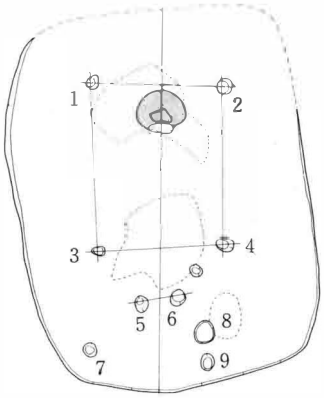


図12　9号住居址(1：100)

出土遺物

土器(図40・51)が出土している。

出土量は少ないが、出入口部分と推定される西壁際床面から、壺下半部の完形品が検出されている。

10号住居址(図13・23)

中心軸を北東方位にとり4.9×3.9mの隅丸長方形を呈する小形住居であり、南壁の一部が溝状の攪乱により破壊されている。検出面からの掘り込みは深さ10～5cmを測り、床面の状況はやや軟弱である。主柱穴(1～4)は短辺1.9～1.6m、長辺2.6mに配列される。支柱穴には、住居

中心軸上のもの(5)と西壁の出入口施設に関連すると思われる2本1対のもの(6・7)とが認められる。炉は長径60cm深さ5cmの楕円形を呈し、西縁に板状の川原石を埋置して炉縁石としており、底面は火熱により焼土塊が形成されている。

出土遺物

土器(図41・51)・ミニチュア土器(図52―8)・土製円板(図52―24)・剝片が出土している。

覆土中に包含される土器破片の量は少数であり、いずれも原形をとどめるものではない。

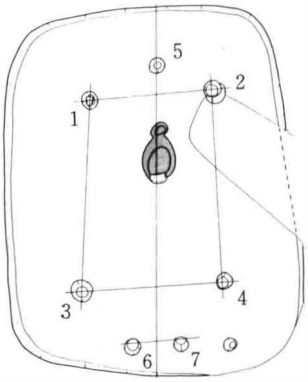


図13　10号住居址（1：100）

（2）住居址の構造

検出された10軒の住居址は、中心軸方位を北西あるいは北東方位とり、比較的規則性を持った配列状況を呈する。住居址には、壁を接して構築された例(6・7号住居址)が存在するものの、完全な重複関係は認められず、新旧の住居が相互にその存在を意識した上で連続して構築された状況を想定して大過無いものと考える。土器の示す年代にさほどの隔たりが存在しないことや、2・3・8号住居址に認められた土器破片の接合関係から、住居址同時存在あるいは廃絶時期の同時性は立証されることとなり、2～3世代の間に完結した住居址群・集落として把握される。次に住居址の構造の在り方についてまとめておきたい。

平面形

隅丸長方形を呈し、短軸と長軸との比は、最大値1：1.50(5号住)、最小値1：1.21(4号住)、平均値1：1.34となる。規模による比率の異同は認められずほぼ一定の規格に基づいていることが指摘できる。

規模

各住居址は、長軸8～9mを測る大形住居(3～5号住居址)と、長軸5m内外の小形住居(2・6・7・9・10号住居址)とに分類することができる。床面積をみると、大形住居のうち最大規模の3号住居址は約56㎡、小形住居のうち最小規模の2号住居址は約16㎡となり、その格差は最大で3倍以上に達することになる。大形住居に対しては、3号住居址に認められたとおり、集落内での特殊な機能を設定できる可能性がある。また大形住居と小形住居の配列に相互の規則性を求めることも可能となり、集落内において両者が機能を分担しながら共存していた状況を設定することができよう。ただし、調査範囲が集落内の限られた部分にとどまるため、その有機的

関係については推測の域を出ない。

柱穴

主柱穴と目されるものは、小形住居が4本柱となり、大形住居のうち3・4号住居址は6本柱、5号住居が4本柱である。30～50cmの深さで掘り込まれ、住居平面形の対角線上に長方形に配列される。ただし、5号住居(大形)・7号住居(小形)は、その対角線上を大きくはずれて、長方形配列の短辺が著しく狭くなる形を呈している。短辺(梁行)の幅は、他の大形・小形住居の約半分の幅に設定されており、その平面形は特異といえる。

支柱穴は、住居の中心軸上に配列されるものと、壁際にそって配列されるものとを抽出することができる。中心軸上の柱としては、出入口と想定される側の住居短辺壁寄りに2本1対の柱穴が普遍的に認められる。更に、出入口とは反対側の住居短辺壁寄りに1本(4～6・10号住)ないし2本(2・3・7号住)の支柱が規則的に配置される。このうち前者については、出入口施設との関連性が重視される。壁際にそって配列された支柱は、4号・7号住居址に認められるものの、配列の間隔には規則性を認めることはできない。

炉

炉は中心軸上に位置するが、例外なく一方の主柱短辺に偏って配置される。一方の主柱短辺とは、支柱によって推定される出入口と反対方向に当る。改築にともない重層的な移動を認める例(3号住居址)を除き、基本的には1住居1炉となる。炉の構造はやや凹みを有する地床炉であり、内部には薄い灰や炭化物の堆積が見られる。長期間にわたり連続的に使用されたことは、底面が2～3cmの焼土塊を形成していることから明らかであり、常時堆積物を除去しながら使用した状況が推定される。また、住居中央寄りの一辺に炉縁石を設ける例も認められる(7・9・10号住)。

出入口施設

住居中心軸上の一方の短辺寄りに普遍的に見られた2本1対の支柱は、長円形あるいは斜めの掘り方によるものが存在し、他の柱穴と比べて特異な形態をとる例が多い。2本の柱穴の間隔は50～80cm、その構造は、細い柱材を斜めに埋置したものと推定される。2本の柱は壁側に傾いて平行に立てられたものであろう。

出入口の施設として確実に把握されているものは、いわゆる「梯子受穴」と呼ばれるものであり、本遺跡例でその可能性を考えることのできるピットを抽出するとすれば、2本1対の支柱に近接して見られるピットをあげることができる。柱穴より浅い掘り込みとなりほぼ壁に接して配置され、中心軸上に位置するもの(2・7号住)とやや一方にずれるもの(3・5号住)とが存在する。内部に遺物の転落が認められることから、柱穴とは性格を異にするものと判断されるが、「梯子受穴」と判断する根拠もない。いずれにせよ、他に出入口施設を示す痕跡が認められない以上、2本1対の支柱と関連させながら出入口施設として積極的にその構造を検討してゆくべきであろう。

（3）住居址構造の比較

今回検出に及んだ住居址は、遺跡が単一時期に限られることも幸いして、その検出状態は良好であり、従来不明であった該期の住居構造がかなり明確になったものといえる。

長野県内の弥生時代住居址(竪穴住居)については、住居址内の炉の在り方や、住居構造全般にわたっての検討がなされており、千曲川流域あるいは天竜川流域における地域性と時間的変遷とが明らかにされている(林・花岡1983、神村1986)。ここでは先学の指摘する点をふまえながら、本遺跡の住居址構造の位置付けを検討しておきたい。

平面形態について

千曲川下流域の北信地方における、弥生時代住居平面形態の変遷は、円形から長方形(隅丸長方形)へという一元的な流れとして把握される。中期栗林式土器段階までは円形(図14―1)が主流であり、後期箱清水式土器段階にいたって長方形(図14―4)へと形態が変化する。中期には円形のほかに楕円形の住居平面形も認められ、長方形への過渡的形態となる可能性がある。本遺跡にみられる長方形住居形態は、既に定型化した在り方を示しているため、後期前半代には円形から長方形への移行が完了していたことを示唆するものとなる。千曲川下流域の弥生時代住居形態における円形から長方形への転換期を求めるとするなら、中期末から後期初頭にかけてその画期を設定することが妥当であろう。

一方、同じ千曲川流域でも、上流の佐久地方においては、中期栗林式段階で長方形・方形(図14―2)が支配的であり、下流域北信地方とは対称的な様相を示す。これは、北関東において栗林式と関連の深い竜見町式段階に長方形が主流となっていることと共通する。また、土器型式を異にする南信地方天竜川流域においても、中期後半段階には長方形(図14―3)が一般的となっている。このことから、長野県内に限れば、中期―円形→後期―長方形という住居形態の変遷をたどる地域は、千曲川下流域北信地方のみに限られることとなる。

神村氏は長野県内の弥生時代住居址を総合的に検討し、地域性と時間性とを抽出するなかでこの傾向を指摘している(神村1986)。中期後半代には長方形住居形態が主流である天竜川流域に比較して、千曲川流域では下流域ほど円形住居形態の占める割り合いが大きくなる点を千曲川流域の地域性として位置付け、保守的一面として理解されている。しかしながら、中期前半代の資料が不鮮明である現時点では、長野県内における弥生中期の伝統的住居形態を円形としてとらえることには疑問が残る。むしろ、東日本において長方形を伝統的住居形態として位置付ける（宮本1986)ことが妥当となれば、中期段階の円形住居形態は西日本的な一面としてとらえることが可能となってくる。中部高地～北関東地方の弥生中期後半代において、千曲川下流域のみに円形住居が存在する特殊性については、地域単位で縄文晩期以降の住居形態変遷が再検討されたうえで評価されるべきと考える。

炉の配置について

千曲川下流域での住居内炉配置を見ると、弥生中期栗林段階までは、円形住居のほぼ中央部に炉の位置を設定していることが確認される(図14―1)。千曲川上流域あるいは天竜川流域の方形・長方形住居においても、炉が中央部に配置されることは一般的と言える(図14―2・3)。これに対して後期段階における炉の配置は、千曲川流域・天竜川流域を問わず主柱短辺の間か、更に壁よりに偏った中心軸上に見られる(図14―4～6)。この点から、住居址内での炉の位置は弥生後期に至って住居中央部から次第に壁際へと移動するという法則性が導かれることとなる。本遺跡に見られる主柱短辺に偏った炉の配置は、炉が中央部配置を外れて移動を始める第1段階の形態として位置付けられよう。

千曲川流域、あるいは長野県内における弥生時代住居址内炉配置の時間的移動については、既に指摘されるところであり(林・花岡1983、神村1986)、この傾向は北関東樽式土器段階の住居構造においても指摘されている(高崎市教委1979)。時間的経過とともに顕著となる炉の壁際への移動は、住居構造としては特殊な炉の配置であり、その傾向の地域的偏在について、弥生後期中部高

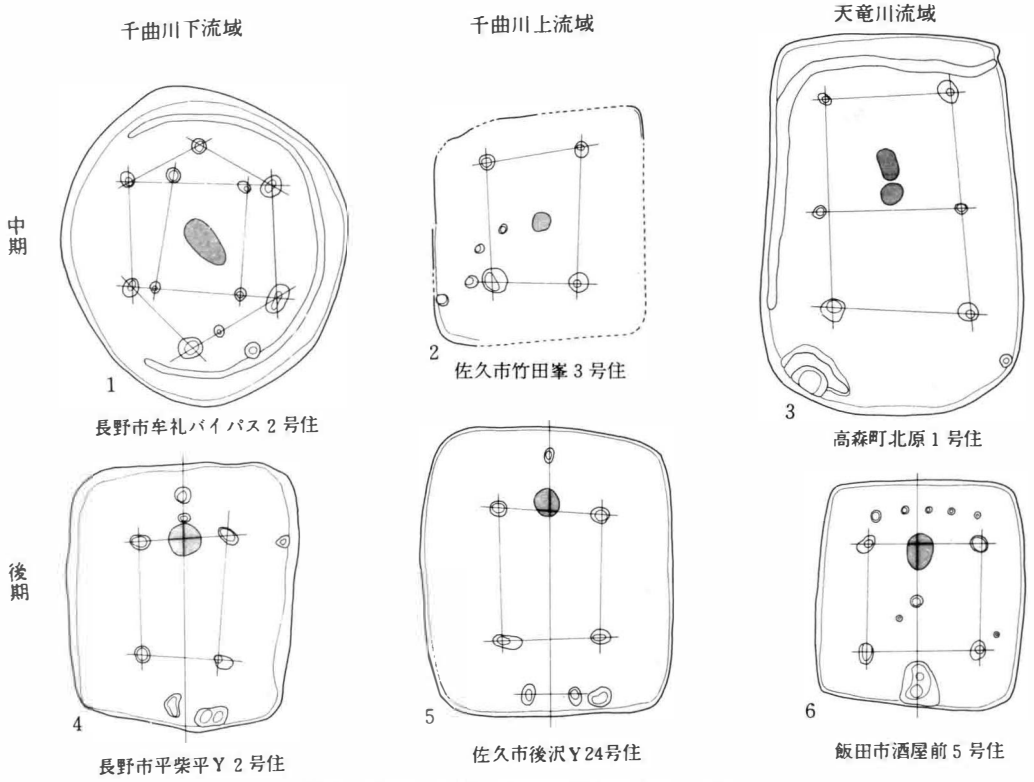


図14　長野県内の弥生時代住居址（1：150）

地・北関東の中部高地型櫛描文により包括される土器群と関連させる理解が示されている(井上1983)。また、炉の配置以外にも、他地域に見られない埋甕炉や石囲い炉の存在、あるいは複数の炉を設置する傾向について、地域単位での出現比に格差が認められることが明らかにされている。これらの炉構造の地域性も関連させれば、炉の配置をめぐる理解には更に興味深い問題が内包されているものといえよう。

2本1対の支柱について

出入口施設に関連すると思われる2本1対の支柱を有する住居は、千曲川上流域の弥生中期後半には出現しており(林1986)、後期箱清水段階においても継続して存在することが確認される(図14—5)。また群馬県においても、弥生後期に同様の住居構造が散見されるところであり、千曲川流域から北関東にかけての長方形住居に共通した支柱形式として現われることが把握される。ただし、炉の配置においては共通性が認められる天竜川流域には、この支柱形式を採用した住居構造は認められない。この支柱形式が主流となる地域と時間の関係は、本遺跡の段階を前後する時期に時間軸が設定されると思われるが、地域性については更に検討を加えることが必要である。

まとめ

以上項目別に住居址の構造について述べた。比較の対象を中部高地から北関東の弥生中期後半～後期に絞ってみたが、住居平面形態・炉配置・支柱形式と出入口施設など、更に系譜と分布についての分析が進めば、そこに興味深い事象を提示することが可能となろう。言うまでもなく、比較の対象とした地域と時間は、「中部高地型櫛描文」により特徴付けられる土器群あるいは親縁の土器群の分布域である。その分布域内における弥生後期住居構造が、共通の「住居型」に基づく点は井上氏により指摘されるところである(井上1983)。井上氏の分析は、炉の配置を基準として住居型A～D類を設定し、弥生後期関東地方における「住居型」の地域性を抽出したものであり、そのなかで、B・D類が中部高地型櫛描文と分布を一致させている点を明らかにしている。「住居型」の地域性や炉の複数化から婚姻形態・集団関係へと論が進められていくが、その過程で把握された土器様相と「住居型」との密接な関係は、土器様相から認識された地域性に対して、住居構造の側面から提起される新たな視点を加味したものとして高く評価される。

今後、土器の型式学的研究と対比し、地域・時間を更に明確にしながら、地域間にあらわれた住居構造の共通性あるいは時間的な構造変化の方向性を検討することが課題となるが、住居構造の分析が、弥生時代中部高地・北関東の社会動態を理解するうえで有効な方法の一つとして位置付けられる可能性は高い。

(青木)

引用参考文献

井上尚明　1983　「関東における後期弥生集落の一様相」『研究紀要1983』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

神村　透　1986　「長野県の弥生住居址に見る地域性と時代性」『長野県考古学会誌』50　長野県考古学会

林　幸彦　1982　「後沢遺跡」『長野県史　考古資料編　全１巻(２)』

林　幸彦・花岡　弘　1983　「弥生時代の炉」『信濃』35―４　信濃史学会

佐久市教育委員会　1981　『舞台場』

佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財調査センター　1986　『西裏・竹田峯』

笹沢　浩　1982　「平柴平遺跡」『長野県史　考古資料編　全１巻(２)』

高崎市教育委員会　1979　『引間遺跡』

高森町教育委員会　1972　『北原遺跡』

長野県教育委員会　1973　「酒屋前遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　飯田市地内その２　昭和47年度』

長野市教育委員会　1986　『浅川扇状地遺跡群　牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点』

宮本長二郎　1986　「住居と倉庫」『弥生文化の研究』７

林　幸彦　1986　「長野県北西久保遺跡」『弥生文化の研究』７

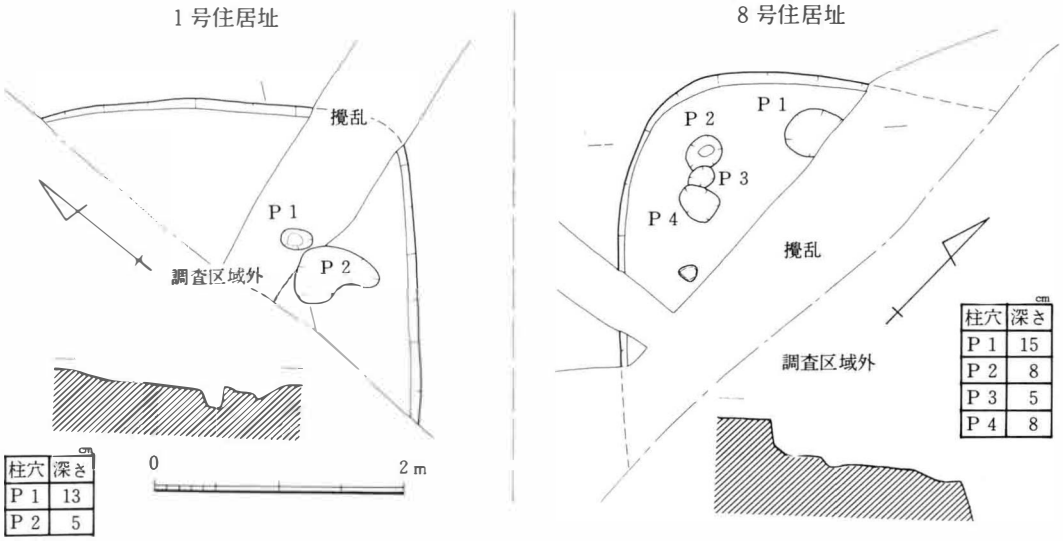
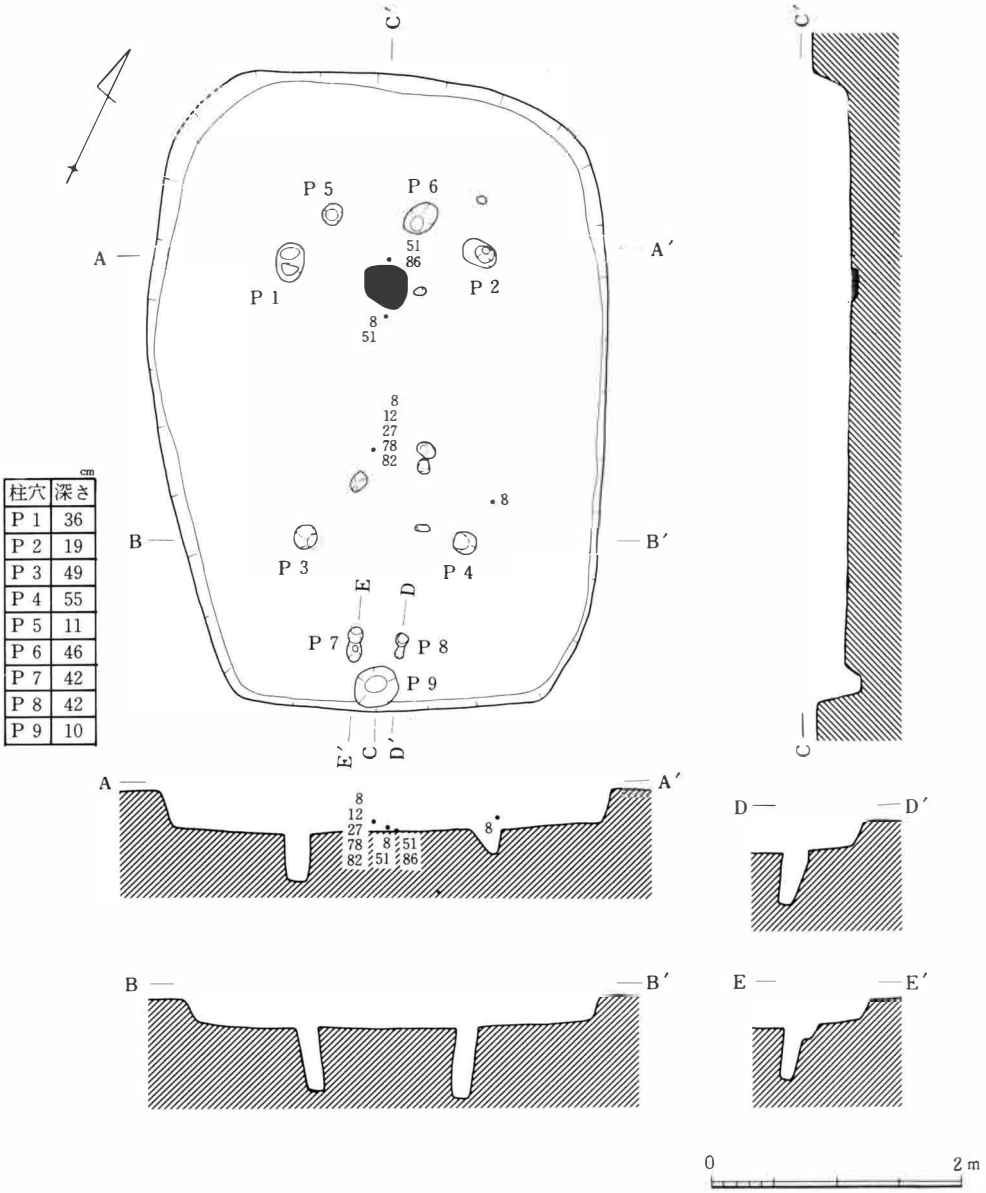
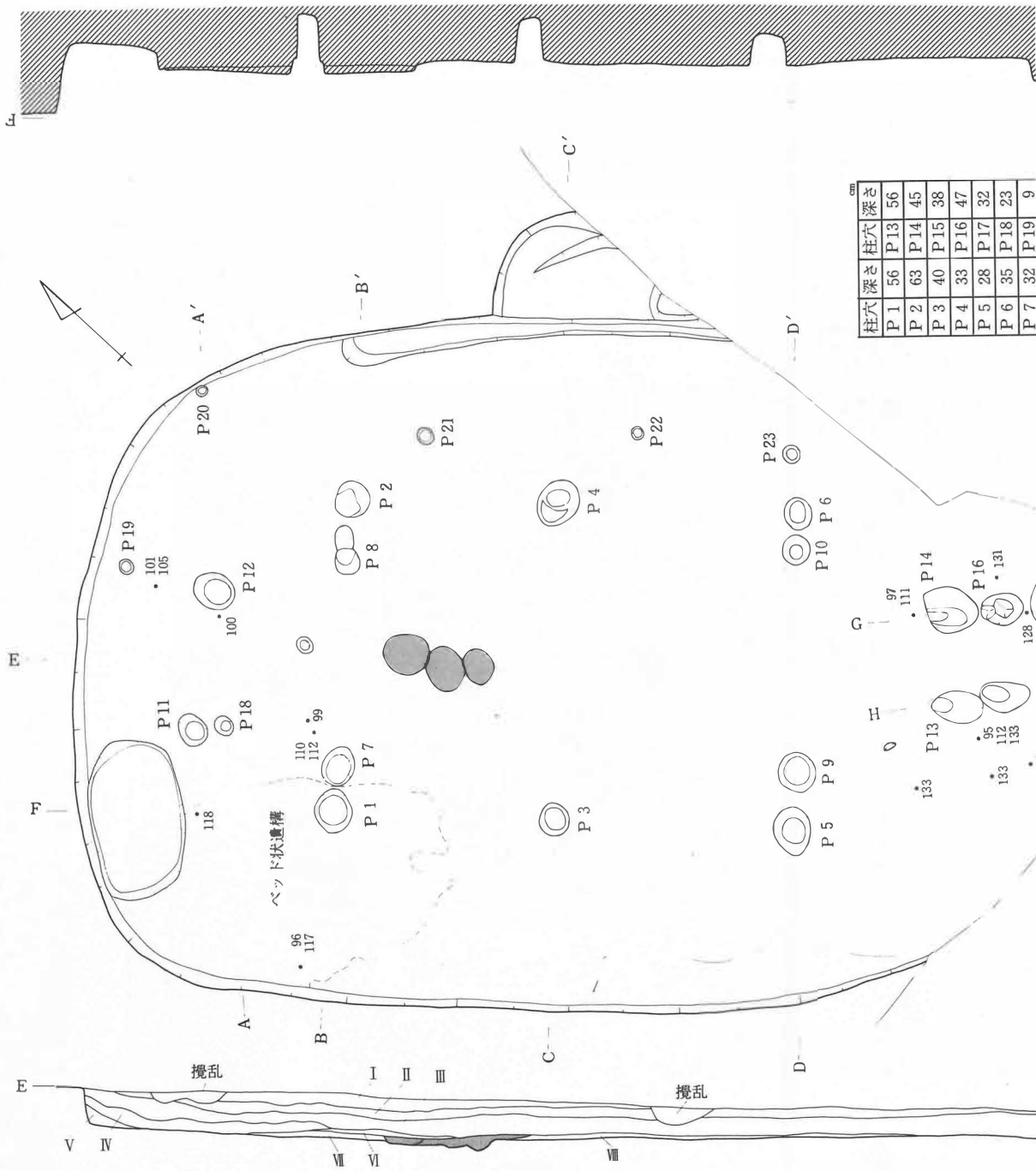


図15　１号住居址・８号住居址実測図（１：60）



柱穴	深さ cm
P 1	36
P 2	19
P 3	49
P 4	55
P 5	11
P 6	46
P 7	42
P 8	42
P 9	10

図16　2号住居址実測図（1：60）



柱穴	深さ	柱穴	深さ
P 1	56	P 13	56
P 2	63	P 14	45
P 3	40	P 15	38
P 4	33	P 16	47
P 5	28	P 17	32
P 6	35	P 18	23
P 7	32	P 19	9

図17　3号住居址実測図（1：60）

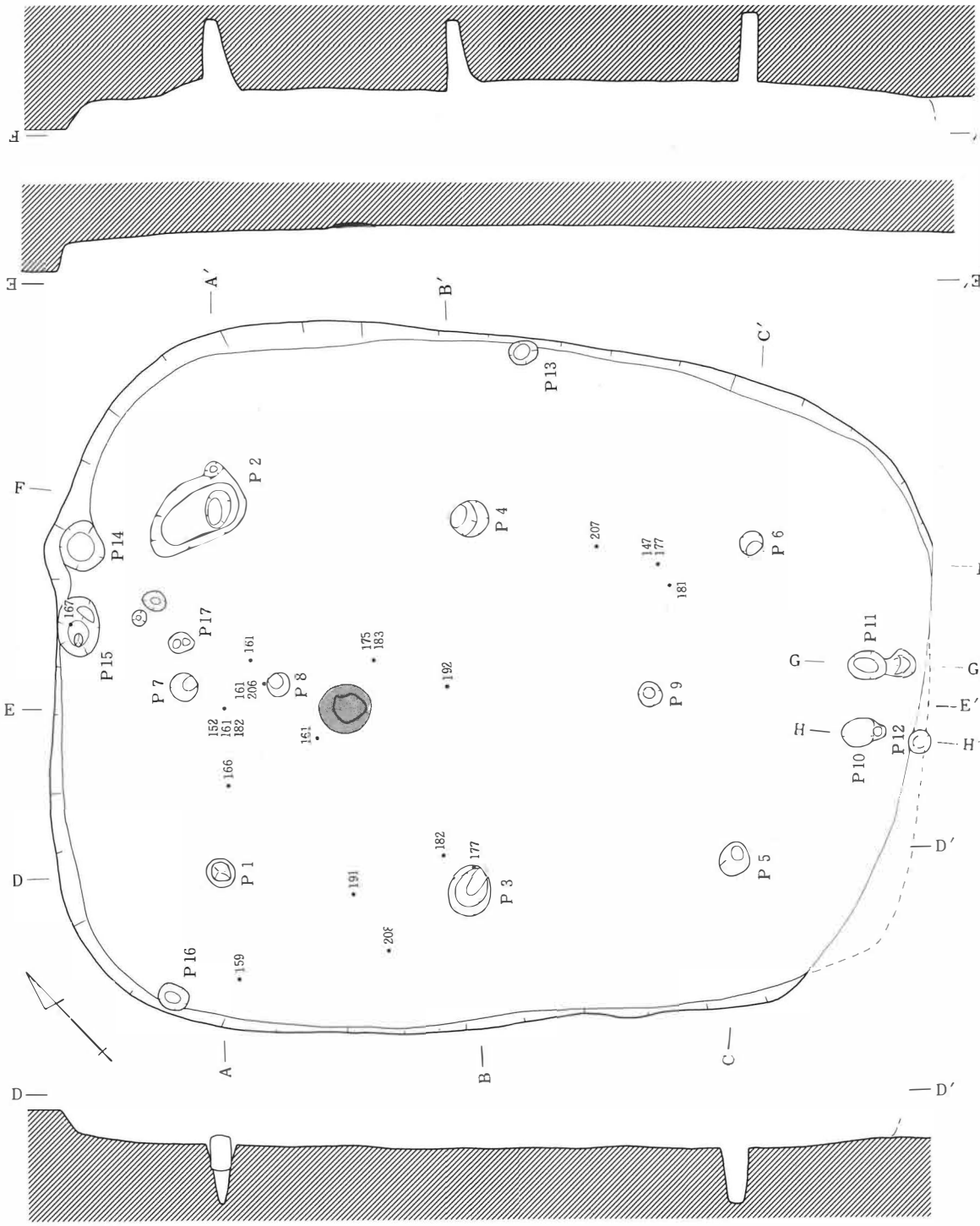
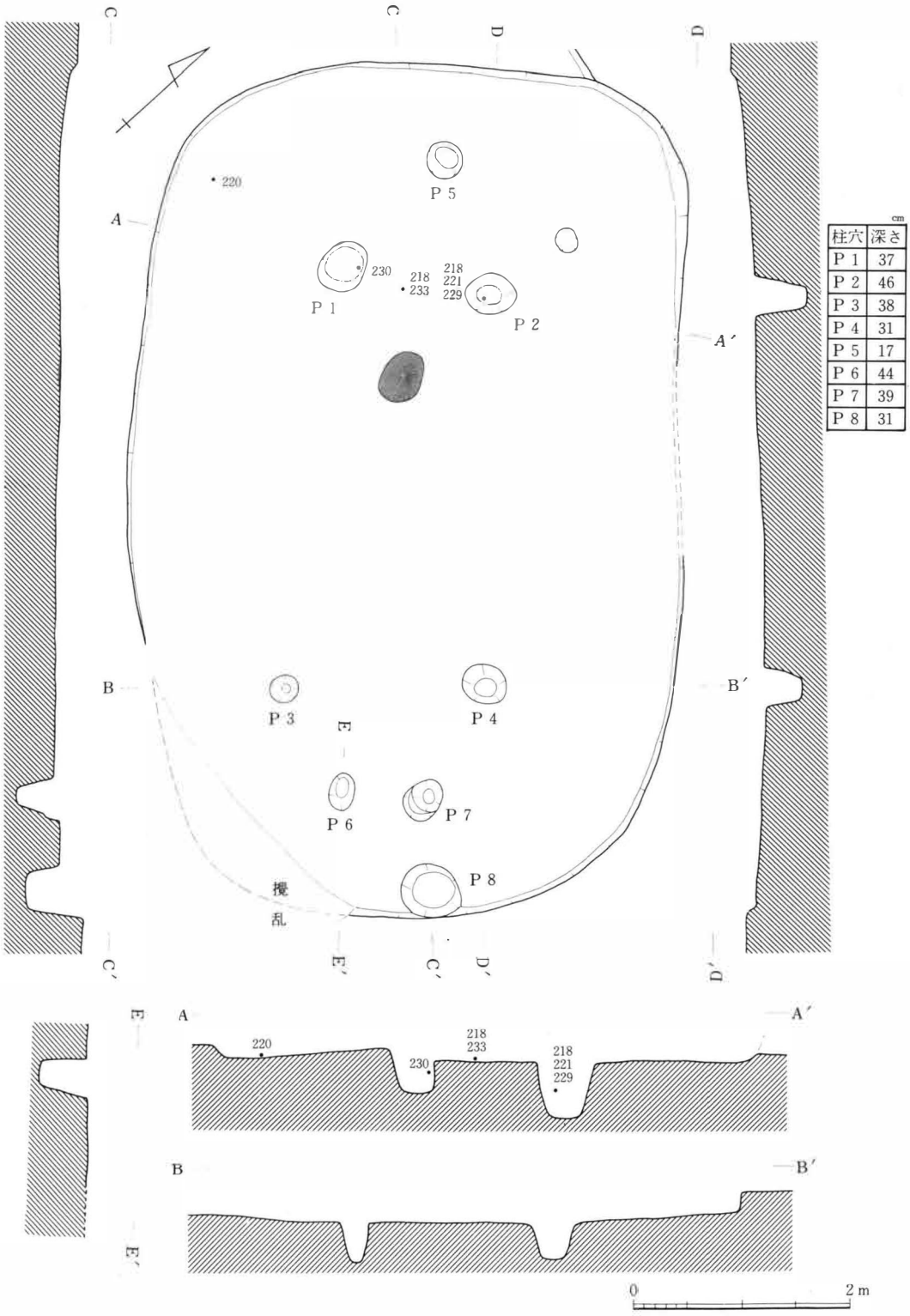
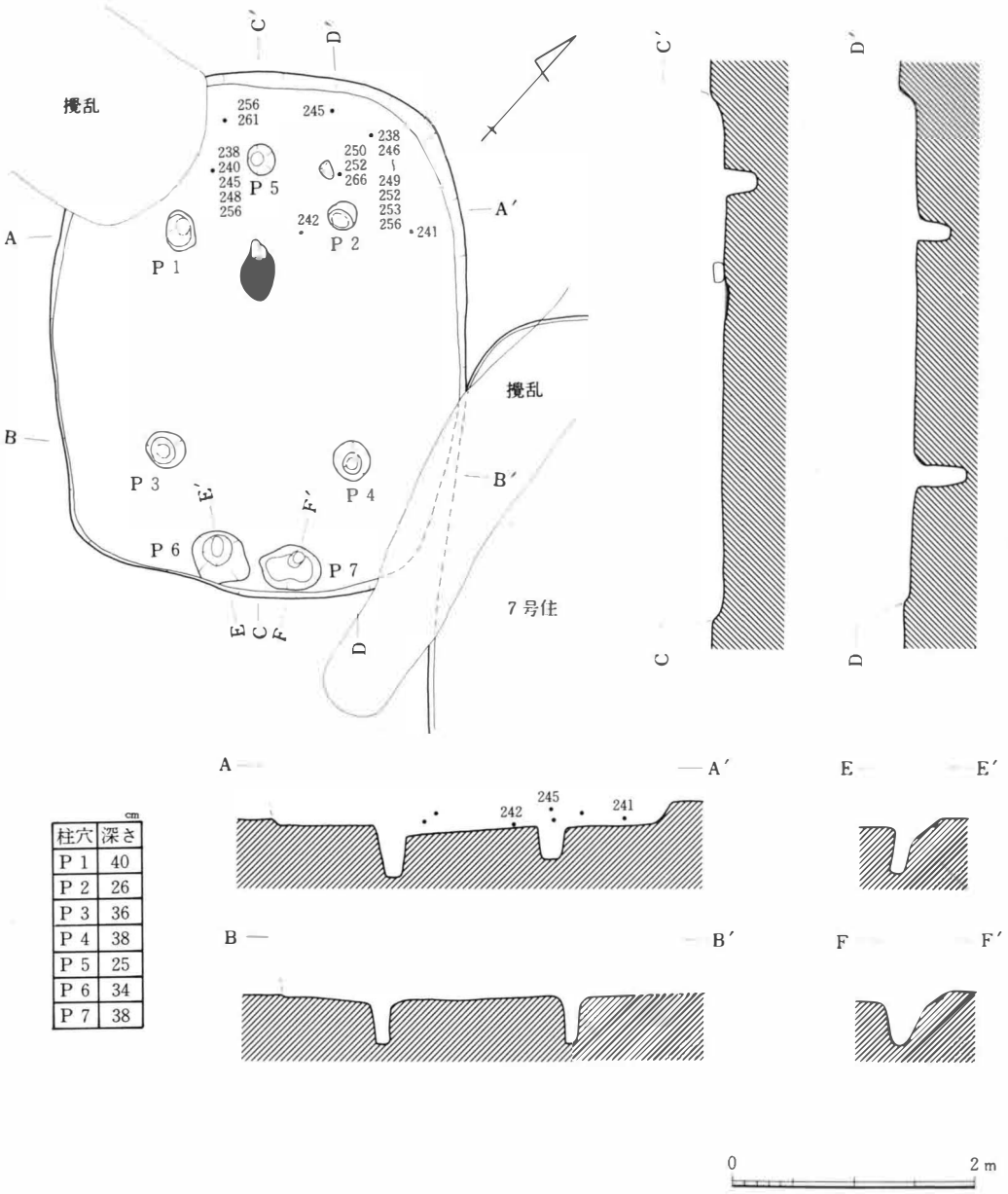


図18　4号住居址実測図（1：60）



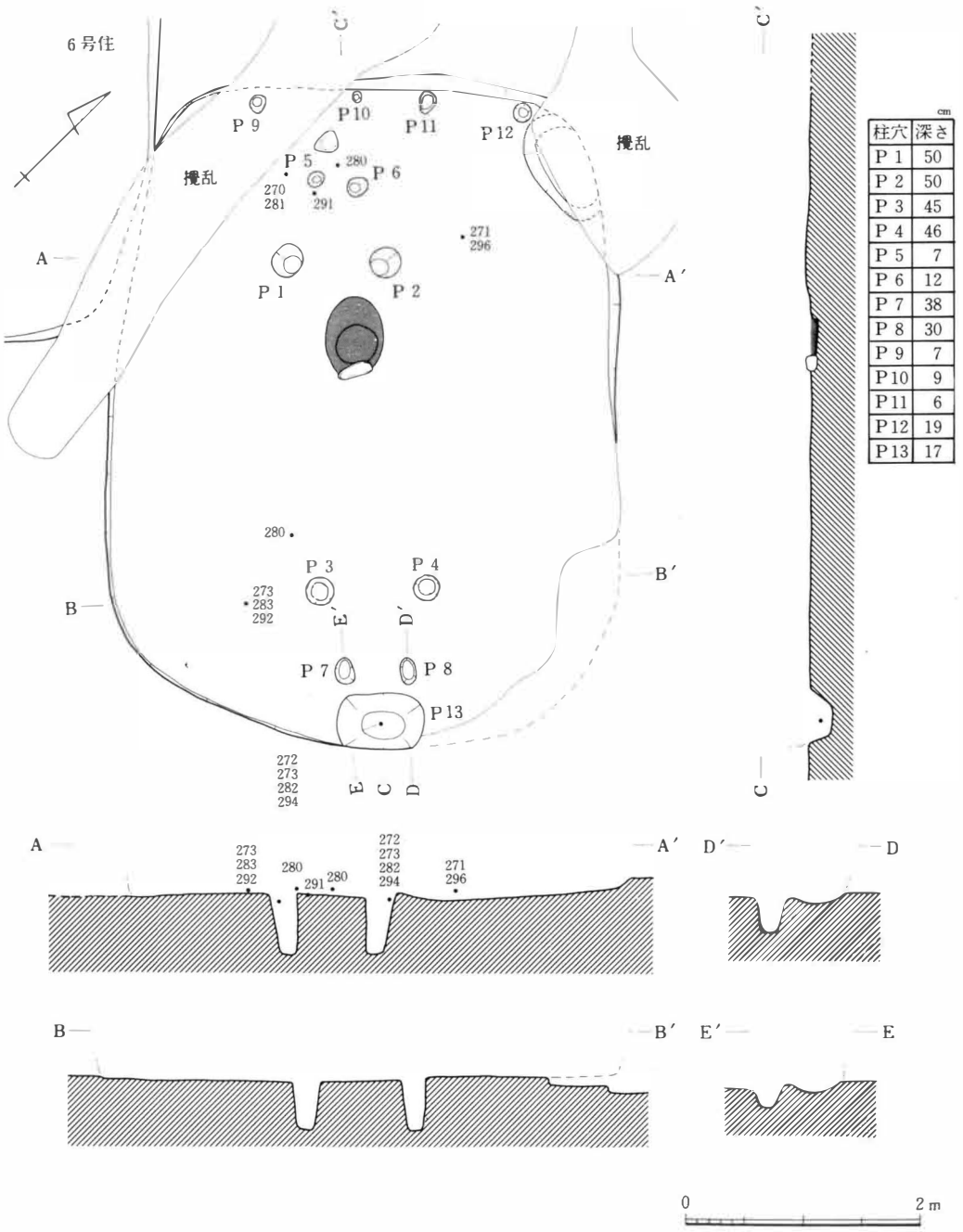
柱穴	深さ (cm)
P 1	37
P 2	46
P 3	38
P 4	31
P 5	17
P 6	44
P 7	39
P 8	31

図19　5号住居址実測図（1：60）



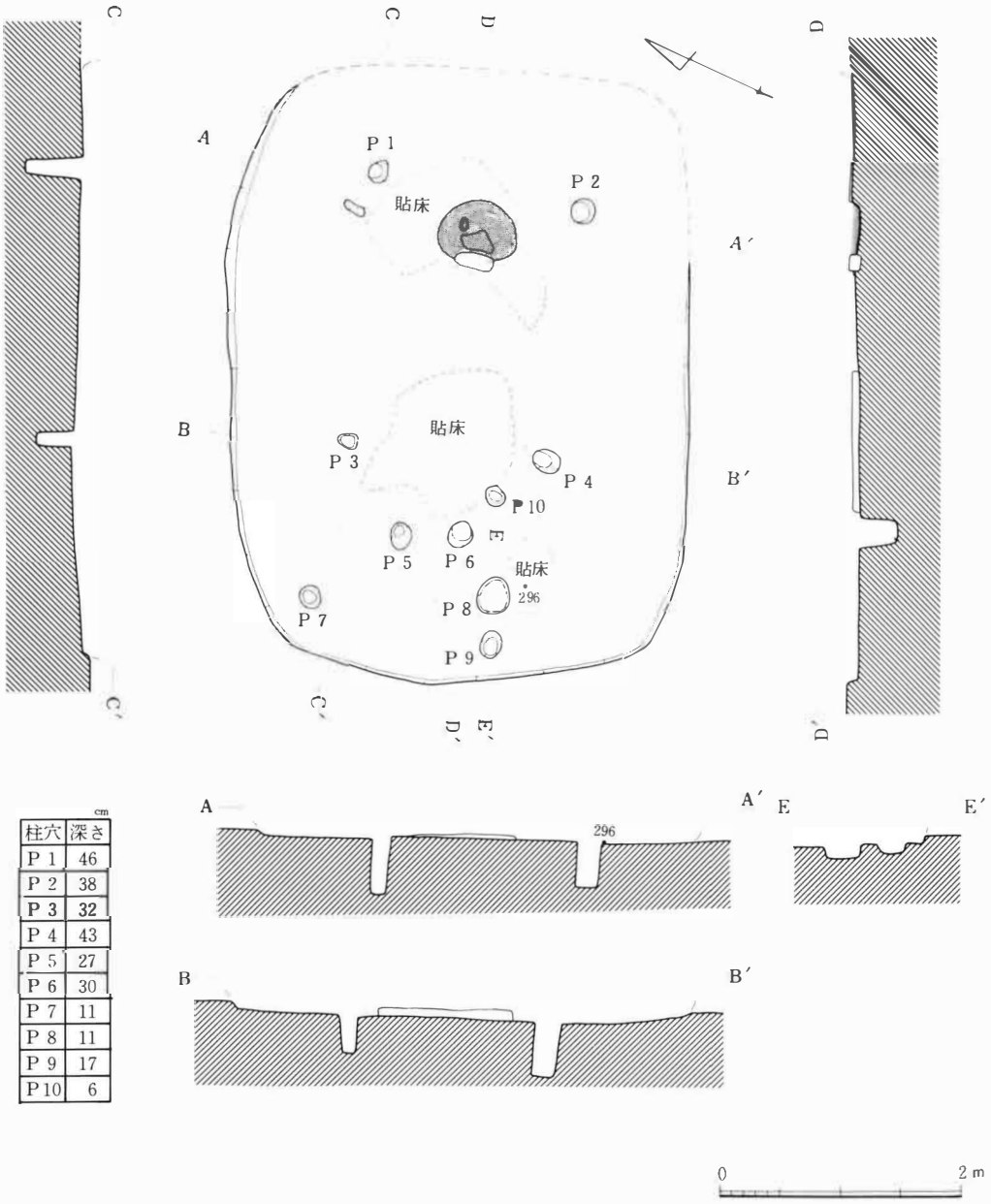
柱穴	深さ cm
P 1	40
P 2	26
P 3	36
P 4	38
P 5	25
P 6	34
P 7	38

図20　6号住居址実測図（1：60）



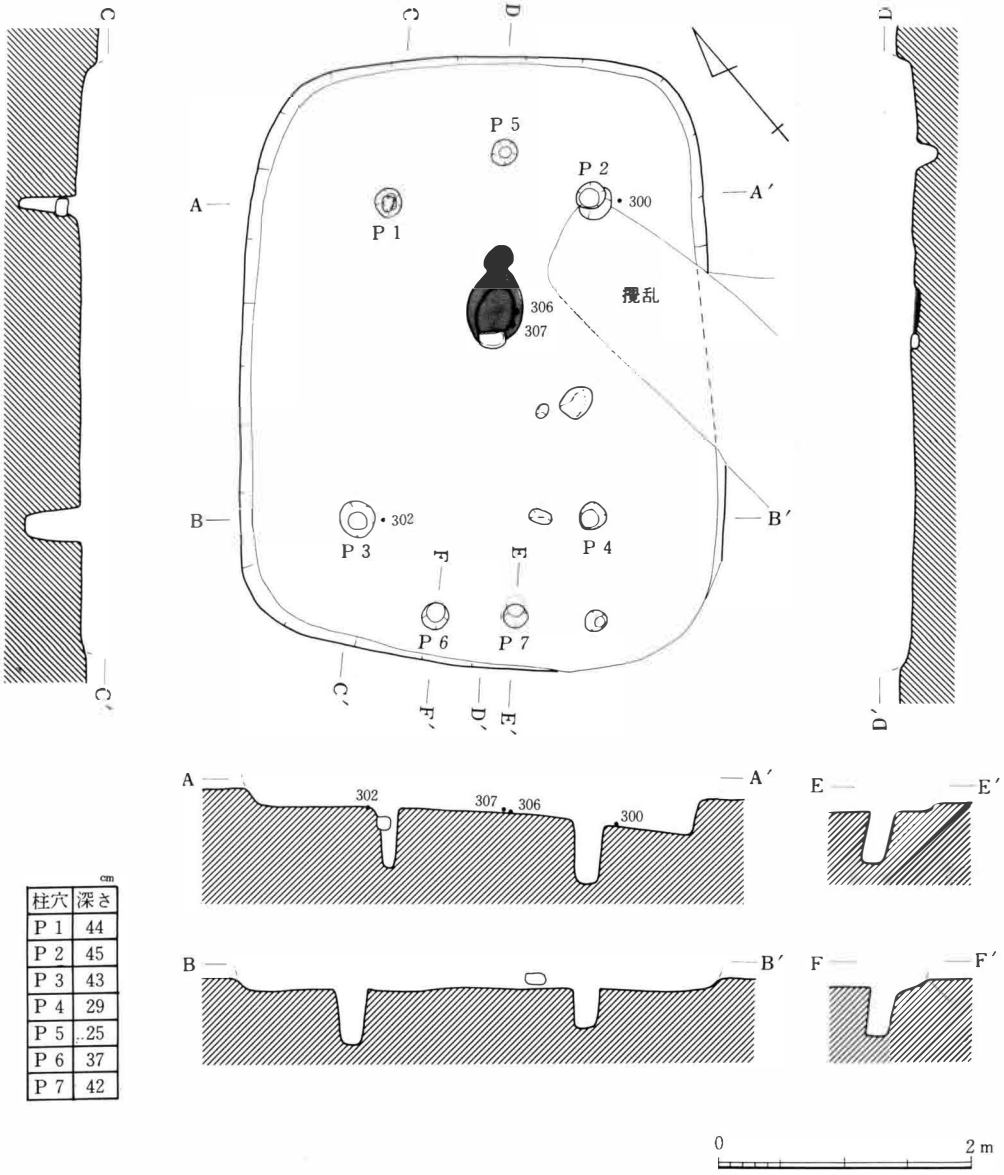
柱穴	深さ (cm)
P 1	50
P 2	50
P 3	45
P 4	46
P 5	7
P 6	12
P 7	38
P 8	30
P 9	7
P10	9
P11	6
P12	19
P13	17

図21　7号住居址実測図（1：60）



柱穴	深さ (cm)
P 1	46
P 2	38
P 3	32
P 4	43
P 5	27
P 6	30
P 7	11
P 8	11
P 9	17
P10	6

図22　9号住居址実測図（1：60）



柱穴	深さ (cm)
P 1	44
P 2	45
P 3	43
P 4	29
P 5	25
P 6	37
P 7	42

図23　10号住居址実測図（1：60）

3　遺　　物

（1）土器―長野吉田高校グランド遺跡出土土器について―

本遺跡からは実測個体のみでも300を上回る当該期の資料としては極めて多数の良好な資料が出土した。これらの資料は全体の様相を単に概観するにおいても、大きな時間差の存在は看取しえず、多くとも2世代といった短い時間幅のなかで把握しうると思われる。

以下、本稿では比較的良好な資料を中心に本遺跡出土土器群の形態分類を行い、その構成を明らかにするとともに、その編年的位置付けについて若干の考察を行い、出土遺物のまとめとしたい。

壺形土器

主として口縁部形態の差異より以下のように分類される。

A類　単純口縁の広口壺で、口縁部は頸部より朝顔状に大きく外反する形態のもの。

A_1類　口縁部が頸部から緩やかな弧を描いて外反するもの(273)

A_2類　口縁部が直に近く立ち上がり、端部付近にて強く大きく外反するもの(8)

B類　口縁部形態はA類と同様であるが、有段口縁(いわゆる翼状口縁)のもの(11)

C類　口縁部が内湾ぎみに受口状に立ち上がる形態のもの(149)

D類　単純口縁でA類に比較して短頸で、口縁部の外反も緩やかな形態のもの。

D_1類　短頸で口縁部は頸部から強いくの字状の屈曲をなして大きく外反するもの(161)

D_2類　口縁部は頸部から緩やかな弧を描いて立ち上がり、短く軽く外反するもの(272)

E類　小型品で文様は施文されず、外面と口縁部内面とが赤彩されるのみのもの(3)

口縁部が朝顔状に大きく外反する形態のA類は、次の箱清水式へのスムーズな推移が考えられる。しかし胴部形態は、胴下位に最大径を有し丸みをもって底部へ収束する形態をとる。この傾向はA～E類のいずれにおいても認められ、箱清水式に特徴的な最大径部分以下が鋭くくびれ、底部へ収束する形態は本遺跡では破片資料でも確認されておらず、この時期の特徴といえる。A_1類のような後期的な太頸の広口壺の出現段階は中期終末、いわゆる栗林Ⅱ式直後形式のなかに求めうると思われるが良好な資料の出土を待ちたい。A_2類は現状では類例が乏しく詳細は不明だが、口縁部が筒状のやや長く立ち上がる形態は中期栗林式期の細口長頸壺の伝統の上に理解することも可能かと思われる。

口縁部が有段口縁もしくは受口状を呈するB・C類も口縁部形態、胴部形態はA類と基本的に同一であり、当該期に普遍的に存在する器種である。ただ箱清水式期に類例の少ない善光寺平では、その消長関係の検討が今後必要であろう。D類はA～C類に比べ、中期的様相を色濃く残すものと理解できる。D_1類は栗林式期の特徴的な細頸壺の系譜上で理解でき、D_2類も中期末のものにその系譜を求めうる。

甕形土器

大型(A)・中型(B)・小型(C)ならびに台付甕(D)が存在しそれぞれが更に細分される。

Aa類　口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部にて内湾ぎみに立ち上がる形態のもの(112)

Ab類　口縁部に明確な段をなして立ち上がる形態のもの(40)

Ac類　単純口縁で頸部から緩やかに外反する形態のもの(225)

Ba類　口縁部は頸部から緩やかに外反し端部にて内湾ぎみに立ち上がる形態のもの(53)

Bb類　口縁部に明確な段をなして立ち上がる形態のもの(140)

Bc類　単純口縁のもの

Bc1類　頸部から短く緩やかに外反する形態のもの(283)

Bc2類　頸部で強いくの字状の屈曲をなして直線的に外反する形態のもの(45)

Bd類　口縁部が頸部より内湾しつつ立ち上がる形態のもの(109)

Ca類　口縁部に明確な段を形成して立ち上がる形態をとり、口縁部に最大径を有するもの(43)

Cb類　口縁部が頸部より短く直に立ち上がり胴上部に最大径を有するもの(280)

Da類　口縁部に明確な段を形成して立ち上がる形態のもの(104)

Db類　口縁部は単純口縁で短く緩やかに外反し、胴上部に最大径を有するもの(51)

Dc類　口縁部形態はDb類と同様だが、胴下半に最大径を有するもの (143)

Dd類　口縁部は頸部より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に最大径を有するもの(315)

形態上の特徴として、A・B類ともに口縁部の頸部からの外反形態に、この時期の特徴が強くうかがわれる。Aa類・Ba類等は中期末においては頸部より短くくの字状に外反し、その後有段部に移行する形態を呈するが、本遺跡例では頸部から直に近く立ち上がった後に緩やかに外反する形態をとり、明らかに口縁部伸長化傾向が認められる。この傾向はBc1類・Bc2類においても同様に認められ、中期から後期箱清水式にかけての過渡期的な口縁部形態と理解できよう。また胴部形態も、胴上半に最大径を有し倒卵形を呈するものが主体を占める点にも、この時期の特徴が強くうかがわれる。

文様については口縁部・頸部・胴部に便宜的に分離して述べる。

口縁部

Aa・Ab・Ba類などの有段口縁のものは、有段部に波状文を施文するもの(43・53・54)、有段部が無文でナデ整形されるのみのもの(40・110・112・177)、口唇部に波状文を施文するもの(112)等が存在する。栗林式においては同部分は縄文を地文に、山形沈線・重山形沈線文が施文されるのが通例であり、波状文が施文されるのは新しい様相である。また中期においては口唇部に縄文、ヘラ刻み文等が施文されることが多いが、本遺跡資料の場合口唇部に何らかの施文がなされるものはもはや例外的存在でしかなく、やはり時間的後出性がうかがわれる。

Bc1類・Bc2類等の単純口縁のものにおいては、口縁部が無文のものが圧倒的に多い。この場合、口縁部はハケ整形後強いヨコナデが行われるのみという共通の特色を有する。有段口縁外面

の施文を除き、中期では口頸部間に文様を施文する意識が基本的には存在せぬことを考慮すれば、これらの資料も中期的伝統のもとに理解できよう。口縁部の伸長化、口唇部装飾の基本的消滅、口縁部無文のものの圧倒的優位といった特徴はまさに中期から後期箱清水式期の過渡的様相ととらえられよう。

頸部

右回りの簾状文を施文するものを基本とし、ほとんどが等間隔止め簾状文である。(174)は左回り簾状文が2段施文され、その下にヘラによる刺突がなされる特異なもので類例は今のところ存在しない。また(45)はT字文と波状文が施文され壺的な文様構成をとる。そのほかT字文B(116)、櫛描直線文(46)等が頸部文様として存在するがいずれも例外的存在である。

胴部

a一胴上半に波状文、下半に羽状条痕文もしくは単斜条痕を施すもの(54・112・53・55)

b一縦位羽状条痕文のみのもの(76)

c一胴上半に波状文を施文するのみのもの(282・283)

に分類できるが量的にはa類が主体を占める。a類の羽状条痕・単斜条痕文は中期的伝統のもとに理解できるが、胴上半に波状文が加わる構成はやはり新しい様相と理解できよう。c類は胴上半に波状文を施文するのみであるが口縁部に波状文が施文されぬ点を除いては、基本的には箱清水式に連なってゆく様相を示している。また中期に特徴的なコの字重ね文は(174)のような特異な例が存在するのみであって、後期初頭においては基本的には消滅しているものといえる。

甑形土器

A類　坏部が底部より内湾ぎみに立ち上がる形態をとるもの(66)

B類　坏部は底部より内湾ぎみに立ち上がり口縁部に至って強く内傾する形態をとるもの(191)

整形はA・B類ともにハケ整形もしくはその後ナデ整形されるのみである。A類は普遍的な形態で、栗林式の最古段階より認められる。B類は今のところ類例がなくやや特異なものである。(192)は甕底部を転用したもので焼成後、内外面より穿孔がなされている。

高坏形土器

A類　坏部が椀形を呈し直口縁をなすもの(84)

B類　坏部形態はA類同様であるが、口縁端部が水平に屈曲しツバ状を呈するもの(133)

C類　小型品で坏部はハの字状に短く直線的に外開する形態を呈するもの(229)

D類　赤彩された台付甕とでも言える形態のもの(230)

主体となるものはA類とB類で、箱清水式期に普遍的な坏部中位に屈曲を有し、口縁部が立ち上がりつつ外反する形態のものは破片資料においても確認されていない。A・B類は口唇部に山形突起を付すものも存在するが特定の傾向は認められない。D類は善光寺平では今のところ類例

が認められず、特異なものといえる。脚部は短くハの字状に開く形態を通例とするが、(90・215)のような脚上部が棒状を呈するものもある。

鉢形土器

A類　坏部が底部より内湾ぎみに立ち上がる形態を呈するもの(125)

B類　坏部形態はA類と同様であるが、口縁部が水平に屈曲してツバ状を呈するもの(208)

C類　底径は口縁径の⅔以上を占め、坏部は直に立ち上がりコップ形を呈する粗製のもの(294)

口縁部付近の破片資料が多く、高坏との区別が不明瞭なものが多いが、A・B類が主体を占める。特に中期的形態ととらえられるB類がかなりの量存在する点特徴的である。

蓋形土器

いずれもやや扁平な蓋部に長めのつまみ部が付く形態をとる。つまみ部の頂部が凹むものとそうでないものがあるが、完形品もなく詳細は不明である。

以上、本遺跡出土資料の形態分類を行い、その構成を明かにしてきた。次にもう一度各遺構出土資料に立ち戻って、その編年的位置について若干述べておきたい。各遺構ごとに資料を概観すると2～4・7号住居址より比較的まとまった資料が出土している。中でも2・3・4号の各住居址資料間には大きな差異は存在せず、ほぼ同一時期の所産ととらえられ、現状では吉田式土器のなかでも最古段階に位置付けうるものと考える。また7号住居址資料は、甕Bc_1類(283)・Bc_2類(286)において、胴部下半の羽状条痕文が消失し、また壺A_1類(273)の頸部文様も、鋸歯文は基本的には消滅することが予想され、かわりに波状文が施文されるようになるという、やや新しい様相が強くうかがえる。しかし依然壺D_2類(276)、鉢B類(291・293)も存在し、甕口縁部は依然無文のまま残されるなど、その差異は2～4号住居址資料と一線を画して理解しうるほど明確なものではなく、同一型式内における新古の様相差としてとらえておくのが妥当であろう。

(千野)

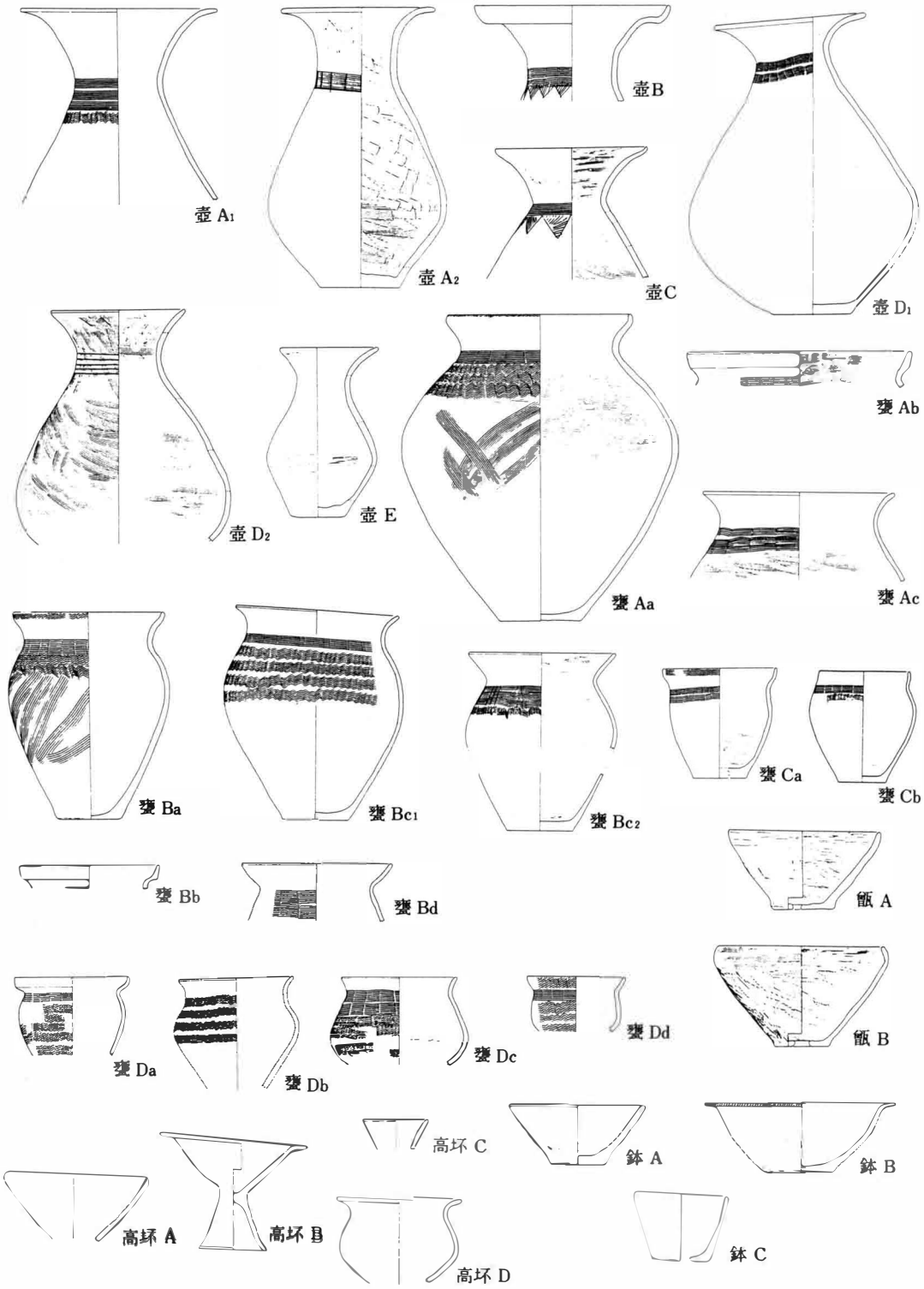


図24　出土土器形態分類（1：8）

2号住

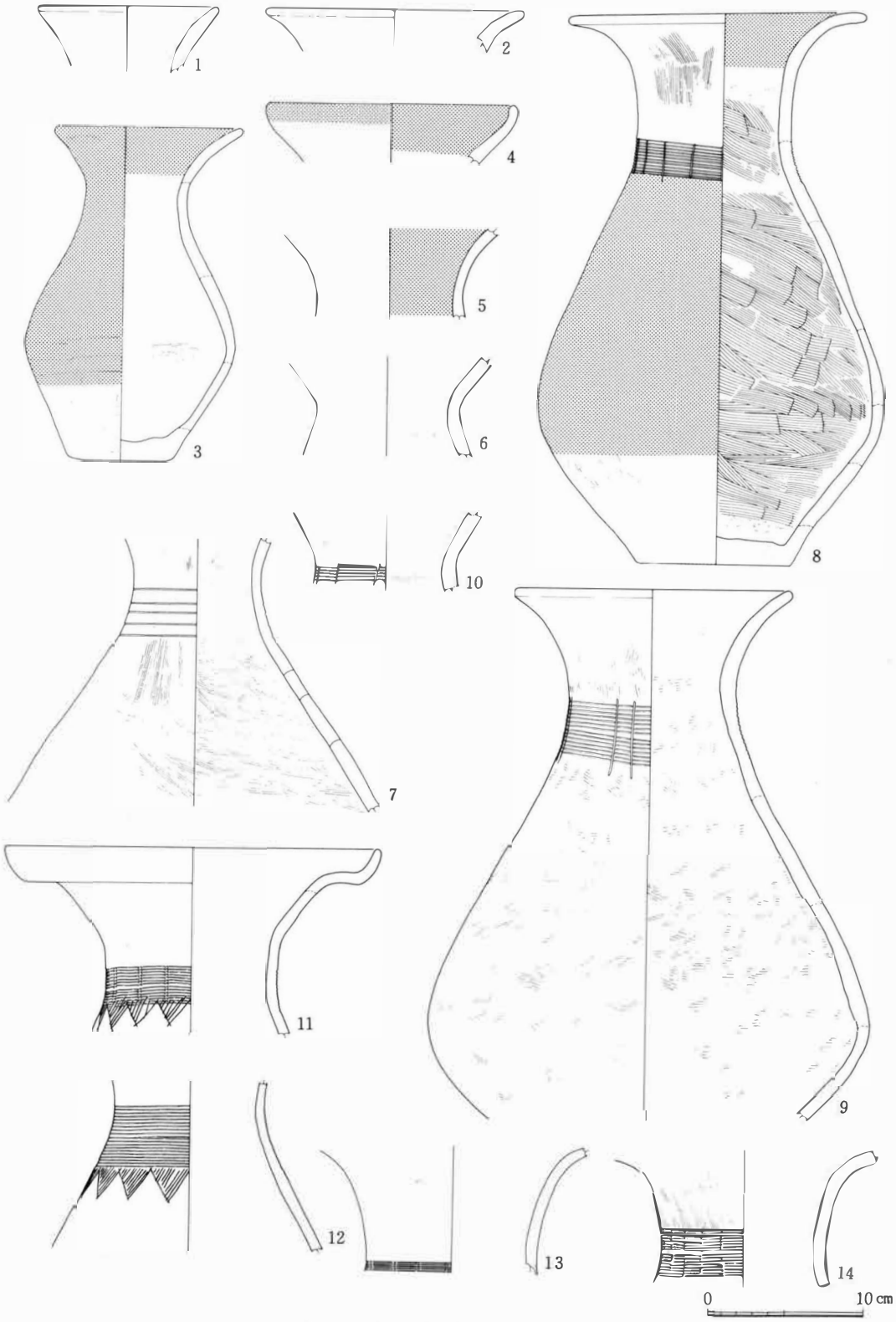


図25　2号住居址出土土器（1）実測図

2号住

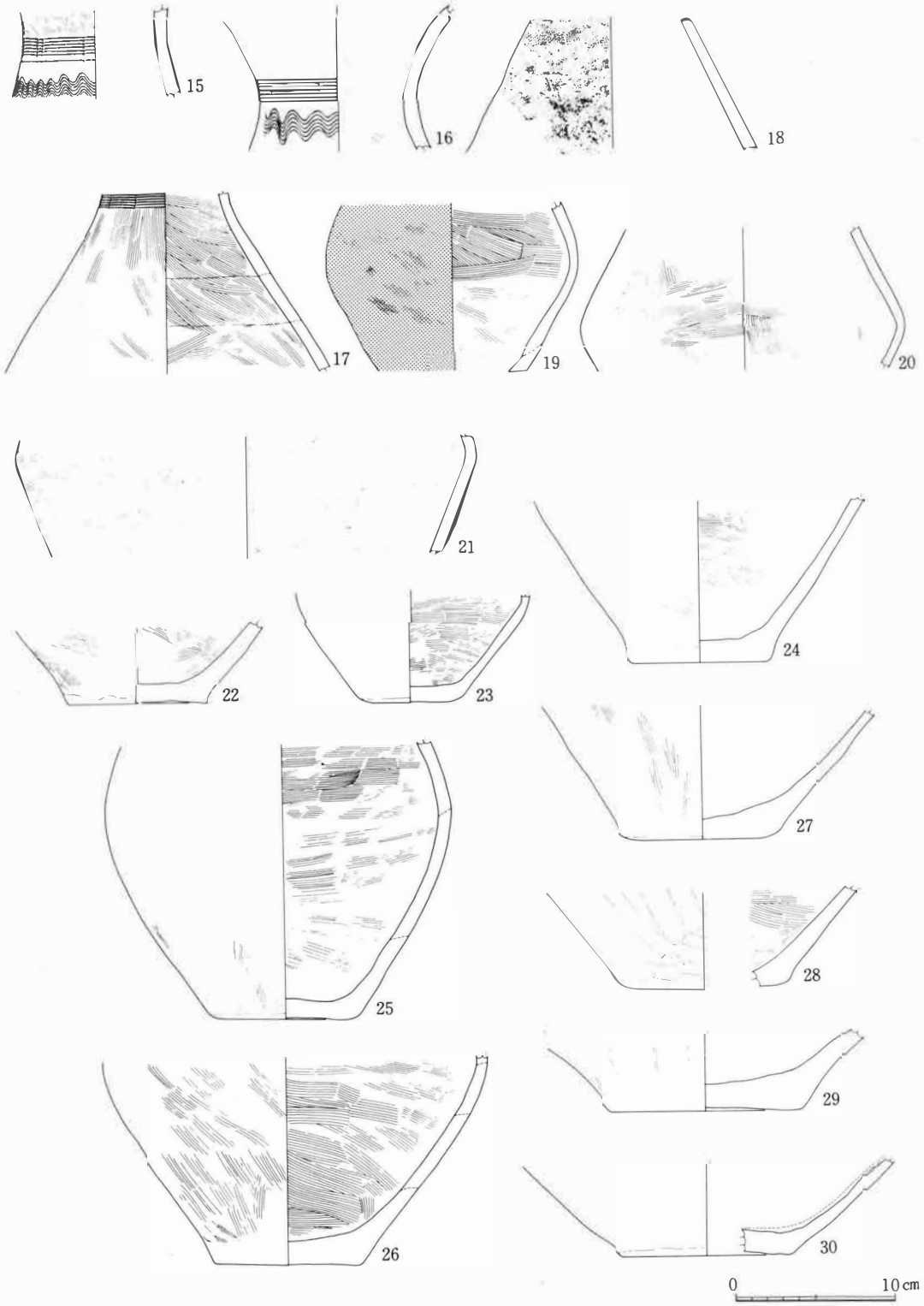


図26　2号住居址出土土器（2）実測図

2号住

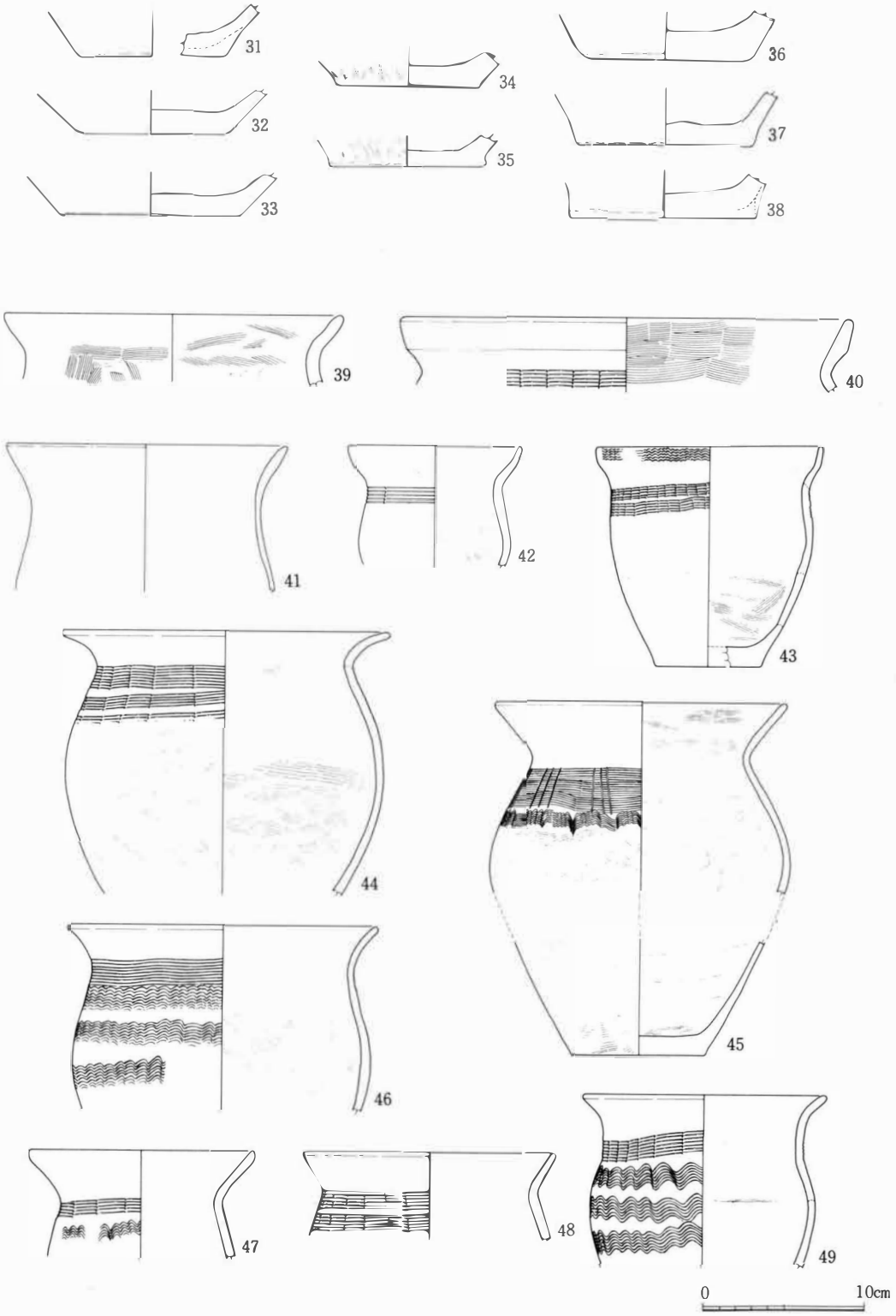


図27　2号住居址出土土器（3）実測図

2号住

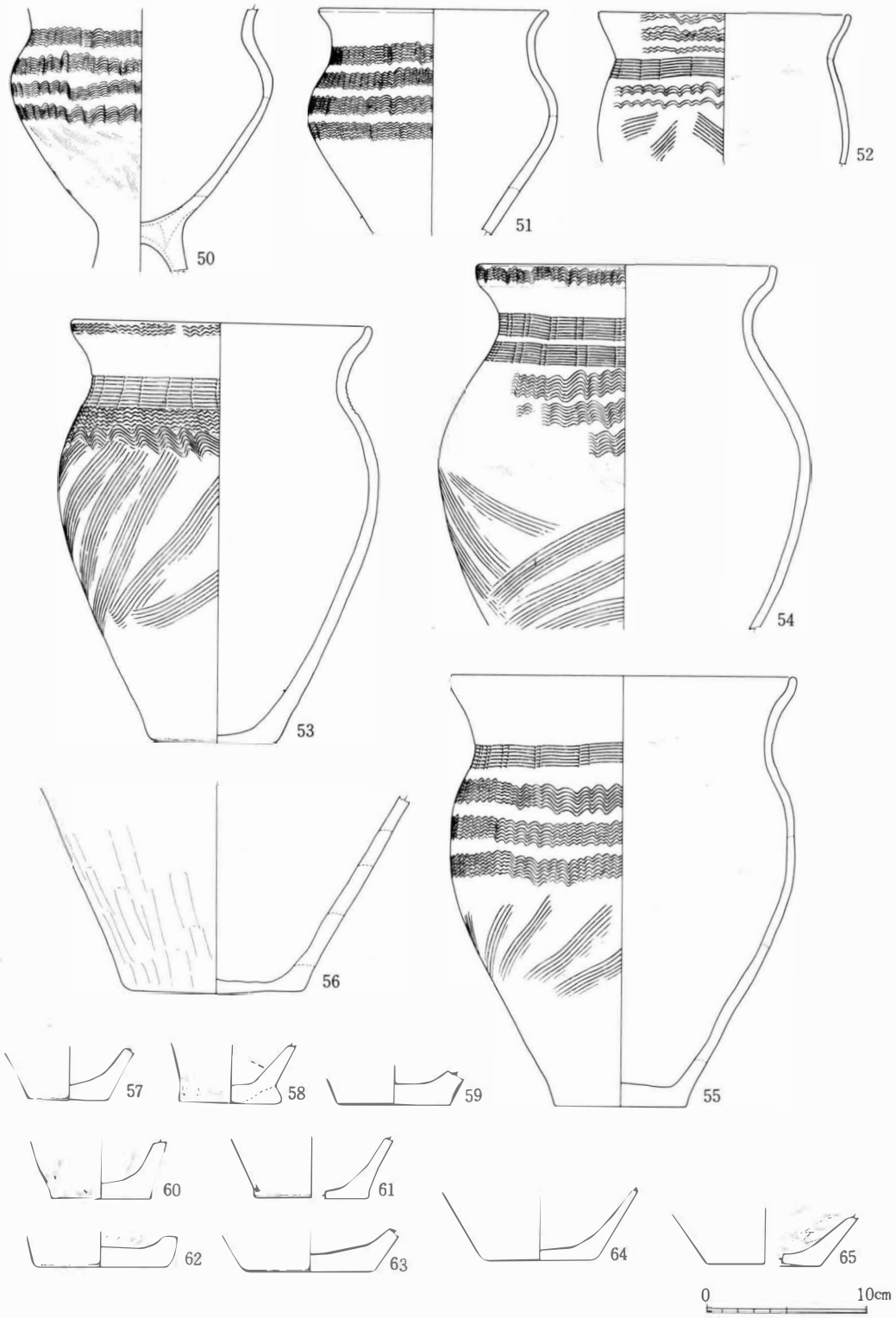


図28　2号住居址出土土器（4）実測図

2号住

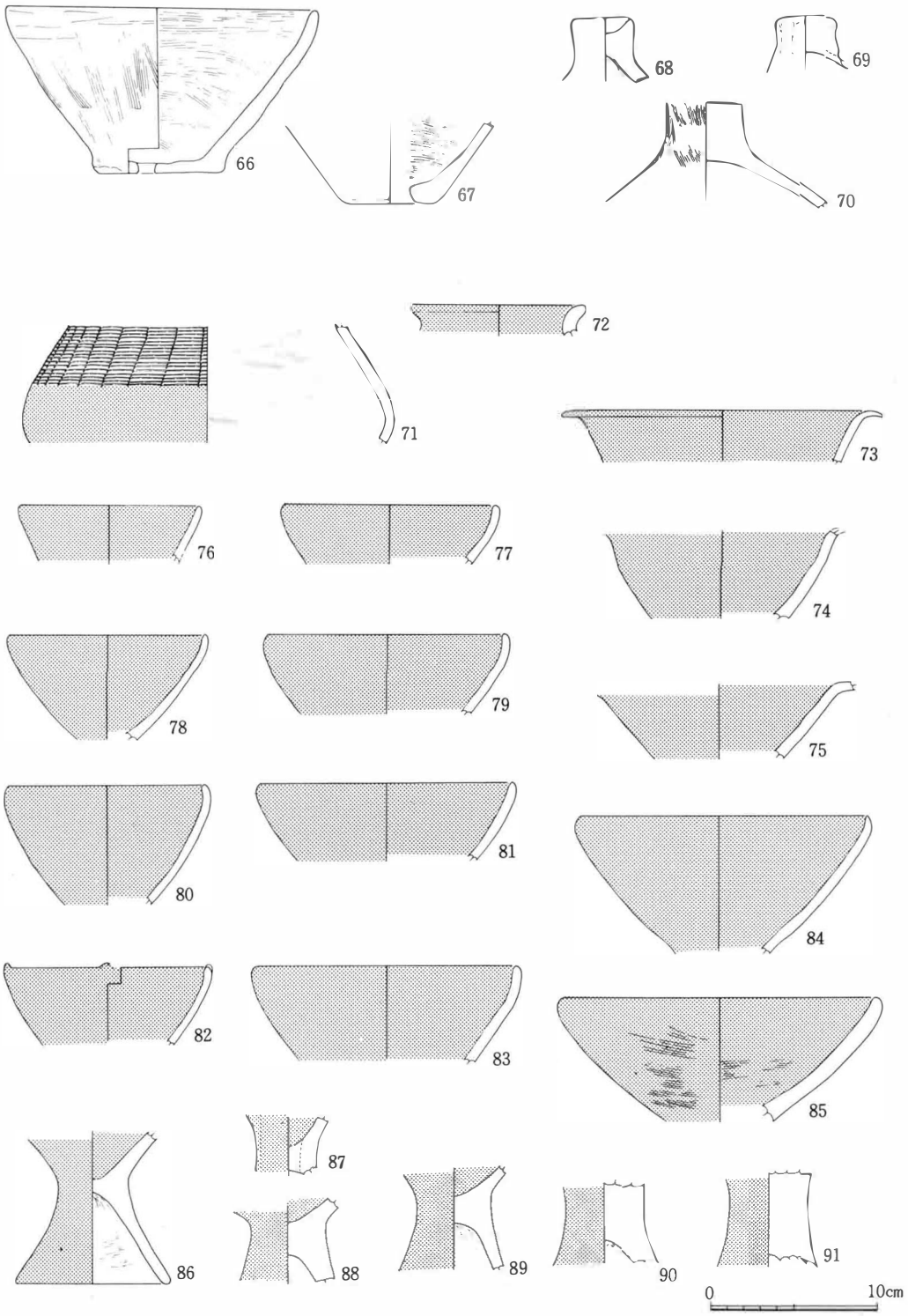


図29　2号住居址出土土器（5）実測図

3号住

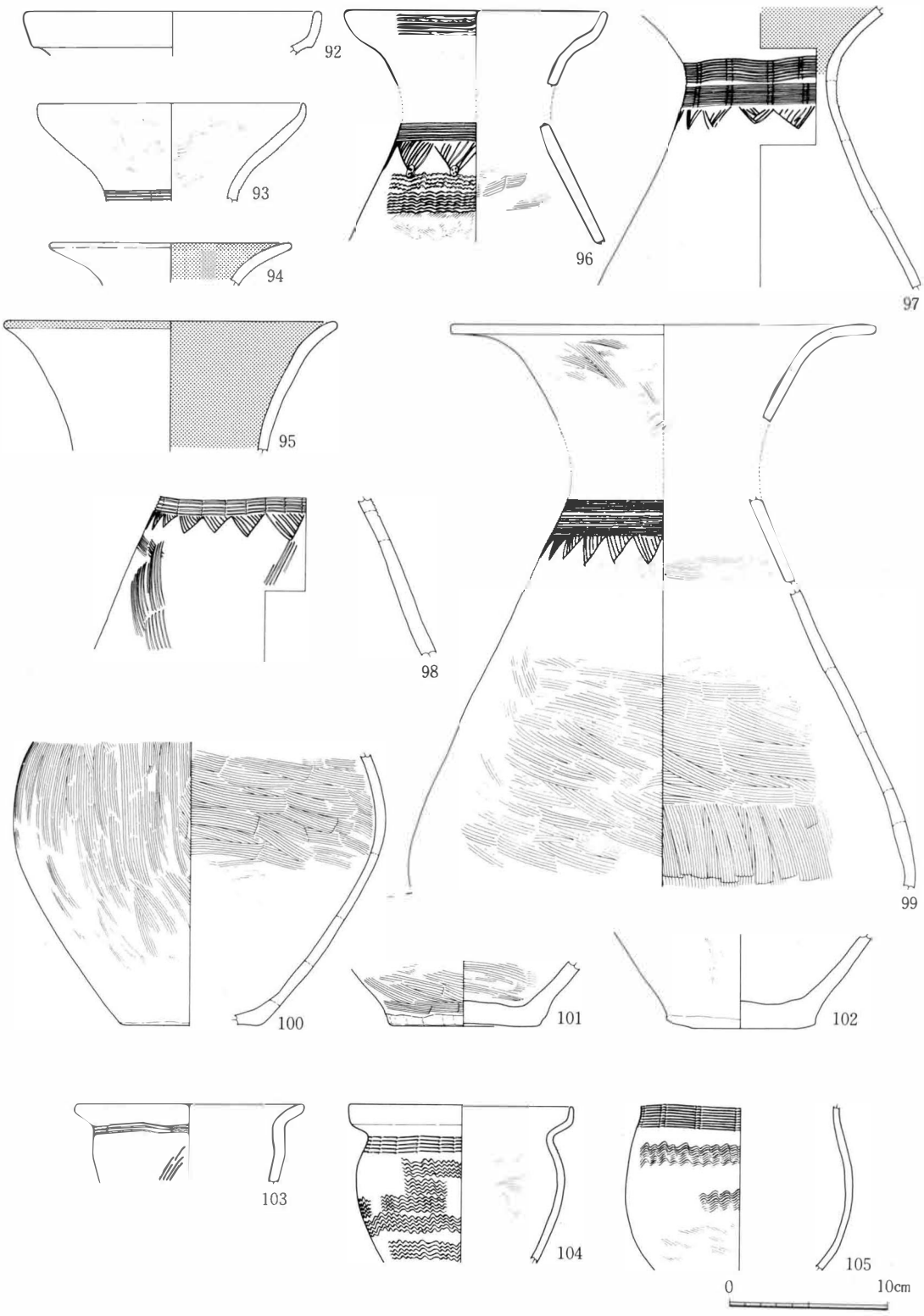


図30　3号住居址出土土器（1）実測図

3号住

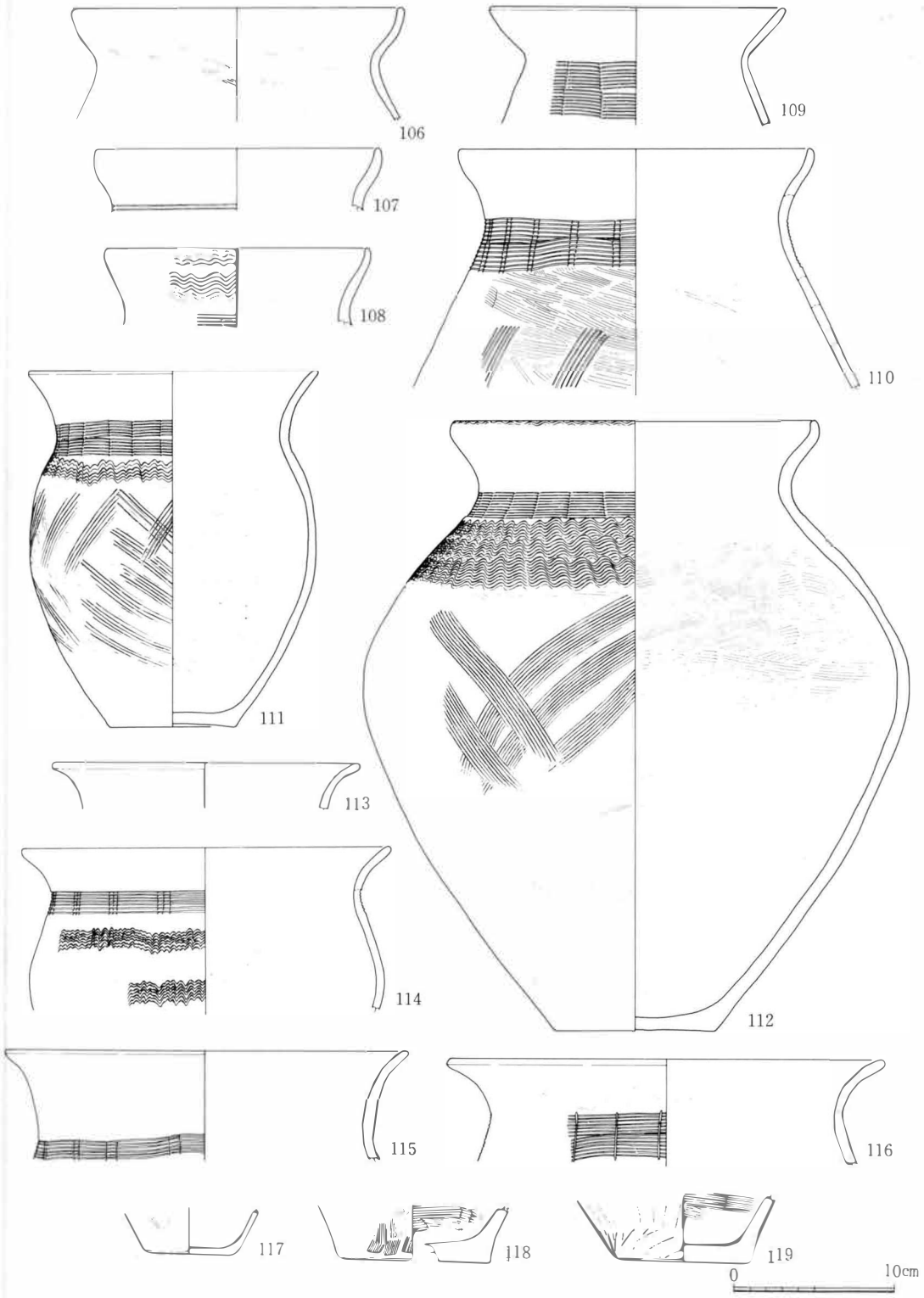
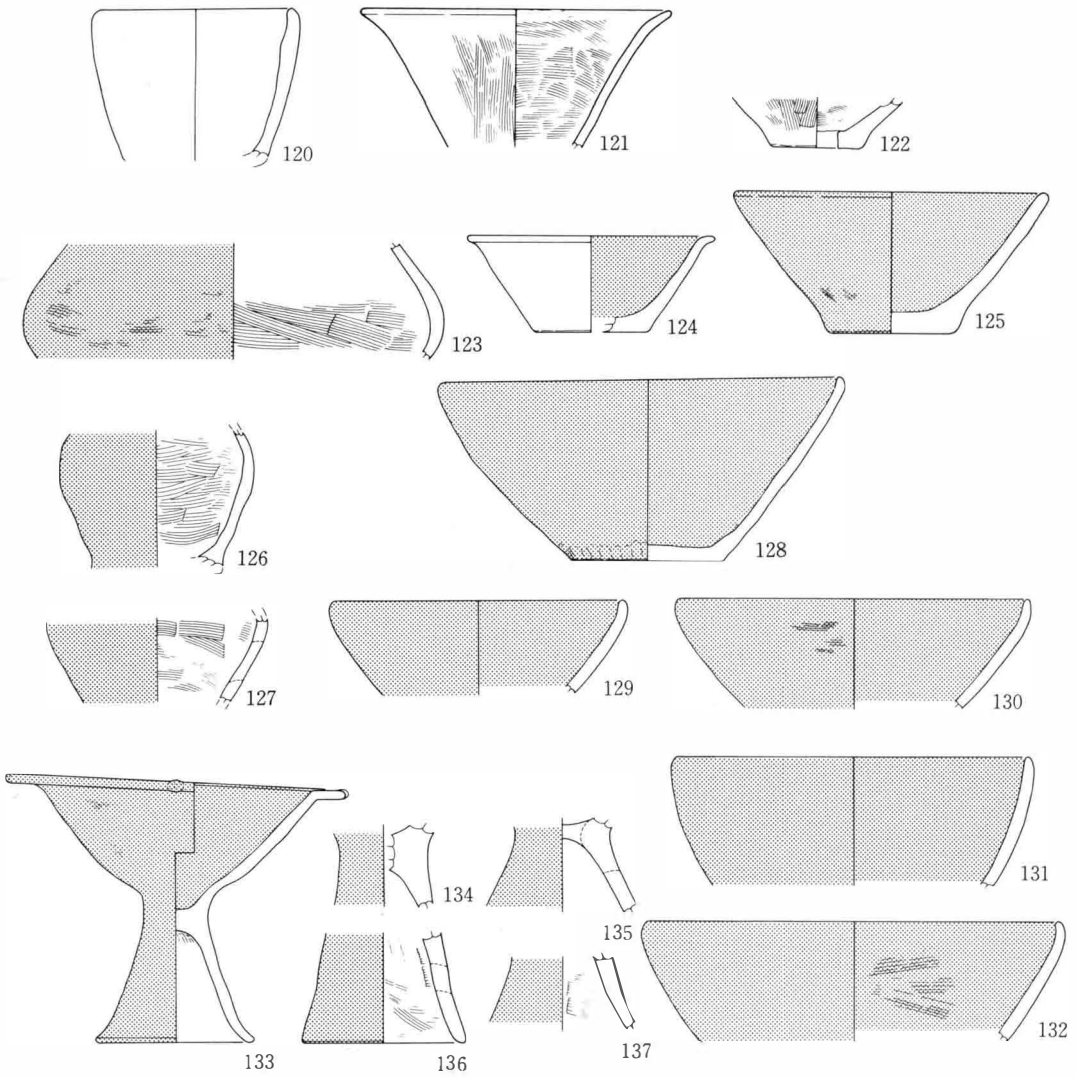


図31　3号住居址出土土器（2）実測図

3 号住



8 号住

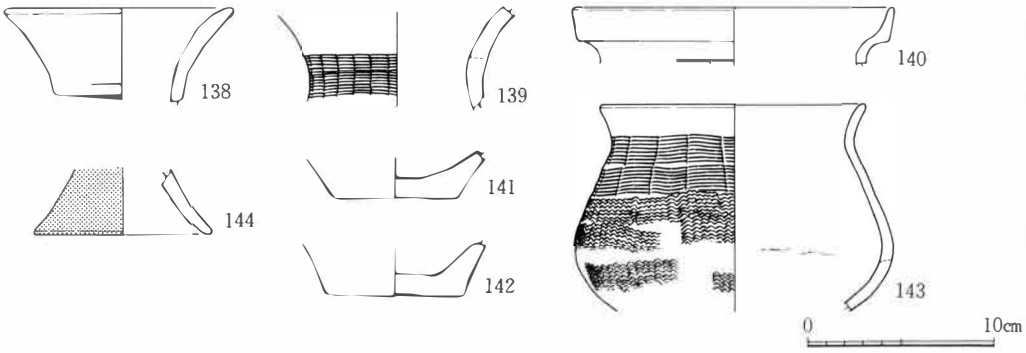


図32　3 号住居址（3）、8 号住居址出土土器実測図

4 号住

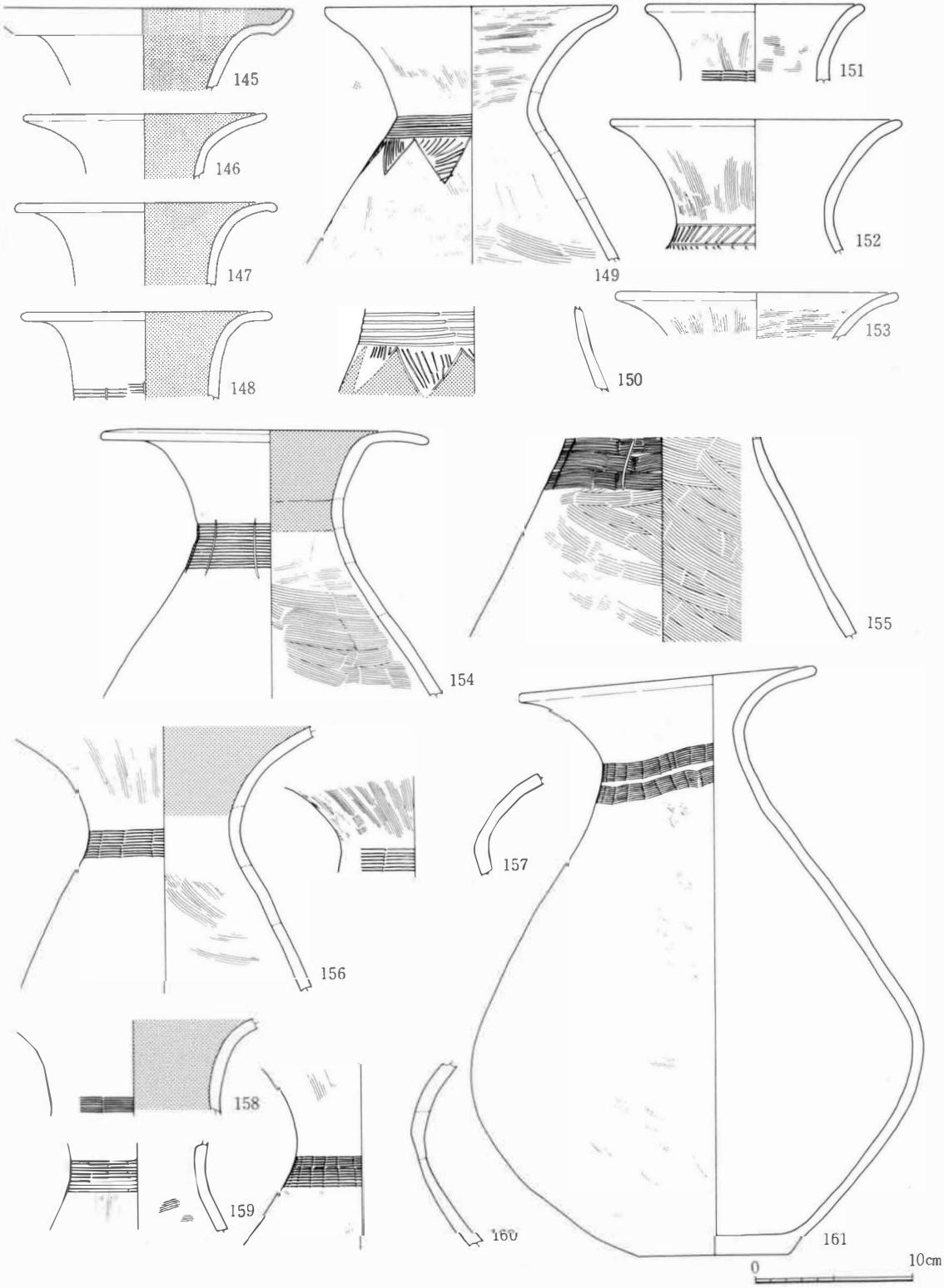


図33　4 号住居址出土土器（1）実測図

4 号住

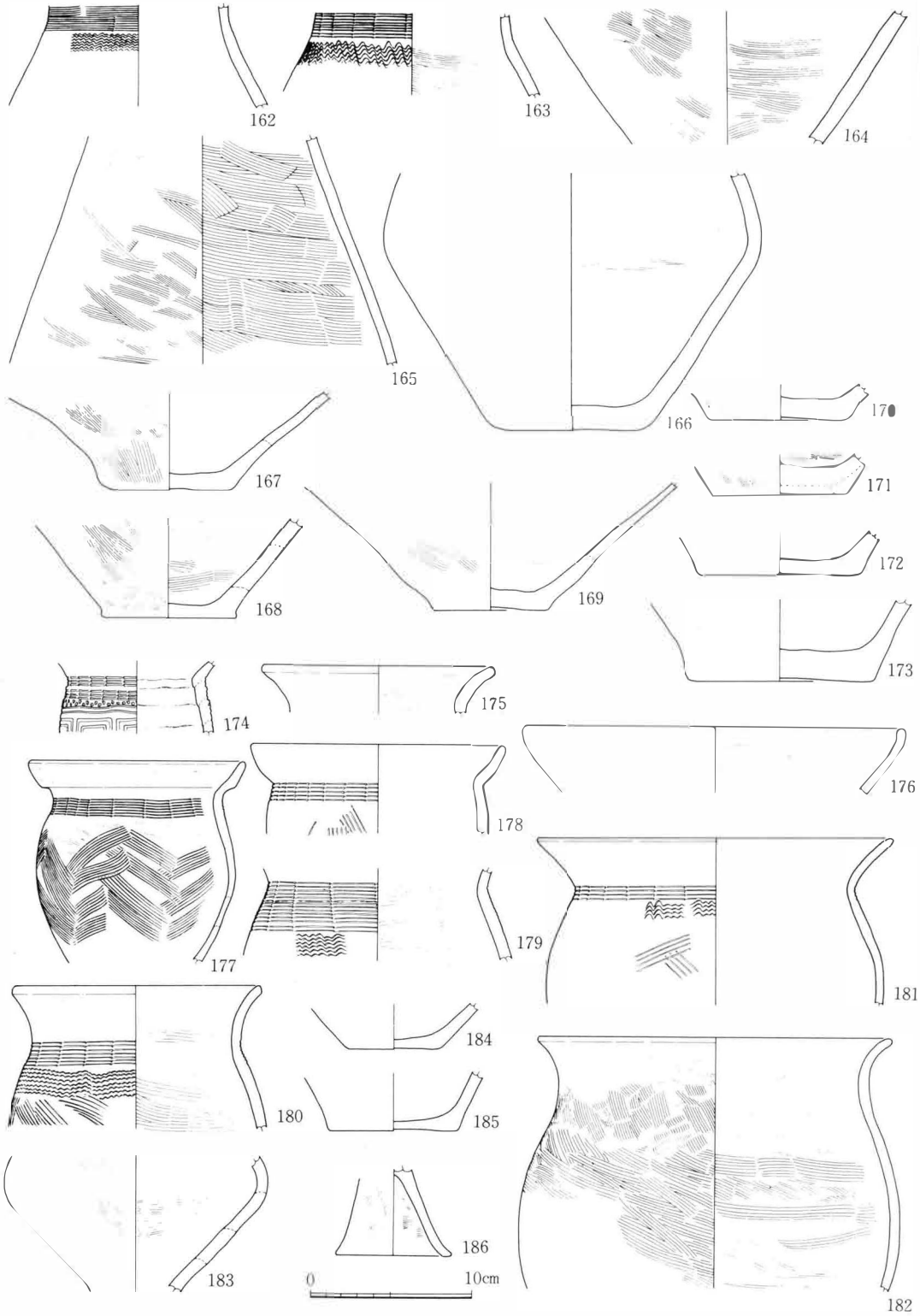


図34　4 号住居址出土土器（2）実測図

4号住

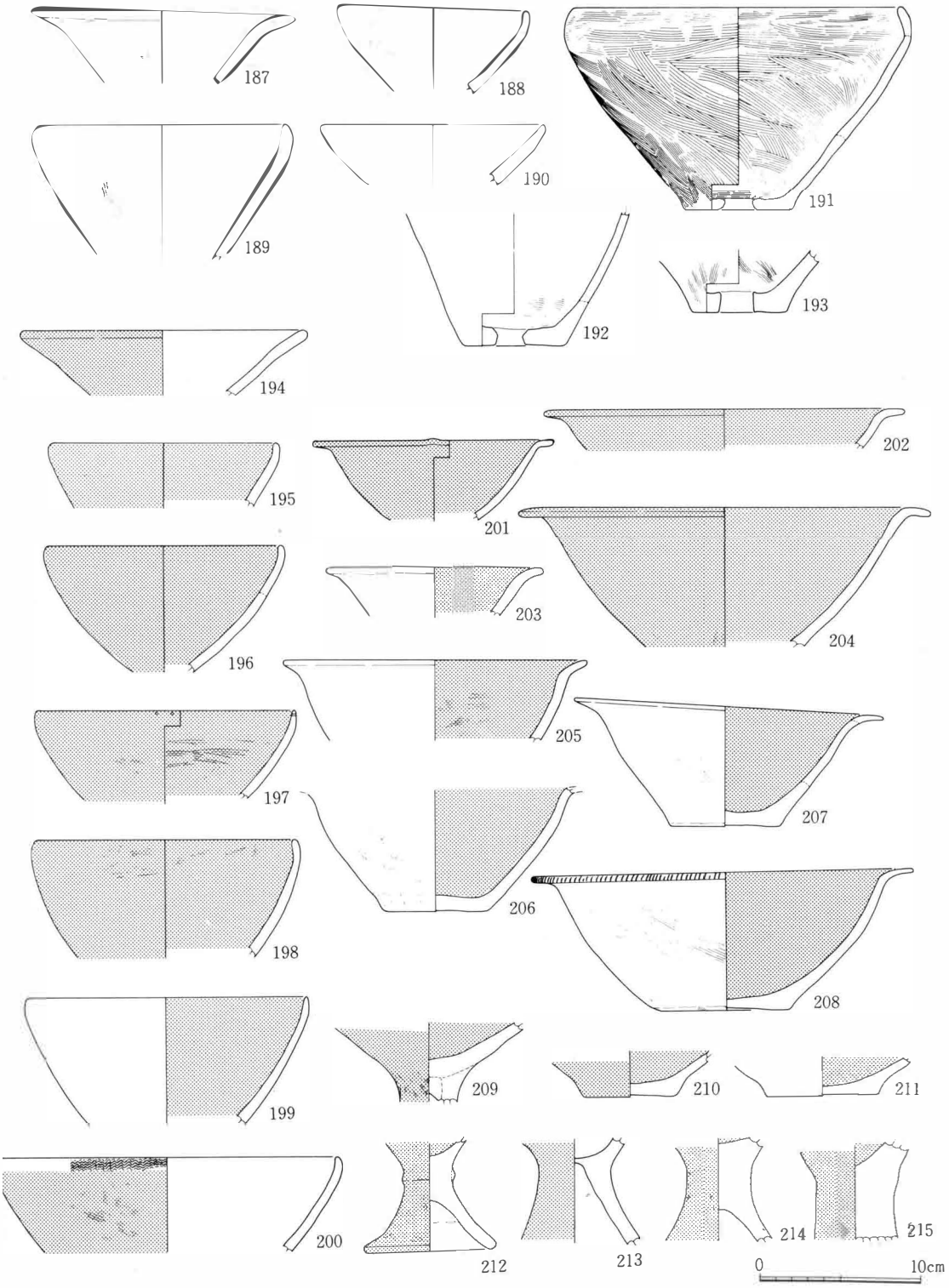


図35　4号住居址出土土器（3）実測図

5 号住

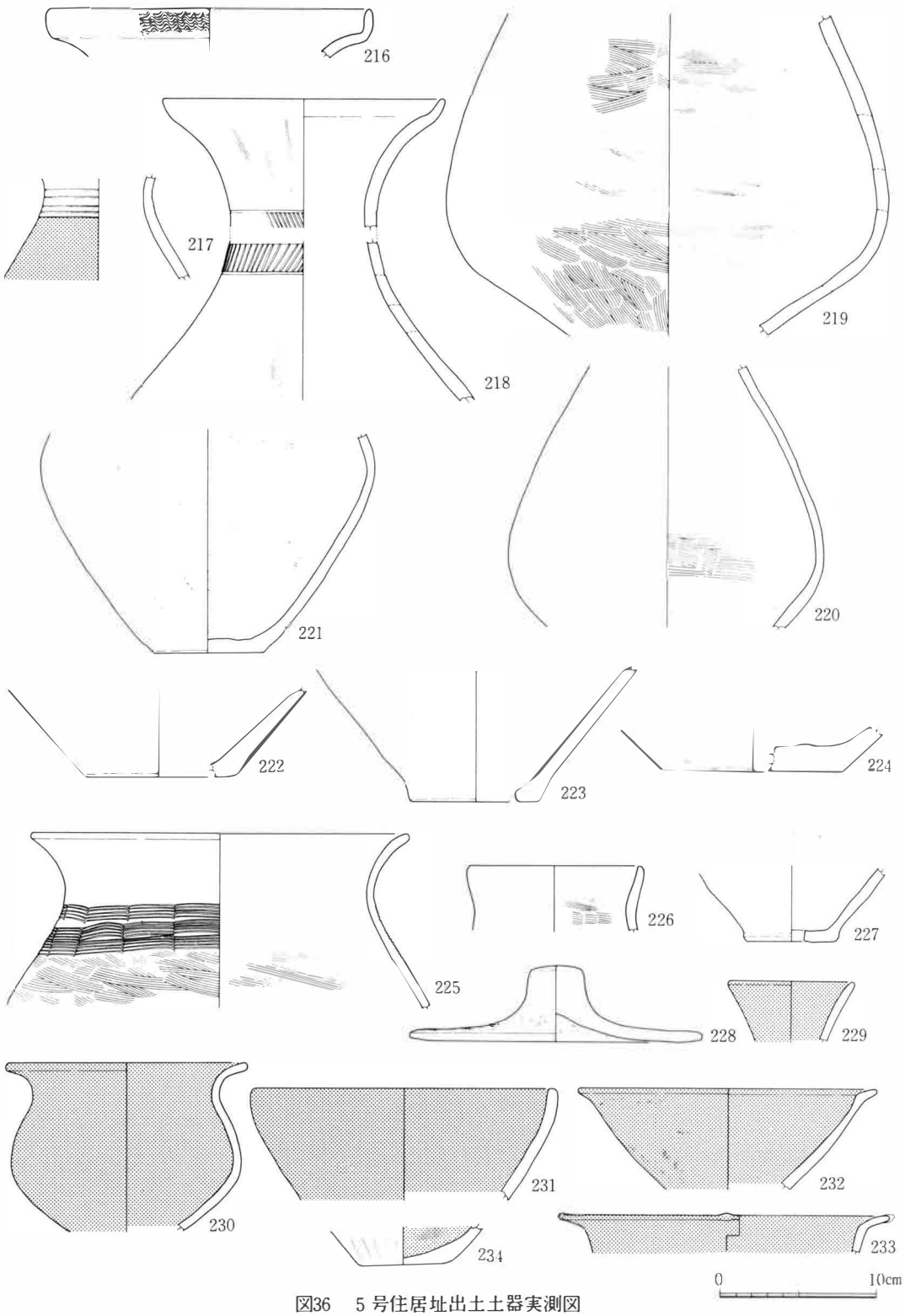


図36　5 号住居址出土土器実測図

6号住

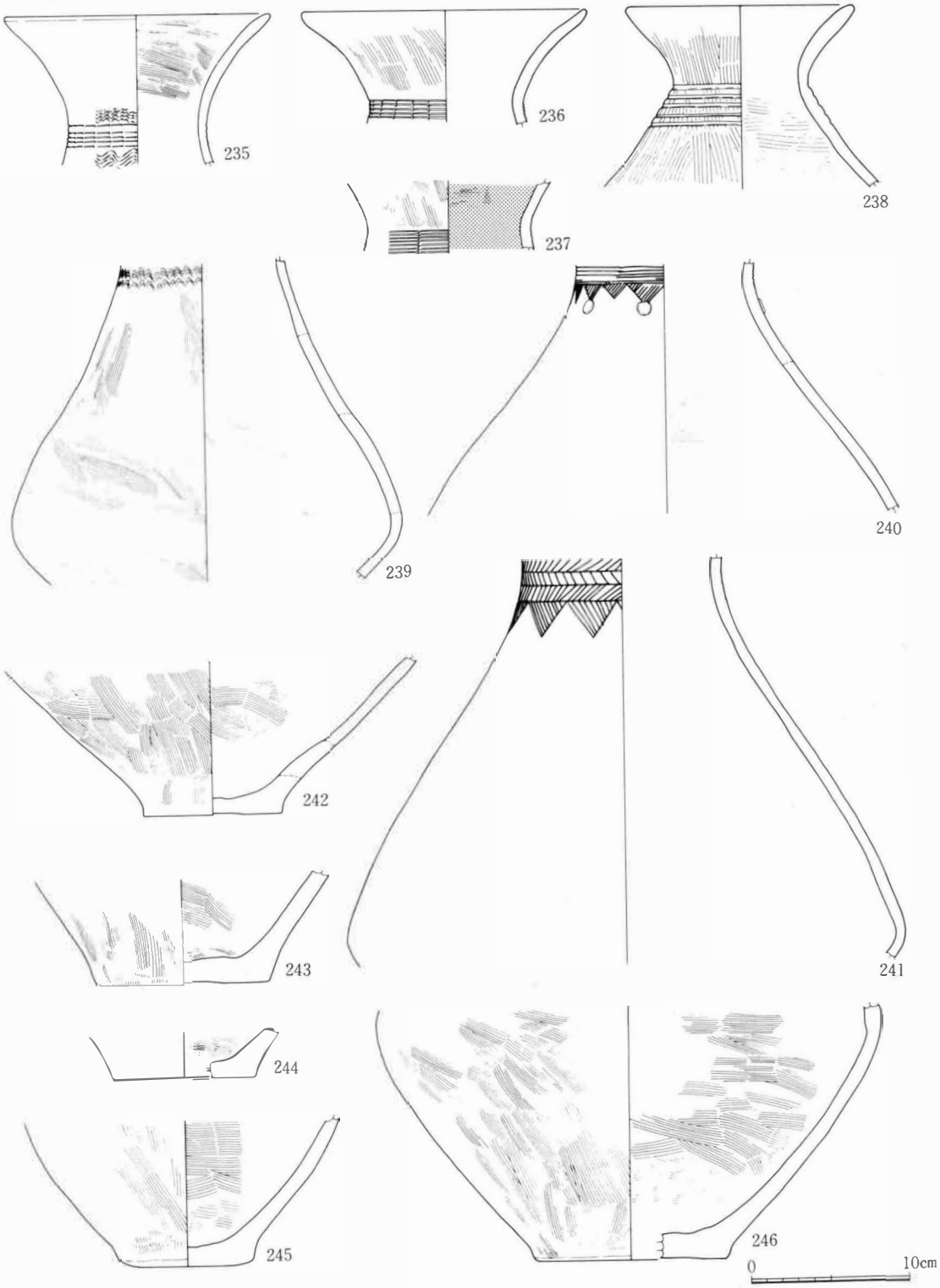


図37　6号住居址出土土器（1）実測図

6号住

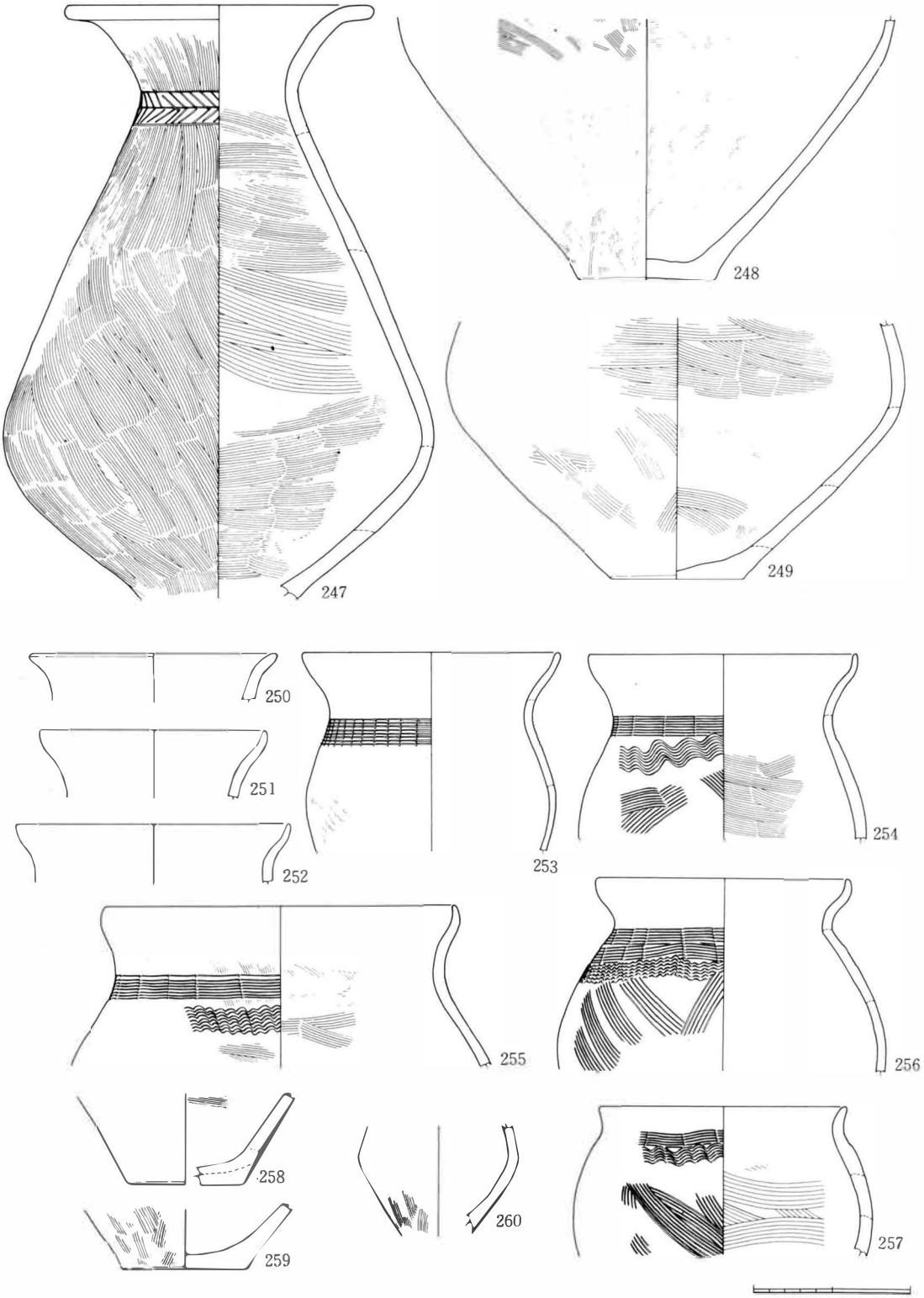
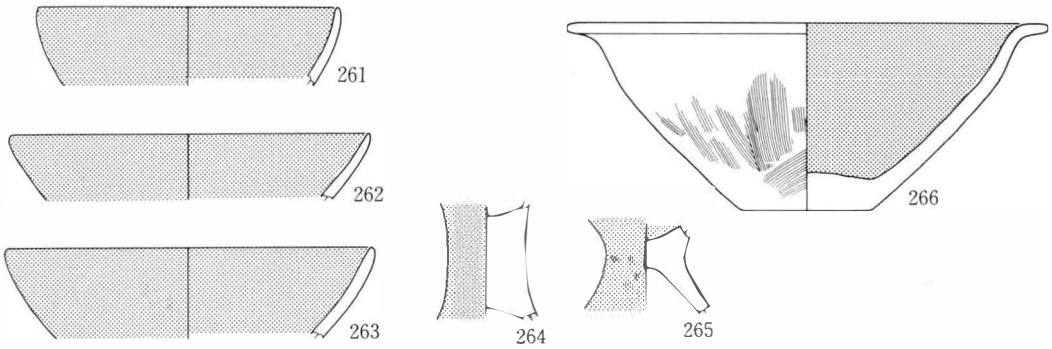


図38　6号住居址出土土器（2）実測図

6号住



7号住

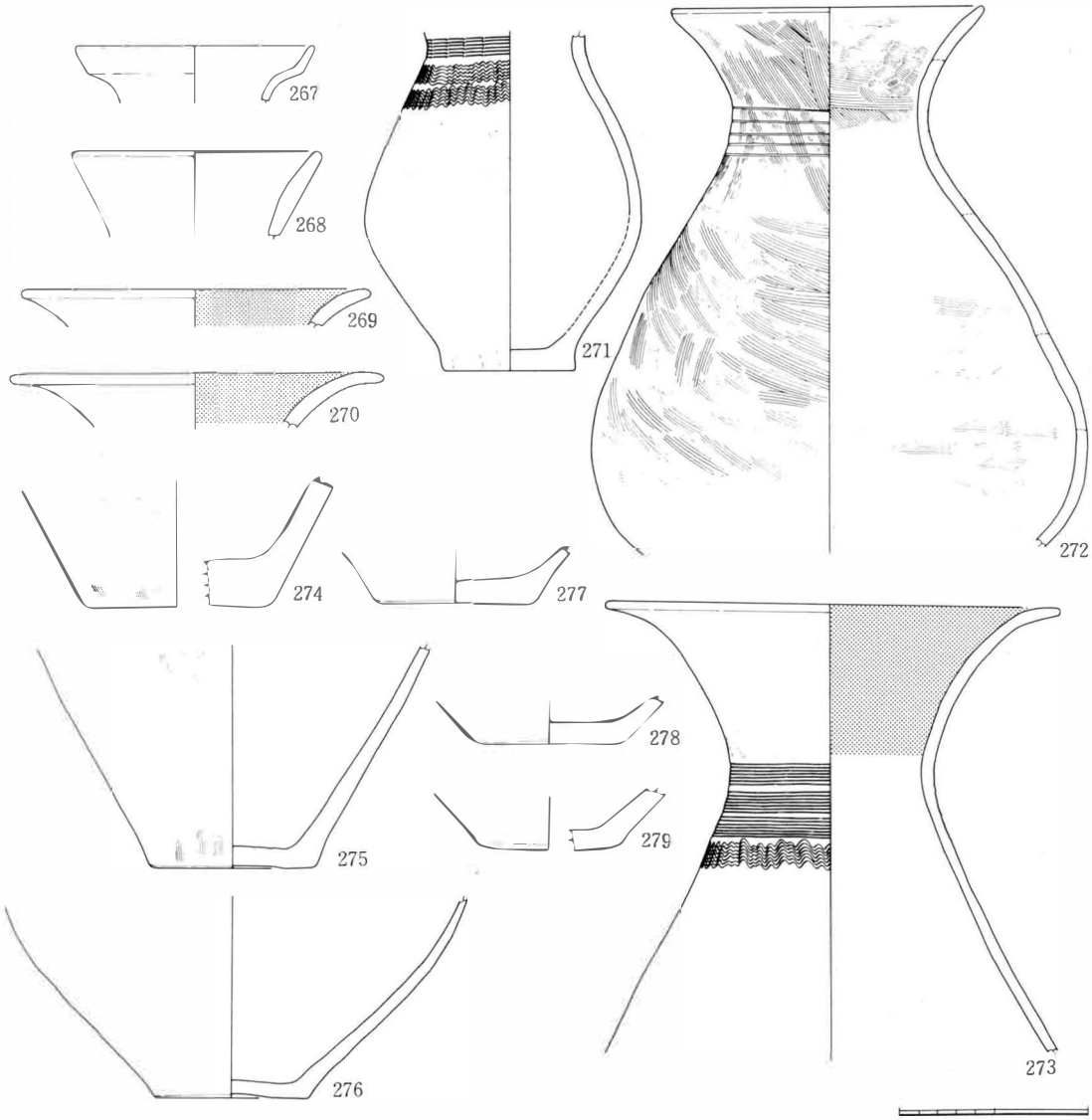
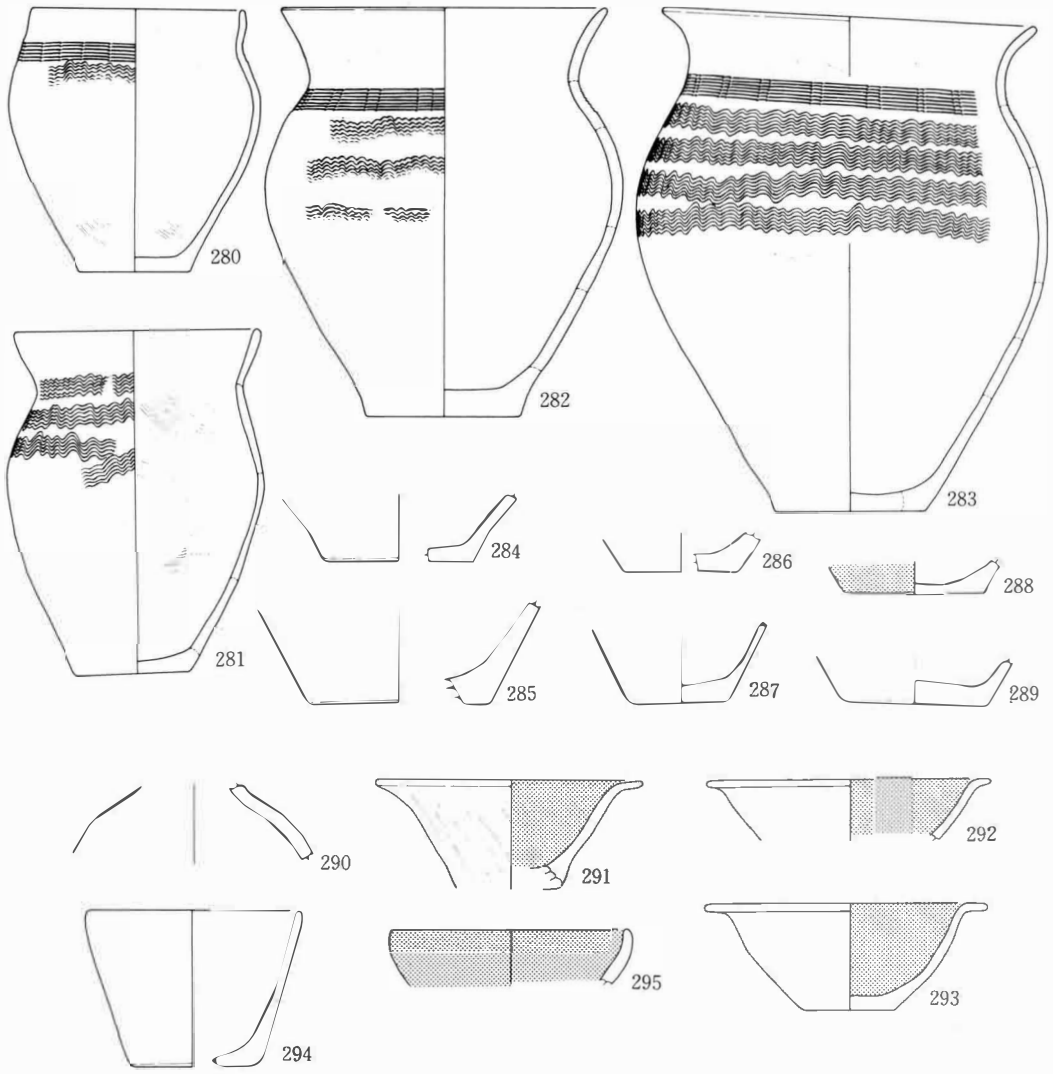


図39　6号住居址（3）、7号住居址（1）出土土器実測図

7 号住



9 号住

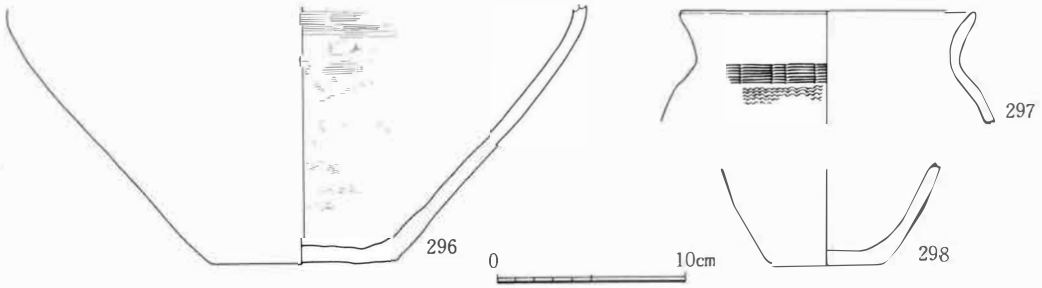


図40　7 号住居址（2）、9 号住居址出土土器実測図

10号住

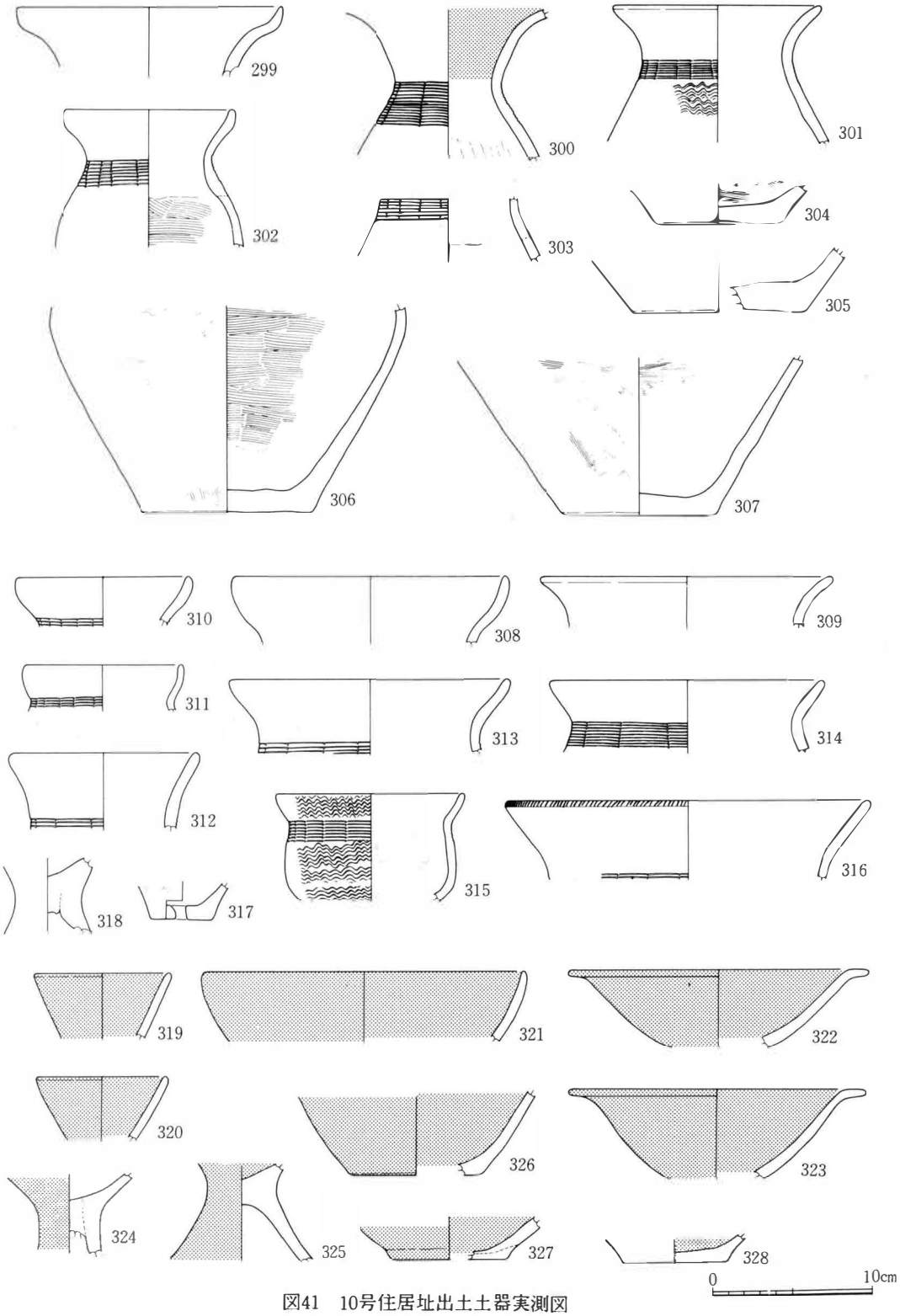


図41　10号住居址出土土器実測図

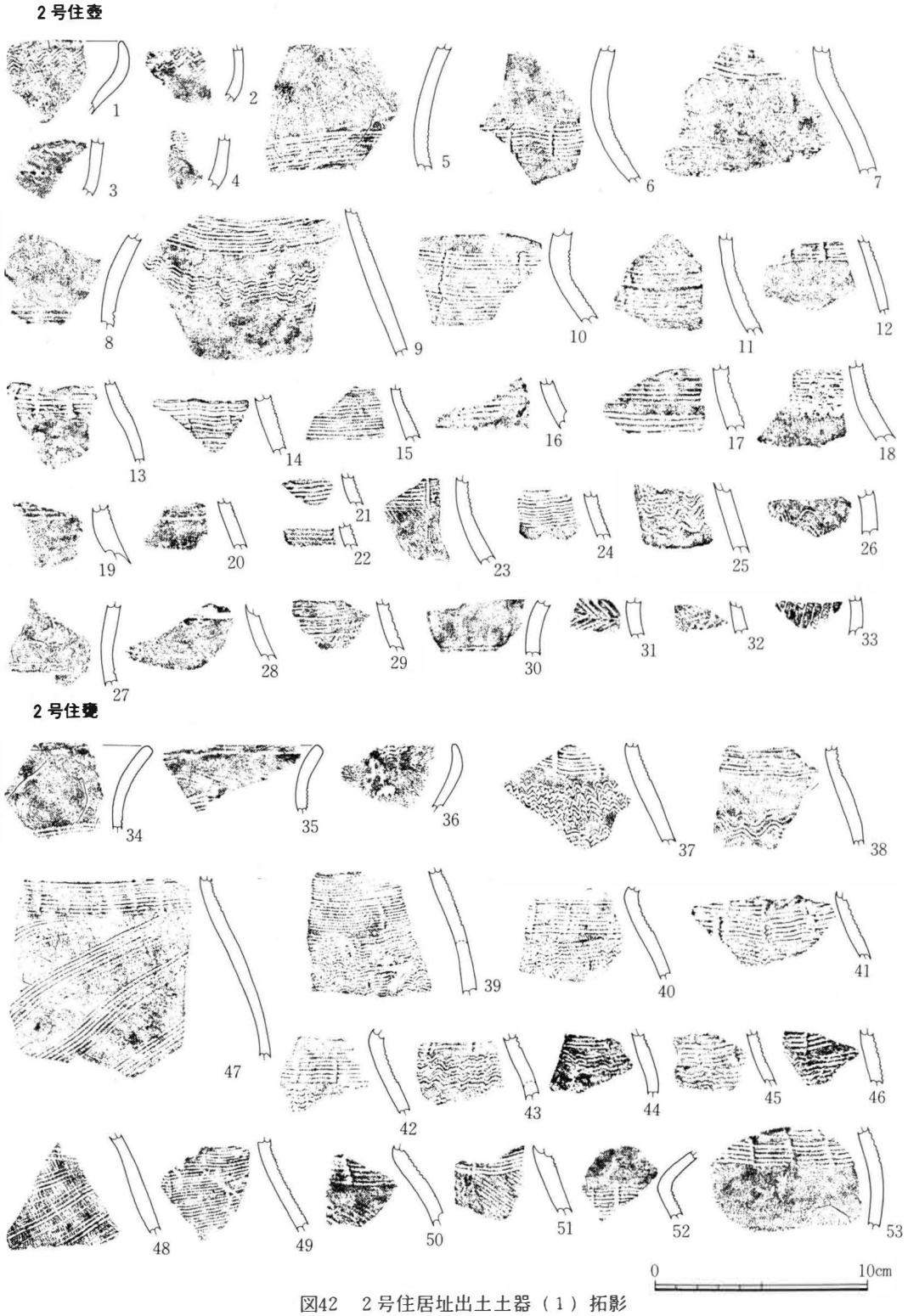


図42　2号住居址出土土器（1）拓影

2号住甕

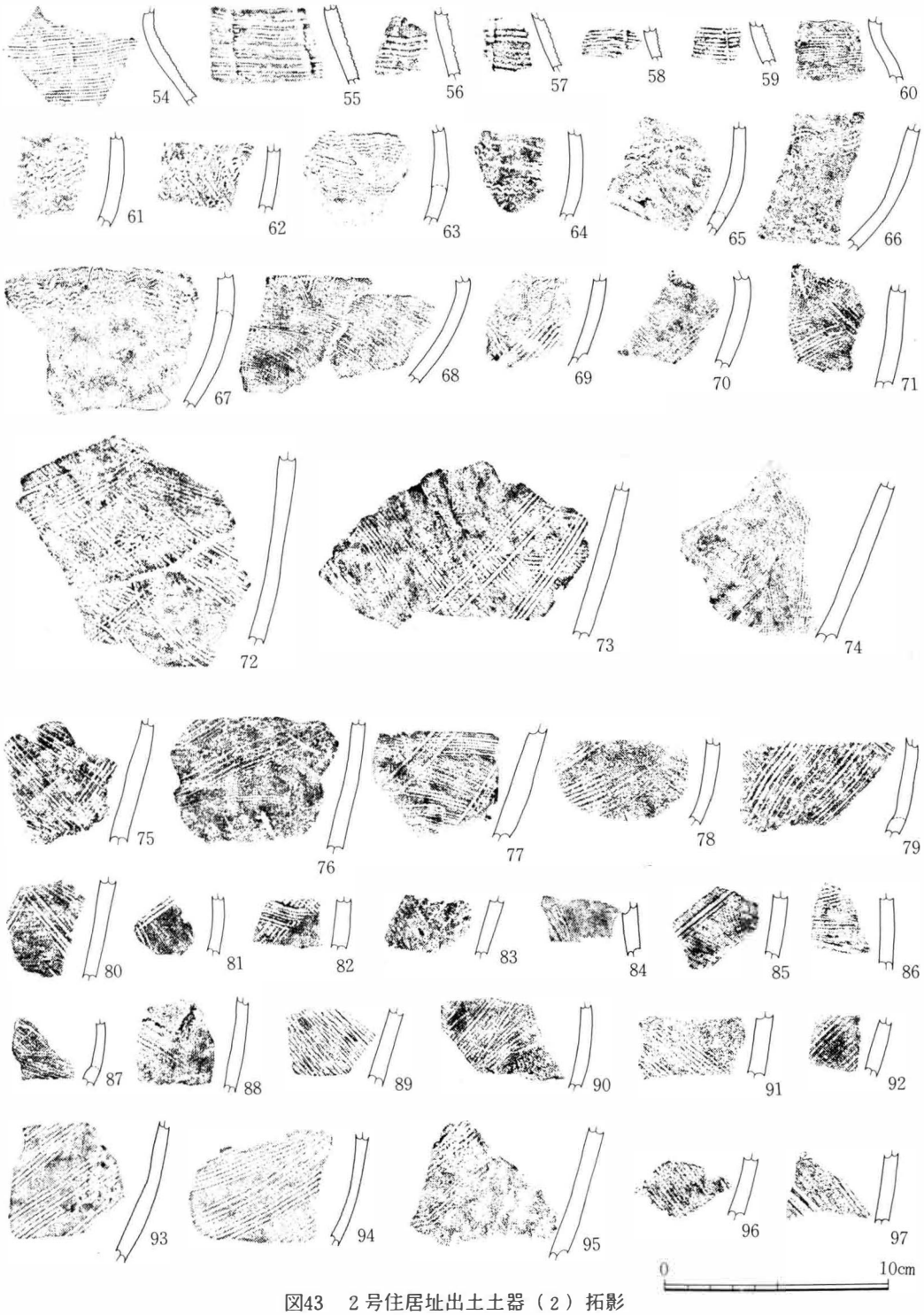
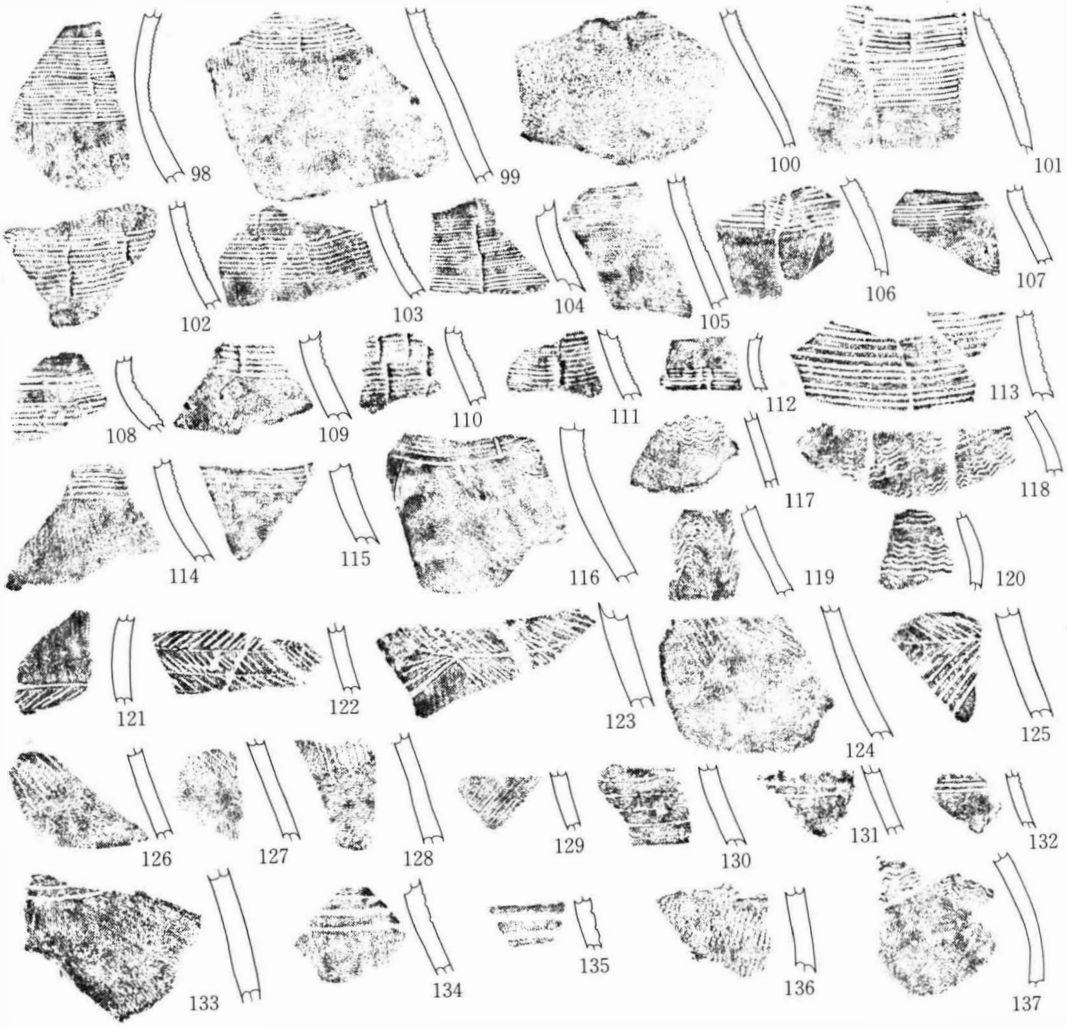


図43　2号住居址出土土器（2）拓影

3号住壺



3号住壺

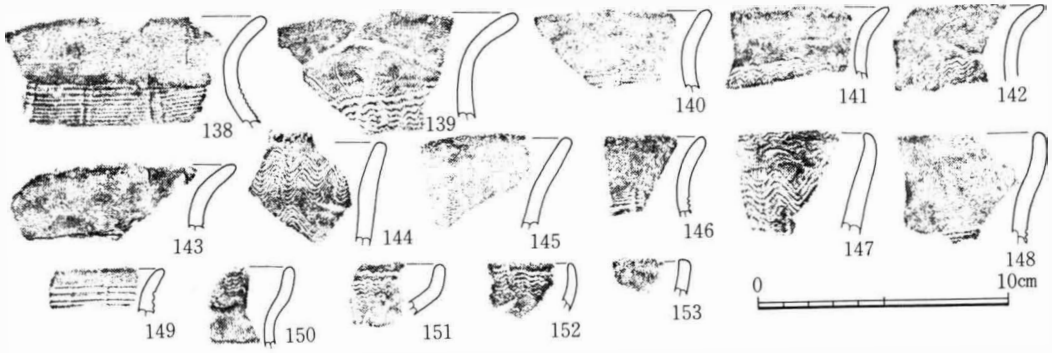


図44　3号住居址出土土器（1）拓影

3号住甕

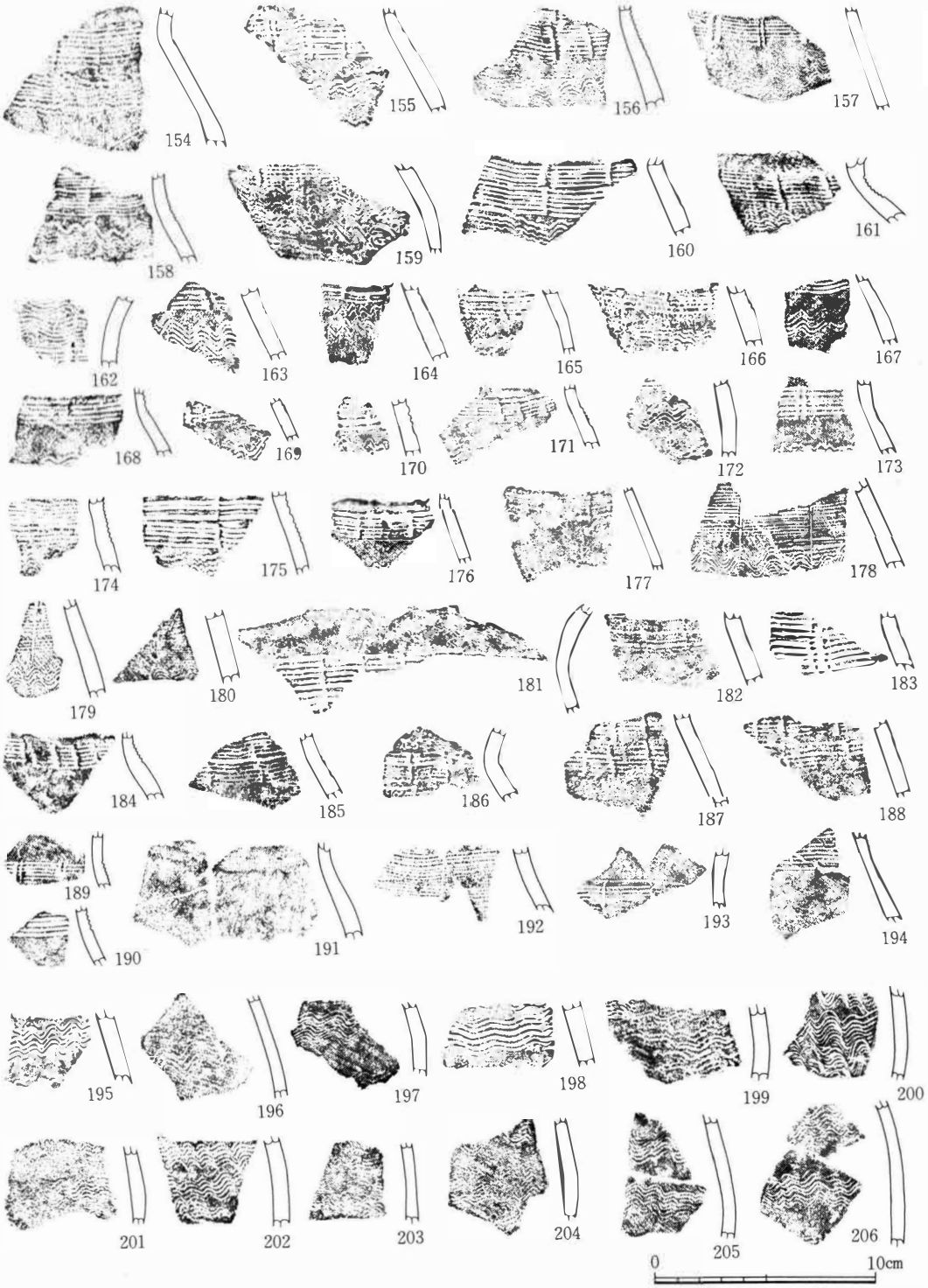


図45　3号住居址出土土器（2）拓影

3号住甕

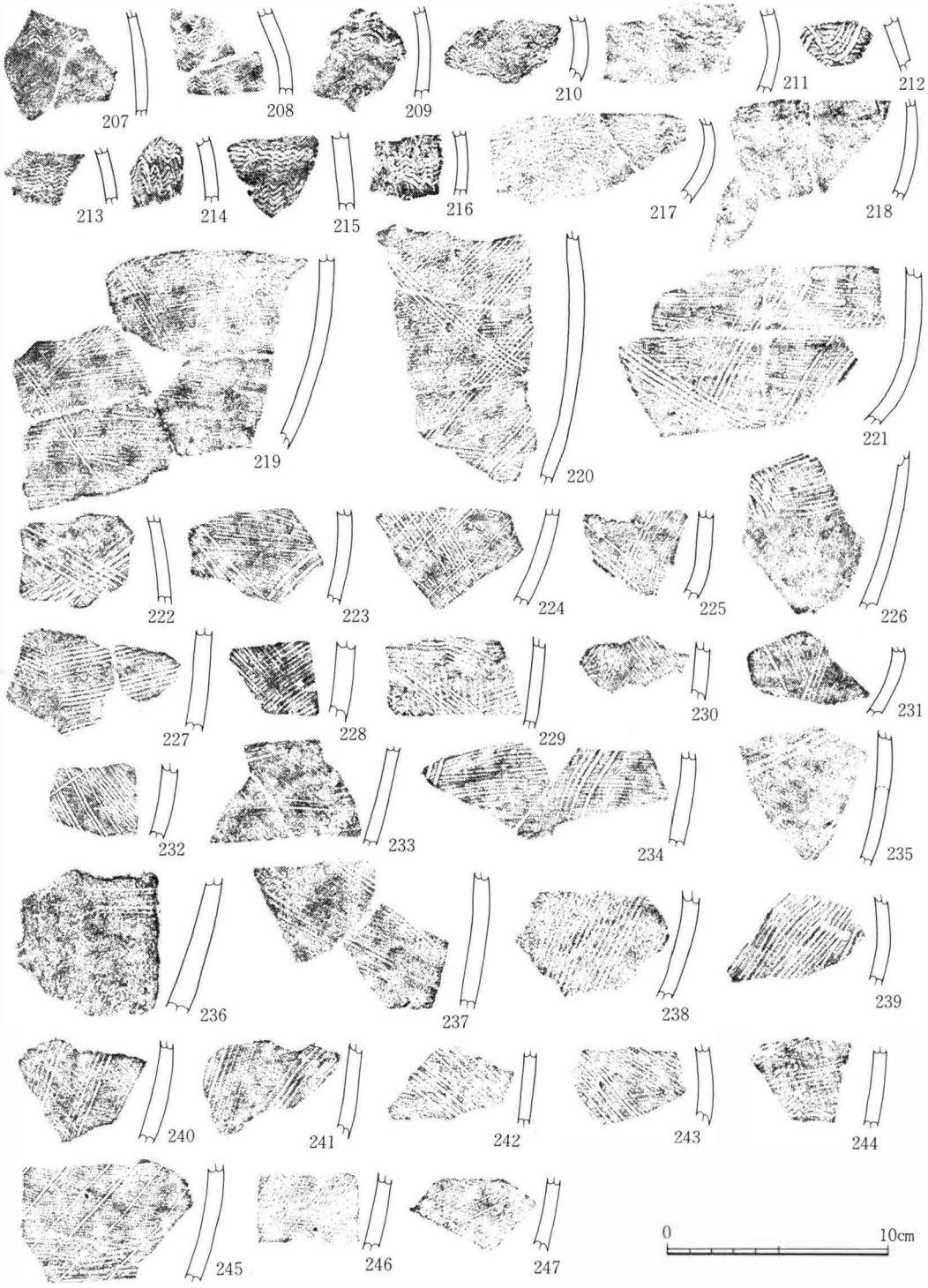
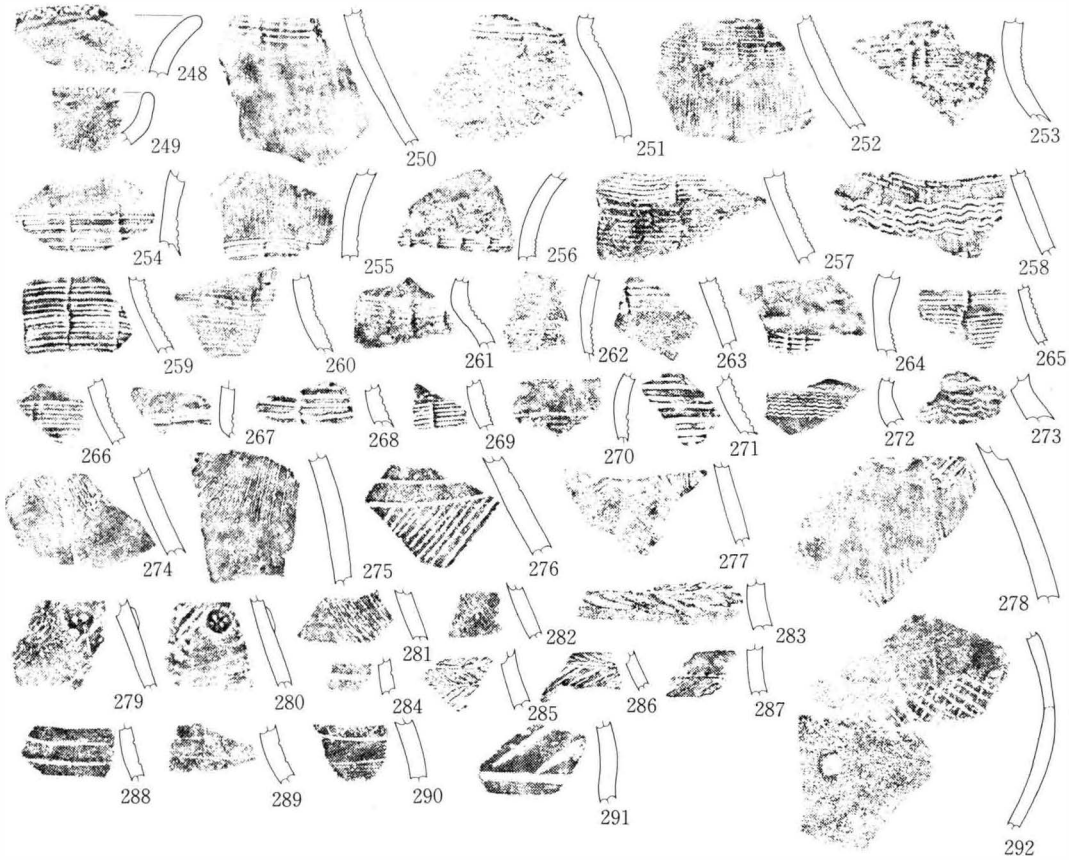


図46　3号住居址出土土器（3）拓影

4号住壺



4号住甕

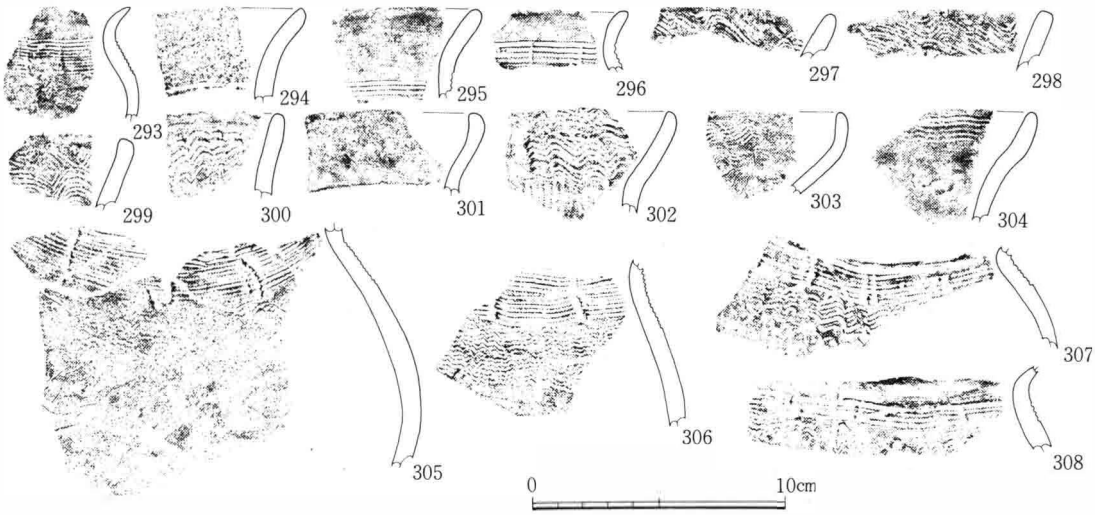


図47　4号住居址出土土器（1）拓影

4号住甕

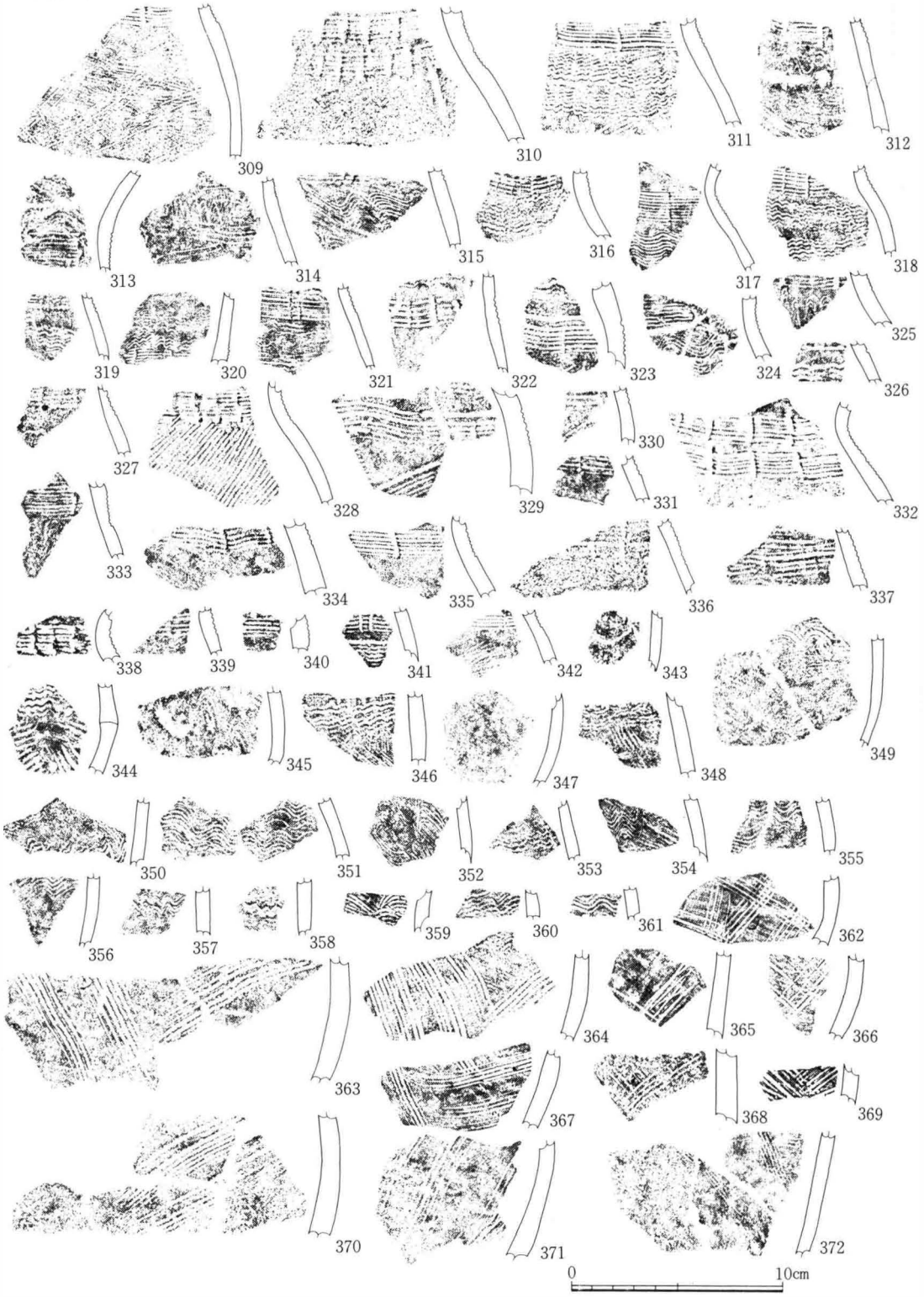
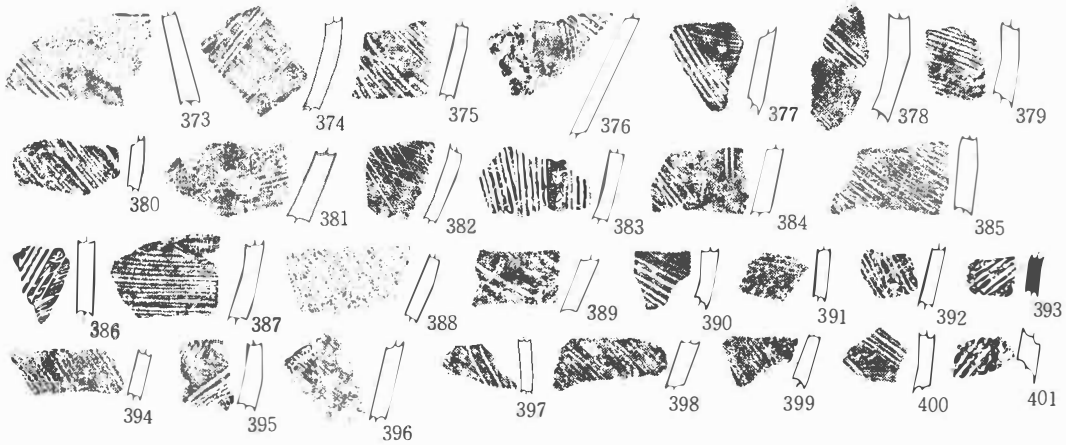
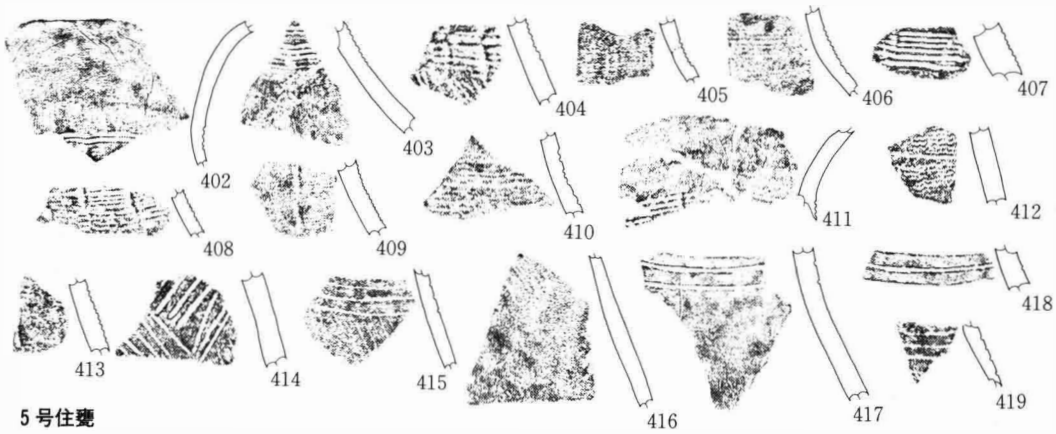


図48　4号住居址出土土器（2）拓影

4 号住甕



5 号住壺



5 号住甕

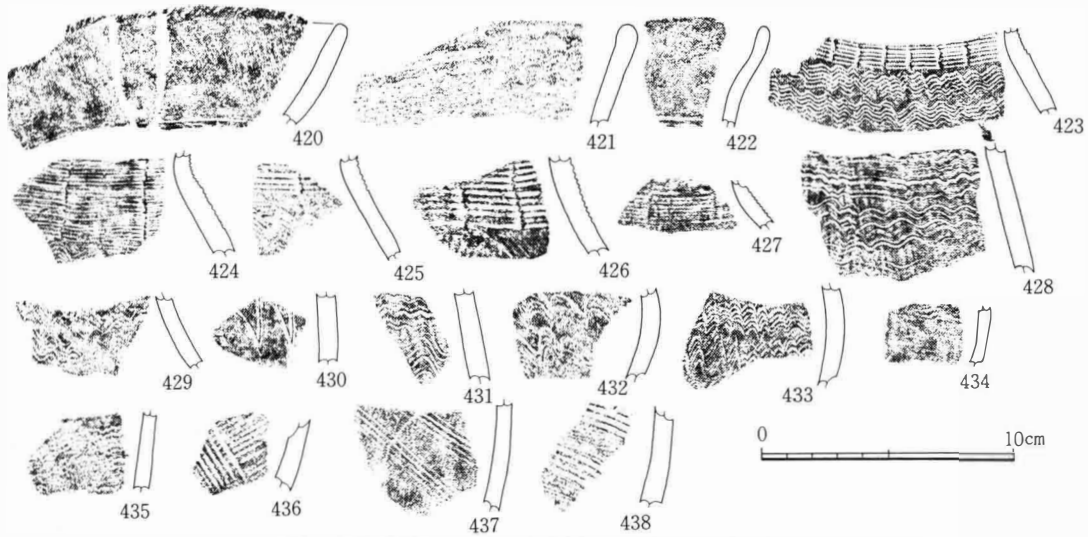
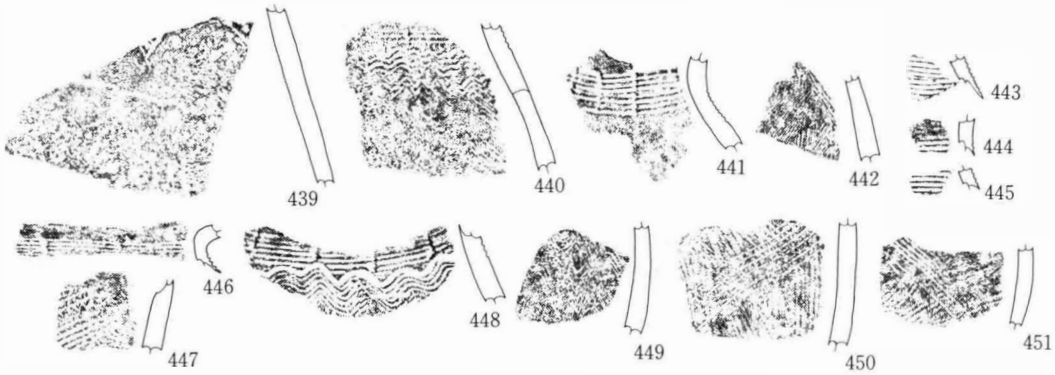
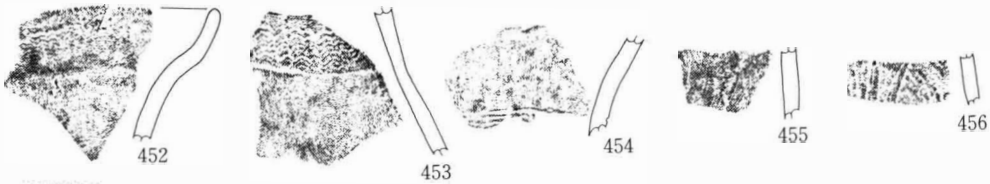


図49　4 号住居址（3）、5 号住居址出土土器拓影

6号住



7号住壺



7号住甕

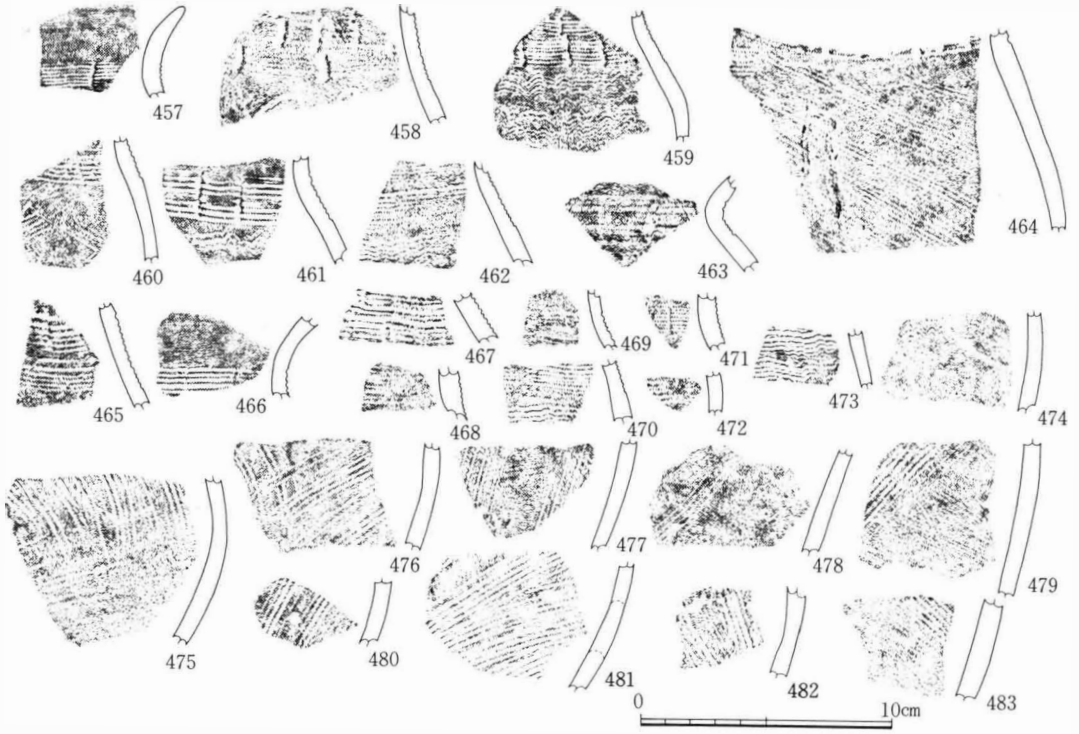
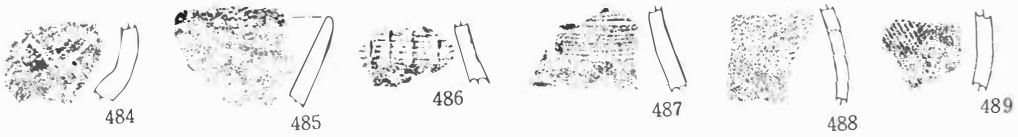
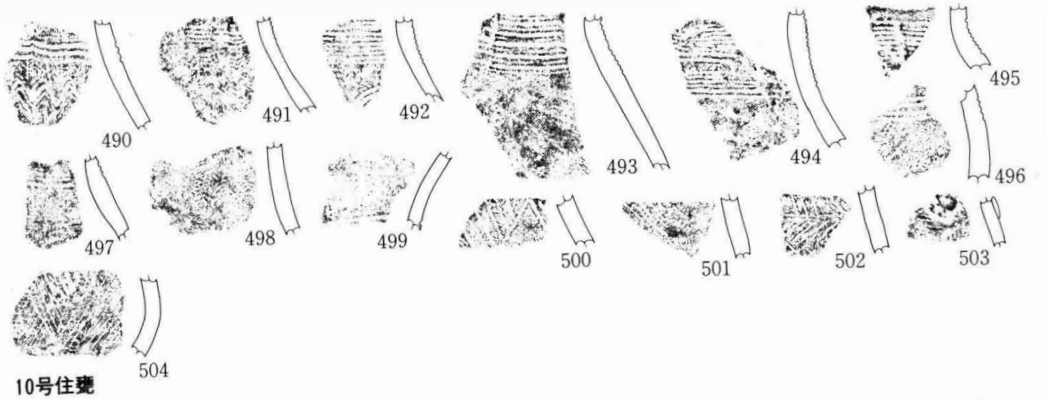


図50　6号住居址、7号住居址出土土器拓影

9 号住



10号住壺



10号住甕

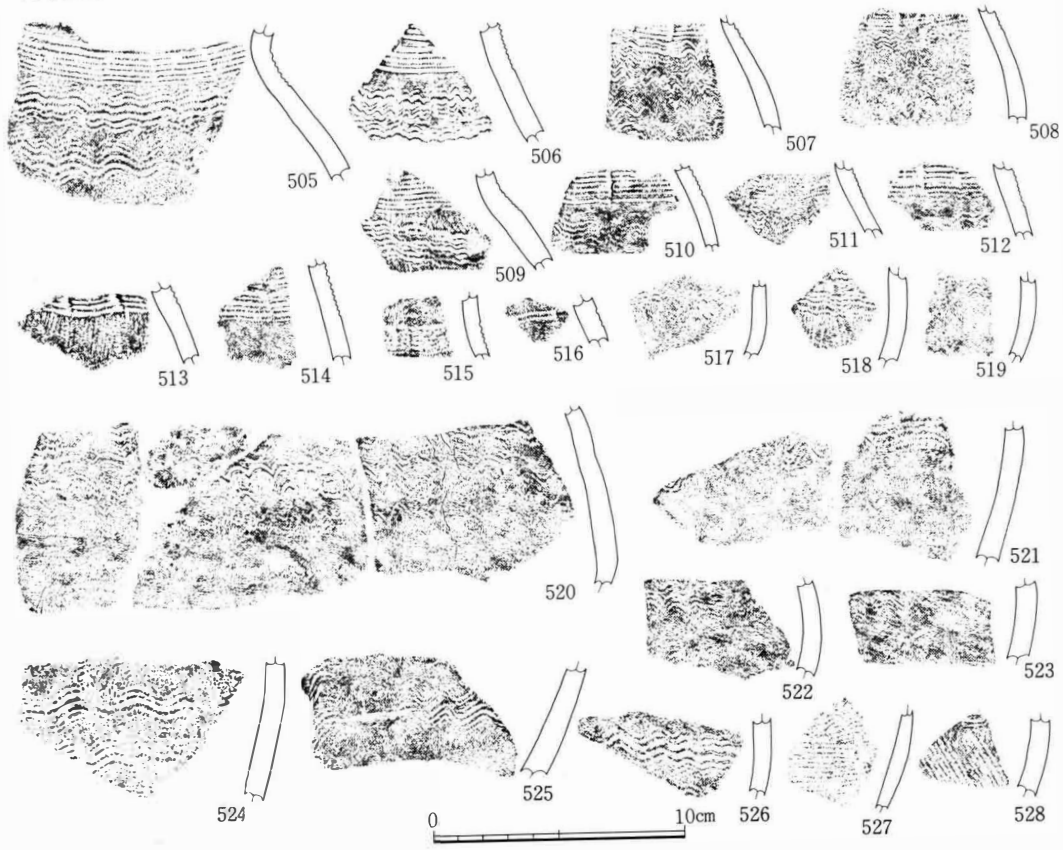


図51　9 号住居址、10号住居址出土土器拓影

1～30　2号住

図番号	器　種	型式	法　量 cm 口径	底径	器高	遺存度	外　面	内　面	備　考
1	壺		11.6			1／4	ナデ	ヨコナデ(強)	
2	壺	A_2	16.4			1／4	ヨコナデ	ヨコナデ	
3	壺	E	12.1	6.6	21.2	完	胴下半箆削り　上半ミガキ 赤彩	口縁部：ミガキ　赤彩 胴部：ハケ→ナデ	外面黒斑
4	壺	C	15.4			1／4	ナデ→ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ　赤彩	
5	壺					1／4	ハケ	ナデ　赤彩	
6	壺					1／4	頸部：ハケ　肩部：縦ミガキ	ナデ→軽いミガキ	
7	壺	D				3／4	ハケ→ナデ　箆描沈線5本	ハケ→ナデ	
8	壺	A_2	19.6	9.4	35.2	完			3号住出土破片接合
9	壺	D_2	17.5			完	ハケ→ナデ　T字文B	ハケ→ナデ	
10	壺					1／6	縦ハケ→ヨコナデ　T字文B	ハケ→ナデ	
11	壺	B	24.1			1／2	ナデ　簾状文2＋鋸歯文	軽いミガキ	
12	壺					1／6	ナデ　櫛横線文2段＋鋸歯文	?	3号住出土破片接合
13	壺					1／5	ナデ　櫛簾状文	ハケ→ナデ	
14	壺					3／4	ハケ→ヨコナデ　簾状文2段	ナデ	
15	壺					1／2	ハケ　簾状文＋波状文	ナデ	
16	壺					1／3	ナデ　簾状文→波状文	ナデ	
17	壺					完	ハケ→軽いミガキ　簾状文	ハケ	
18	壺					1／5	ハケ→ナデ　LR縄文	ハケ→ナデ	文様は圧痕の可能性も有
19	壺					1／2	ハケ→ナデ　赤彩	ハケ→ナデ 胴中位まで赤彩	内面に灰白色の付着物有
20	壺					1／4	ハケ→軽いナデ	ハケ→ナデ	
21	壺					3／4	ハケ	ハケ→ナデ	
22	壺			8.6		2／3	ハケ	ハケ→ナデ	
23	壺			5.2		完	ハケ→ミガキ	ハケ	
24	壺			8.4		1／4	ハケ→雑なミガキ	ハケ	
25	壺			8.8		3／4	ハケ→ナデもしくは軽いミガキ	ハケ→ナデ	
26	壺			8.9		1／2	ハケ	ハケ	
27	壺			8.3		1／2	ハケ→ナデ	?	磨耗著しい
28	壺			9.2		1／4	ケズリ	ハケ	
29	壺			11.8		完	ハケ→軽いミガキ	ナデ	
30	壺			10.2		1／3	ミガキ	?	剝落激しい

31～60　2号住

図番号	器　種	型式	法　量　cm			遺存度	外　　面	内　　面	備　　考
			口径	底径	器高				
31	壺			8.8		1／4	ナデ	ナデ	
32	壺			8.4		完	ナデ→軽いミガキ 底面もミガキ	ナデ	
33	壺			11.2		1／2	ナデもしくは軽いミガキ	ナデ	磨耗著しい
34	壺			8.8		1／3	ハケ→ナデ	ナデ	
35	壺			9.6		完	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
36	壺			9.6		2／3	ヨコケズリ	ハケ→ナデ	
37	壺			10.8		1／4	ナデ　底面ケズリ	ナデ	
38	壺			11.4		2／3	ナデ　底面ケズリ	ナデ	
39	甕	Bd	21.2			1／8	口縁部：ヨコナデ　以下ハケ	口縁部：ヨコナデ 以下：ハケ	
40	甕	Ab	28.2			1／8	ヨコナデ　簾状文	ハケ	
41	甕	Bc_1	17.6			1／5	ナデ	ナデ	
42	甕	Dd	10.6			1／5	口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデ　簾状文	ハケ→ヨコナデ	
43	甕	Ca	14.0	6.6	13.8	3／4	胴部：軽いミガキ？ 櫛波状文　簾状文2	ハケ→軽いミガキ	外面剥落激しい
44	甕	Bc	20.6			1／3	口縁部：強いヨコナデ 胴部：ハケ→ナデ　簾状文2	ハケ→ていねいなナデ	
45	甕	Bc_2	18.1	8.2	(22.0)	1／2	口縁部：強いヨコナデ　胴部： ハケ→ナデ　T字文B→波状文	口縁：ハケ→ナデ 胴部：ケズリ	3号住出土破片接合
46	甕	Bc_1	19.4			1／4	口縁：ヨコナデ 櫛横線文→波状文3帯	口縁：ヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
47	甕		14.2			1／2	口縁：ヨコナデ 櫛簾状文　櫛波状文	ナデ	
48	甕	Bc_2	15.8			1／4	口縁：ヨコナデ　櫛簾状文2帯	ナデ	
49	甕	Bc_1	15.2			1／4	口縁：ヨコナデ　胴：ナデ 櫛簾状文　波状文3帯	口縁：ヨコナデ 胴部：ハケ→ナデ	
50	台甕					1／2	口縁：ヨコナデ　胴：ハケ 櫛波状文4帯	ヨコナデ→ヨコヘラナデ	3号住出土破片接合
51	台甕	Db	14.2			1／2	口縁：ヨコナデ(強)　胴：ハケ 櫛波状文4帯	口縁：ヨコナデ 胴：ていねいなナデ	
52	甕	Ba	15.7			1／4	簾状文→口縁波状文 胴波状文→縦羽状文	口縁：ナデ→ミガキ(軽) 胴：ハケ→ミガキ(軽)	
53	甕	Ba	18.6	8.4	25.9		口縁：ハケ→ヨコナデ(強)→施文 胴：ハケ→施文　簾状文2 波状文3帯　櫛縦位羽状文	口縁：ヨコナデ(強) 胴：ケズリ	
54	甕	Ba	18.7			1／2	口縁：ヨコナデ　胴：ハケ→施文 簾状文　波状文3帯　櫛条痕文	口縁：ヨコナデ 胴：ハケ→雑なミガキ	
55	甕	Ba	21.6	8.2	26.5	2／3	胴：ケズリ　底面：ケズリ	強くていねいなナデ	3·8号住出土破片接合
56	甕			11.2		1／2	ヘラナデもしくは軽いミガキ	ていねいなナデ	
57	甕			5.0		完	ナデ 底面：ヘラによる調整痕残す	ナデ	
58	甕			6.3		2／3	ナデ	ていねいなナデ	
59	甕			7.0		1／4	ナデ	ていねいなナデ	
60	甕			6.0		3／4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	

61～90　2号住

図番号	器　種	型式	法　量 cm			遺存度	外　　面	内　　面	備　　考
			口径	底径	器高				
61	甕			7.0		1 / 2	ハケ→ナデ　底面：ケズリ	ナデ	
62	甕			8.2		完	ハケ→ナデ？	ナデ	磨耗著しい
63	甕			8.0		3 / 4	ナデもしくはミガキ	ナデ	
64	甕			6.8		1 / 2	ハケ→軽いミガキ	ていねいなナデ	
65	甕			7.0		1 / 4	ハケ→ケズリ　櫛状状文 底面：ケズリ	ケズリ	
66	甑	A	19.0	7.6	9.6	3 / 4	口縁：ハケ→ヨコナデ 胴：ハケ　1孔	ハケ	底部内外面に灰白色の付着物有
67	甑			5.4		1 / 4	ナデもしくはヘラナデ　1孔	ハケ	
68	蓋					完	ナデ	ナデ	
69	蓋					完	ナデ	ナデ	
70	蓋					3 / 4	ハケ→軽いナデ	ハケ→ナデ	
71	深鉢					1 / 5	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩 櫛簾状文2帯	ハケ→ナデ	3号住出土破片接合
72	深鉢		10.5			1 / 8	ナデ　赤彩	ナデ　赤彩	
73	高坏	B	14.4			1 / 5	ハケ→ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
74	高坏 or 鉢	B				1 / 4	ナデ→ヘラナデ or ミガキ 赤彩	ハケ→ミガキ　赤彩	
75	高坏	B				1 / 8	ナデ→赤彩	ナデ→赤彩	
76	高坏	A	11.2			1 / 8	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
77	高坏	A	13.2			1 / 8	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
78	高坏	A	12.2			1 / 4	ナデ　ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
79	高坏	A	14.6			1 / 8	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
80	高坏	A	11.8			1 / 3	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
81	高坏	A	15.2			1 / 8	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
82	高坏	A	12.4			1 / 5	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
83	高坏	A	15.8			1 / 5	ナデ　ミガキ(軽)　赤彩	ミガキ　赤彩	
84	高坏	A	17.2			1 / 4	ハケ→ナデ or ミガキ 口縁部のみ赤彩	軽いミガキ　赤彩	
85	高坏	A	19.			1 / 2	ハケ→軽いミガキ　赤彩	ハケ→軽いミガキ　赤彩	
86	高坏		9.4			完	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩 脚：ハケ→ナデ	
87	高坏					2 / 3	ミガキ(軽)　赤彩	ナデ　赤彩　脚：ナデ	
88	高坏					完	ミガキ(軽)　赤彩	ミガキ(軽)　赤彩 脚：ナデ	
89	高坏					完	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩　脚：ナデ	
90	高坏					2 / 3	ミガキ　赤彩	脚：ナデ	

91　2号住、92～120　3号住

図番号	器種	型式	法量 cm 口径	底径	器高	遺存度	外面	内面	備考
91	高坏					2／3	ミガキ　赤彩		
92	壺	B	18.8				強いヨコナデ	ナデ	
93	壺	C	16.8			1／4	ハケ→ナデ　軽いミガキ？	ハケ→ナデ	
94	壺		15.2			1／8	ヨコナデ	ヨコナデ→軽いミガキ 赤彩	
95	壺	A_1	20.4			1／4	ナデ　口唇部にも赤彩及ぶ	ミガキ　赤彩	
96	壺	B	16.8			1／4	口縁：ハケ→ナデ→櫛波状文 頸：ハケ→櫛横線→鋸歯文→円形浮文→波状文2	口縁：ハケ→ミガキ 頸：ハケ→ナデ	
97	壺					2／3	軽いミガキ 櫛簾状文2→鋸歯文	口縁：ミガキ　赤彩 胴：ナデ	剝落激しい
98	壺					1／4	ナデ→櫛簾状文→鋸歯文→櫛条痕文	ハケ→ナデ	4号住出土破片接合
99	壺	A_1	26.8			1／3	ハケ→ナデ 櫛横線文2→鋸歯文	口縁：ミガキ(軽)　赤彩 胴：ハケ　ナデ	
100	壺			8.8		3／4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
101	壺			9.4		3／4	ハケ　底部付近は指頭調整	ハケ→ナデ	
102	壺			9.5		3／4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
103	甕		14.4			1／5	ナデ　簾状文　櫛条痕文	ナデ	
104	甕	Da	14.2			1／4	口縁：強いナデ 簾状文→波状文5	口縁：強いナデ 胴：ハケ→ナデ	
105	甕					1／4	ハケ→ナデ 簾状文→波状文2	ハケ→ナデ	磨耗著しい
106	甕	Ba	21.0			1／8	口縁：強いヨコナデ 他：ハケ→ナデ	口縁：強いヨコナデ 他：ハケ→ナデ	
107	甕	Ba	17.8			1／8	口縁：強いヨコナデ 櫛横線文(簾状文？)		
108	甕	Ba	16.4			1／8	ハケ→ナデ　波状文2　簾状文	ハケ→ナデ	
109	甕	Bd	18.4			1／8	口縁：ヨコナデ　簾状文2	ていねいなナデもしくはミガキ	
110	甕	Aa	20.0			1／5	口縁：ヨコナデ 胴：ハケ　簾状文2　櫛条痕文	口縁：ヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
111	甕	Bc_1	18.2	8.0	22.3	1／2	口縁：ハケ→強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ　底部：軽いミガキ 簾状文→波状文→櫛羽状文	口縁：ハケ→強いヨコナデ　胴：ハケ→ナデ	
112	甕	Aa	22.5	10.0	38.1	1／2	口縁：強いヨコナデ　胴上：ハケ→ナデ　胴下：ハケ→軽いミガキ 簾状文→波状文3→櫛羽状文	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
113	甕		19.4			1／5	強いヨコナデ	強いヨコナデ	
114	甕	Ac	23.2			1／4	口縁：強いヨコナデ 簾状文　波状文	ハケ→ナデ	磨耗激しい
115	甕	Ac	25.4			1／4	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ナデ	磨耗激しい
116	甕	Ac	27.0			1／8	ハケ→強いヨコナデ　T字文B	ハケ　強いヨコナデ	
117	甕			5.4		2／3	ハケ→ケズリ 底面：ケズリ→ナデ	ナデ→ミガキ	
118	甕			9.6		1／2	ハケ→ナデ　底面：ケズリ	ハケ→ナデ	内面：黒色物付着
119	甕						ハケ　底付近ケズリ	ハケ→ナデ	
120	鉢	C	10.2			1／8	ナデ	強くていねいなナデ	

121～137　3号住、138～144　8号住、145～150　4号住

図番号	器　種	型式	法量 cm 口径	底径	器高	遺存度	外　面	内　面	備　考
121	鉢		16.8				ハケ	ハケ	磨耗著しい
122	甑			4.6		1／4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	外底面に灰白色の付着物
123	深鉢					1／4	ハケ→軽いミガキ　赤彩	ハケ→ナデ	
124	鉢	B	13.0	6.0	5.1	1／4	ナデ	ナデ？　赤彩	磨耗著しい
125	鉢	A	16.5	6.6	7.5	1／3	口縁：ミガキ　赤彩 体部：ハケ→ナデ 底部付近：ケズリ→ナデ　底面ケズリ	ミガキ　赤彩	
126	鉢					1／4	ナデ　赤彩	ハケ	
127	鉢					1／4	ハケ→軽いミガキ→赤彩	ハケ→ナデ	
128	鉢	A	21.2	8.0	9.8	完	ハケ→ミガキ→赤彩 底面ケズリ	ハケ→軽いミガキ　赤彩	
129	高坏	A	15.4			1／8	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
130	高坏	A	18.6			1／8	ハケ→ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ　赤彩	
131	高坏	A	18.8			1／3	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
132	高坏	A	21.8			1／4	ハケ→ミガキ　赤彩	ハケ→軽いミガキ　赤彩	
133	高坏	B	18.2		13.8	完	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩　脚：ナデ	
134	高坏					1／2	軽いミガキ　赤彩	赤彩　脚：ナデ	
135	高坏					1／2	赤彩	？　脚：ナデ	磨耗著しい
136	高坏					1／3	赤彩	脚：ハケ→ナデ	磨耗著しい
137	高坏					1／3	ミガキ　赤彩	脚：ハケ→ナデ	
138	壺	D_2	12.2			1／4	強いヨコナデ　ヘラ描横線	ハケ→ナデ	
139	壺					1／4	ハケ→ナデ　簾状文2	ハケ→ナデ	
140	甕	Bb	16.8			1／8	強いヨコナデ　簾状文	強いヨコナデ	
141	甕			6.6		2／3	ナデ　底面：ケズリ	ナデ	
142	甕			7.4		2／3	ナデ	ナデ	
143	台甕	Dc	14.0			1／4	口縁：ヨコナデ 簾状文2→波状文3	ナデ	
144	高坏					1／3	赤彩	ナデ	
145	壺	B	18.4			1／4	口縁：強いヨコナデ　以下ナデ	ハケ→ミガキ　赤彩	
146	壺	A_1	15.4			1／8	ナデ	ミガキ　赤彩	
147	壺	A_2	16.4			1／4	ハケ→強いヨコナデ	ハケ→ナデ ミガキ(軽)　赤彩	
148	壺	A_2	15.0			1／2	ナデ　T字文B	ハケ→ナデ　赤彩	磨耗著しい
149	壺	C	18.5			2／3	口縁：ハケ→ナデ 櫛横線文→鋸歯文	ハケ→ナデ	
150	壺					1／8	ヘラ沈線→鋸歯文 ミガキ　赤彩	？	

151～180　4号住

図番号	器種	型式	法量 cm 口径	底径	器高	遺存度	外面	内面	備考
151	壺	D_2	13.6			1／4	ハケ→強いヨコナデ　簾状文	ハケ→ナデ	
152	壺	A_1	18.2			2／3	ハケ→軽いナデ ヘラ描横羽状文	ハケ→ナデ	
153	壺	A_1	17.6			1／3	ハケ→強いヨコナデ	ハケ→ナデ	
154	壺		20.8			3／4	口縁：ヨコナデ 頸胴：ハケ→ミガキ　T字文B	口縁：ミガキ　赤彩 胴：ハケ→ナデ	
155	壺					1／5	ハケ→軽いナデ　T字文B	ハケ	
156	壺					2／3	口縁：ハケ→ナデ 胴：軽いミガキ　簾状文2	口縁：軽いミガキ　赤彩 胴：ハケ→ナデ	
157	壺					1／4	ハケ　簾状文	ハケ→ナデ	
158	壺					1／4	ハケ→ナデ　簾状文	赤彩	磨耗著しい
159	壺					完	ハケ→ナデ？　簾状文2	ハケ→ナデ	
160	壺					2／3	ハケ→ナデ？　簾状文2	ナデ	
161	壺	D_1	18.5	9.4	37	完	ハケ→ナデもしくは軽いミガキ 簾状文2	ハケ→ナデ？	
162	壺					1／3	簾状文2→波状文1	？	磨耗著しい
163	壺					1／3	簾状文→波状文	ハケ→ナデ	
164	壺					1／3	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
165	壺					1／2	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
166	壺			8.6		4／5	ハケ→ナデもしくは軽いミガキ	ハケ→ナデ	
167	壺			7.8		3／4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
168	壺			8.4		1／3	ハケ	ハケ→ナデ	
169	壺			7.2		1／4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
170	壺			8.6		完	ハケ　底部：ケズリ	ナデ	
171	壺			8.6		1／2	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ナデ	磨耗著しい
172	壺			10.2		1／2	ナデ？	？	
173	壺			11.6		完	ナデ　底面：ケズリ	ナデ	
174	甕					1／4	ナデ　左回り簾状文2→2本一組のヘラ刺突→2本一組のヘラによるコの字重ね文	ナデ　輪積み痕明瞭	
175	甕		14.2			1／3	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
176	甕		23.6			1／8	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	
177	甕	Ca	13.3			3／4	口縁：強いヨコナデ　胴：ハケ 簾状文→縦羽状文	口縁：ハケ→ミガキ(軽) 胴：ハケ→ミガキ	
178	甕	Bd	15.4			1／8	口縁：強いヨコナデ 簾状文→櫛線	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
179	甕					1／3	ハケ　簾状文2→波状文	ハケ→ナデ	
180	甕	Bc_1	15.1			3／4	口縁：強いヨコナデ 簾状文→波状文→羽状文	口縁：ハケ→ヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	

181～210　4号住

図番号	器　種	型式	法　量 cm			遺存度	外　　面	内　　面	備　　考
			口径	底径	器高				
181	甕	Bc₂	22.0			1／3	口縁：ヨコナデ 簾状文→波状文→縦羽状文	口縁：ナデ→ミガキ(軽) 胴：ハケ→ナデ？	磨耗著しい
182	甕	Bc₁	21.8			3／4	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
183	台甕					3／4	ハケ　ナデ	ハケ→ナデ	磨耗、剝落著しい
184	甕			5.8		1／3	ハケ→ナデもしくはケズリ	ナデ	
185	甕			8.0		完	軽いミガキもしくはナデ 底面：ケズリ→ナデ	ていねいなナデ	
186	台甕					完	ハケ	ハケ	
187	鉢	B	15.6			1／4	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ナデ	
188	鉢	A	11.6			1／4	口縁：ヨコナデ 他：ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
189	鉢	A	15.6			1／8	口縁：ヨコナデ 他：ハケ→ナデ	ナデ	
190	鉢	A	13.8			1／2	ナデ	ナデ	
191	甑	B	20.3	6.6	12.6	3／4	ハケ	ハケ	内面、底部外面に灰白色の付着物
192	甑			6.4		2／3	ナデ　焼成後穿孔	ナデ	甕底部を転用
193	甑			5.8		3／4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
194	鉢？		17.8			1／8	ハケ→ナデ　赤彩	ハケ→ナデ	
195	高坏	A	14.0			1／8	ハケ→ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ　赤彩	
196	高坏	A	14.8			1／3	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
197	鉢	A	16.2			1／4	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	2孔一対の穿孔有
198	鉢	A	16.2			1／4	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	ハケ→ミガキ？　赤彩	磨耗著しい
199	鉢	A	17.8			1／3	？	ハケ→ミガキ？　赤彩	磨耗著しい
200	鉢(？)	A	21.3			1／8	ハケ→ミガキ(軽) 赤彩　波状文	ハケ→ミガキ？	
201	高坏	B	13.2			1／2	ていねいなミガキ　赤彩	ていねいなミガキ　赤彩	
202	高坏	B	20.4			1／8	ハケ→ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ　赤彩	
203	鉢	B	12.8			1／4	口縁：強いヨコナデ 軽いミガキ？	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
204	高坏	B	22.5			1／4	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
205	鉢	B	18.8			1／8	口縁：強いヨコナデ　ナデ	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
206	鉢	B	6.4			1／4	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
207	鉢	B	18.4	6.8	7.5	3／4	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	磨耗著しい
208	鉢	B	23.	8.0	8.6	4／5	ハケ→ナデ　口唇：ヘラ刻み	ミガキ(軽)　赤彩	
209	高坏					1／4	ハケ→ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
210	鉢			5.6		1／8	ハケ→ナデ→赤彩	ナデ　赤彩	

211～215　4号住、216～234　5号住、235～240　6号住

図番号	器　種	型式	法　量 cm			遺存度	外　　面	内　　面	備　　考
			口径	底径	器高				
211	鉢			7.0		1 / 3	?	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	磨耗著しい
212	高坏					3 / 4	ハケ→ミガキ　赤彩	脚：ナデ	磨耗著しい
213	高坏					完	ミガキ　赤彩	?	剝落著しい
214	高坏					3 / 4	ハケ→ミガキ→赤彩	脚：ナデ	
215	高坏					完	赤彩	赤彩	磨耗著しい
216	壺	B	20			1 / 8	強いヨコナデ　波状文1	ハケ→ヨコナデ	
217	壺					1 / 4	ハケ→ミガキ　赤彩 ヘラ描沈線	ハケ→ナデ	
218	壺	B	17.4			1 / 4	口縁：ヨコナデ　口頸：ハケ 胴：ハケ→ミガキ ヘラ描横羽状文	ハケ→ナデ	
219	壺					1 / 4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
220	壺					1 / 4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
221	壺			7.0		2 / 3	ハケ→ナデ　底部：ケズリ	ハケ→ナデ	
222	壺					2 / 3	ナデ	ハケ→ナデ	
223	壺					1 / 3	ハケ→ナデもしくは軽いミガキ	ハケ→ナデ	
224	壺			11.6		1 / 3	ハケ→ナデ	ナデ	磨耗著しい
225	甕	Ac	23.4			1 / 2	口縁：強いヨコナデ　胴：ハケ 簾状文3	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
226	甕		10.6			1 / 3	ヨコナデ	ハケ→ナデ	
227				5.8		1 / 4	ハケ→ナデ　焼成前穿孔	ハケ→ナデ	
228	蓋		18.4			1 / 4	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
229	高坏？	C	7.7			1 / 4	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
230	高坏	D	14.8			4 / 5	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
231	高坏	A	18.8			1 / 3	ハケ→ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
232	高坏？	B	18.6			1 / 5	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	鉢？
233	高坏	B	20.2			1 / 8	ハケ→ミガキ？　赤彩	ハケ→ミガキ？　赤彩	
234	鉢			6.0		3 / 4	ケズリ→ナデ	ミガキ？　赤彩	
235	壺		16.6			1 / 2	ハケ→ナデ　簾状文→波状文	ハケ→ナデ	
236	壺		17.6			1 / 2	口縁：ヨコナデ　頸：ハケ 簾状文	ハケ→ナデ	
237	壺					1 / 3	ハケ　簾状文	ハケ→ミガキ(軽)？ 赤彩	
238	壺		13.8			1 / 2	口縁：ハケ→ヨコナデ 頸：ハケ　ヘラ沈線5	ハケ→ナデ	
239	壺					1 / 4	ハケ→ナデ(？)　波状文	ハケ→ナデ	
240	壺	D_1				1 / 4	ハケ→ナデ ヘラ沈線→鋸歯文→円形浮文	ハケ→ナデ	

241～266　6号住、267～270　7号住

図番号	器　種	型式	法量 cm 口径	底径	器高	遺存度	外　　面	内　　面	備　　考
241	壺					1／3	ハケ→ミガキ(?) ヘラ描横羽状文→鋸歯文	ハケ→ナデ	磨耗著しい
242	壺			8.8		1／4	ハケ	ハケ→ナデ	
243	壺			10.6		2／3	ハケ	ハケ→ナデ	
244	壺			9.0		1／6	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
245	壺			8.4		1／4	ハケ→ナデ 底部：ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	
246	壺			12.0		1／4	ハケ　底部：ケズリ→ナデ	ハケ　ハケ原体2種有	
247	壺	A_1	19.4			3／5	ハケ→ナデ　ヘラ描横羽状文	ハケ→ナデ	
248	壺			8.5		1／4	ハケ→ケズリ　底部：ケズリ	ハケ：ナデ	
249	壺			8.4		1／3	ハケ　ケズリ　底部：ケズリ	ハケ→ナデ	
250	甕		15.2			1／8	ヨコナデ	ヨコナデ	
251	甕		14.1			1／8	強いヨコナデ	強いヨコナデ	
252	甕	Ba	17.0			1／6	強いヨコナデ	強いヨコナデ	
253	甕	Ba	16.1			1／3	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ　簾状文	口縁：強いヨコナデ 胴：?	磨耗著しい
254	甕	Ba	16.8			1／8	口縁：強いヨコナデ 簾状文→波状文→縦羽状文	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
255	甕	Ba	21.8			1／8	口縁：ハケ→強いヨコナデ 簾状文→羽状文	口縁：ハケ→強いヨコナデ　胴：ハケ→ナデ	
256	甕	Ba	16.0			2／3	口縁：強いヨコナデ 簾状文2→波状文→縦羽状文	口縁：強いヨコナデ 胴：ナデ	
257	甕	Cb	15.6			1／5	口縁：ヨコナデ 簾状文→波状文→縦羽状文	口縁：ヨコナデ 胴：ハケ	
258	甕			7.4		1／4	ケズリ?	ハケ→ナデ	
259	甕			7.9		2／3	ハケ→ナデ	ナデ	
260	鉢					1／3	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
261	高坏	A	15.9			1／8	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
262	高坏	A	19.2			1／8	ミガキ(軽)　赤彩	ミガキ(軽)　赤彩	
263	高坏	A	19.6			1／8	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	ミガキ(軽)　赤彩	
264	高坏					完	赤彩	?	磨耗著しい
265	高坏					完	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	赤彩	
266	鉢	B	25.8			1／3	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
267	壺	B	12.8			1／6	強いヨコナデ	強いヨコナデ	
268	壺		13.2			1／6	ハケ→強いヨコナデ	ヨコナデ	
269	壺	A_1	18.4			1／4	ハケ→軽いナデ	ハケ→ナデ　ミガキ? 赤彩	
270	壺	A_1	19.0			1／3	?	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	磨耗著しい

271～295　7号住、296～298　9号住、299～300　10号住

図番号	器　種	型式	法　量　cm			遺存度	外　　面	内　　面	備　　考
			口径	底径	器高				
271	壺			6.9		完	ハケ→ナデ　簾状文→波状文2	ナデ	磨耗激しい
272	壺	D_2	16.2			3／4	ハケ→ナデ　ヘラ描沈線5	ハケ→ナデ	
273	壺	A_1	23.8			3／4	口縁：ナデ　胴：ハケ→ナデ 櫛横線2→波状文	赤彩	剝落激しい
274	壺			9.8		1／2	ハケ→ナデ	ナデ	
275	壺			8.6		1／4	ハケ→ナデ	？	磨耗著しい
276	壺			8.2		1／3	ハケ→ナデもしくはミガキ 底面：ケズリ	ナデ	
277	壺			8.1		1／3	？	？	磨耗著しい
278	壺			7.8		1／4	？	？	磨耗著しい
279	壺			7.9		1／5	ハケ？→ナデ	ナデ	
280	甕	Cb	11.2	6.0	13.9		口縁：ヨコナデ 簾状文→波状文	ハケ→ナデ	口縁部は楕円形を呈する
281	甕	Bc_1	12.8	6.1	18.2	2／3	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ　波状文3	ハケ→ナデ	
282	甕	Bc_1	17.1	8.1	21.7	2／3	口縁：ヨコナデ 簾状文→波状文3	ハケ→ナデ	剝落激しい
283	甕	Bc_1	19.8	8.1	26.3	完	口縁：強いヨコナデ　胴：ハケ→ナデ　簾状文→波状文4	ナデ	
284	甕			8.0		1／3	ハケ→ナデ 底部：ケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	
285	甕			9.6		1／3	ヘラナデ　底部：ケズリ	ケズリ→ナデ	
286	甕			6.0		1／2	ケズリ？	ケズリ→ナデ	
287	甕			5.1		完	ケズリ→ナデ？	ナデ	
288	鉢			7.6		1／4	赤彩　底部：ケズリ	ナデ	
289	甕			7.8		1／3	ハケ→ナデ？	強いナデ	
290	小壺？						？	ナデ	磨耗著しい
291	鉢	B	14.0			完	ケズリ→ナデ	ハケ→ナデもしくはミガキ(軽)→赤彩	
292	高坏？	B	15.0			1／8	ハケ→ナデ	赤彩	
293	鉢	B	15.2	5.0	5.7	完	ナデ	ナデ？　赤彩	
294	鉢	C	11.4	6.7	8.3	1／4	ナデ	ナデ	
295	高坏	A	12.5			1／8	ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ　赤彩	
296	壺			9.8		完	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
297	甕	Bc_1	15.6			1／6	簾状文→波状文	ナデ	磨耗著しい
298	甕			6.2		2／3	？　底部：ヘラミガキ	ハケ→ナデ	
299	壺	B	16.8			1／8	ヨコナデ	ヨコナデ	
300	壺	B				完	ハケ→ミガキ(軽)？　簾状文2	口縁：ミガキ(軽) 赤彩　胴：ナデ	

301～328　10号住

図番号	器　種	型式	法量 cm 口径	底径	器高	遺存度	外　面	内　面	備　考
301	壺		12.8			1／8	ナデ　簾状文→波状文	ハケ→ミガキ(軽)	
302	壺		10.5			1／3	？　簾状文	口縁：ナデ　胴：ハケ	甕？　磨耗著しい
303	壺					1／8	？　簾状文	ハケ→ナデ？	磨耗著しい
304	壺			7.0		1／3	？	ハケ→ナデ	
305	壺			10.9		1／4	ハケ→ミガキ？	？	
306	壺			10.7		1／4	ハケ→ナデ 底部：ケズリ→ナデ	ハケ	
307	壺			9.3		1／2	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
308	甕	Bd	17.0			1／8	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
309	甕	Bc1	18.0			1／8	ハケ→強いヨコナデ	強いヨコナデ	
310	甕		10.9			1／8	ヨコナデ　簾状文	ヨコナデ	
311	甕		9.9			1／8	ヨコナデ　簾状文	ヨコナデ	
312	甕		11.8			1／8	ヨコナデ　簾状文	ヨコナデ	
313	甕	Bd	17.2			1／4	ハケ→ヨコナデ　簾状文	ヨコナデ	
314	甕	Bc2	16.8			1／6	ヨコナデ　簾状文	ヨコナデ	
315	甕	Dd	11.7			1／4	簾状文→波状文	口縁：強いヨコナデ 胴：ハケ→ナデ	
316	甕		22.4			1／4	口唇：ヘラ刻み　簾状文	ハケ→ナデ？	
317	甑			4.0		2／3	ケズリ　底面：ケズリ	ナデ	
318	台甕					完	ハケ→ナデ	ナデ	
319	高坏	C	8.5			1／6	ミガキ　赤彩	ハケ→ミガキ　赤彩	
320	高坏	C	8.2			1／6	ミガキ　赤彩	ミガキ　赤彩	
321	高坏	A	20.0			1／8	ミガキ？　赤彩	ハケ→ミガキ(軽)　赤彩	
322	高坏	B	18.7			1／6	？	ミガキ(軽)　赤彩	
323	高坏	B	18.4			1／8	？	ミガキ(軽)　赤彩	
324	台鉢？					3／4	ミガキ(軽)　赤彩	ハケ→ナデ	
325	高坏					完	ミガキ(軽)　赤彩	赤彩　脚：ナデ	
326	鉢			8.3		1／3	ミガキ軽)　赤彩	ナデ	
327	鉢			7.2		1／3	ミガキ　赤彩	赤彩	
328	鉢			6.6		2／3	？	赤彩	

（2）土製品

ミニチュア土器（図52―1～11）

いずれも破片であり、完形となるものはない。

壺（1）外面・口縁部内面に赤色塗彩、頸部に箆描横線文を有する。内外面にハケメを残す。

甕（2～4）頸部に櫛描簾状文・波状文を施し、内面はヘラ磨き調整され赤色塗彩したものの認められる。台付となる可能性も考えられる。

底部（8・9）粗雑な調整により手捏ねに近い。甕あるいは壺底部と思われるが判別し難い。

脚台（5～7）台付甕の脚台と思われる。5は内外面ともにヘラ削り調整されるが、6・7は手捏ねに近い粗雑な成形である。

鉢（10）内面はヘラ磨きと赤色塗彩が施される。底部はやや丸みを帯びる。

甑（11）底部に1孔を有し、鉢形を呈すると思われる。外面はヘラ削りにより調整される。

形態的には、一般的な土器とほぼ同様の規格に基づくが、½～⅓の大きさに製作されている。成形は、手捏ねに近い粗雑なものも存在するが、輪積みあるいは巻き上げにより、調整もハケメ・ヘラ削り・ヘラ磨きなど、一般的土器製作技法から遊離するものではない。施文意識も、壺・甕における頸部文様帯としての箆描文・櫛描文は一般的な土器に準ずる。これらのことから、ここにミニチュア土器として抽出した小形土器は、原型を比較的忠実に模すことを基本として製作されている点が理解される。（1～5・9～11―3号住、6―2号住、7―4号住、8―10号住）

土製勾玉（図52―12・13）

外面を軽くヘラ磨きし焼成したもので、12は赤色塗彩されている。12は3号住、13は検出面より出土した。

土製円板（図52―14～34）

土器破片を直径5～2㎝の円板に再加工したものである。成形方法は、土器破片の周縁部を粗く打ち欠いた後、すり磨いて円形に近づけている。ただし、すり磨きは粗雑であり、ほとんど打ち欠いた面をそのままに残す例が多い。また赤色塗彩破片（18・22・23・32～34）、文様を有する破片（25・31）を利用している例もあるが、無文の破片との比率から考えて、意識的にそれらを選択した意図は認められない。（14・21～23―2号住、15～20・25～34―3号住、24―10号住）

弥生時代土製品の類例は、県内では岡谷市「橋原遺跡」（岡谷市教委1981）において報告されている。これら土製品の用途については、祭祀的性格を有する遺物と考えて大過無いものと思われるが、その性格の位置付けには更に検討を加える必要があろう。本遺跡において、特定の住居址（3号住）より集中して検出された状況は、注意されるべき点である。（青木）

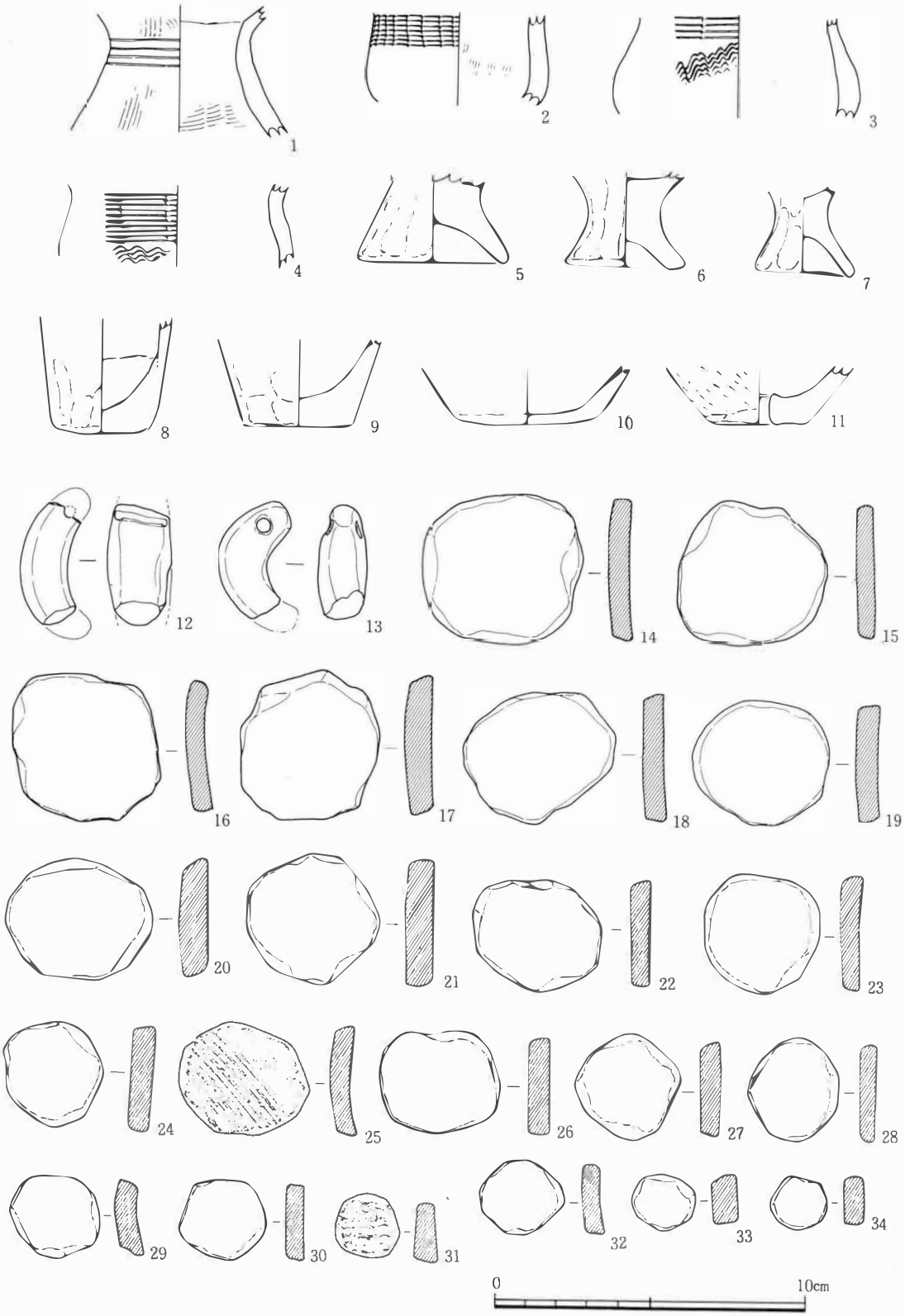


図52　土製品実測図（1：2）

（3）石器

打製石斧（図53―1）

頁岩製で全長8.2cmの小形品である。検出面より出土したものであり、弥生時代の所産によるものかは確定できない。重量61.3g。

敲石（図53―2）

硬質の砂岩製で、扁平な楕円礫の一端のみに潰れ痕及び剥離痕が存在する。それ以外の面には使用の痕跡は認められない。重量160.5g。

磨製石鏃（図53―3～6）

頁岩製で、無茎凹基、3のみ身に1孔を有する。3は⅔を、5は先端部を欠損している。いずれも両面を全面にわたりすり磨いて製作している。4・6は製作途上で放棄された状態と理解され、穿孔前の未成品として把握しておきたい。重量4―3.9g、6―1.1g。

剥片（図53―7～9）

やや横長の剥片であり、石材は頁岩である。8には周縁部を折りとったような痕跡が認められる。いずれも磨製石鏃製作に際して、素材として剥離されたものと考えられる。重量7―9.3g、8―7.1g、9―8.1g。この他、いくつかの不定形な剥片が3・4号住より出土している。

石核（図54―1・2）

拳大の頁岩円礫に、不定方向の打撃による剥離を繰り返しており、磨製石鏃の素材となる剥片を剥取る石核として把握した。打面は一方向にとどまらず複数存在し、稜の部分に潰れ痕を残すものも認められる。潰れ痕は、剥離に際して、台石に置いて打撃を加えた痕跡である可能性も考えられる。重量1―410g、2―460g。

凹石（図54―3～5）

輝石安山岩のやや扁平な円礫の1面に直径6～7cmの円形の凹みが形成されている。凹みは凹凸が激しく、敲打によって徐々に形成されているものであり、その深さは一定していない。凹みそのものが機能を有しているというより、使用の過程で結果として残されたものと理解される。底面が平坦であり、据え置いて使用したものであることが推定され、敲打を伴う何らかの作業に用いた台石である可能性が高い。重量3―1.30kg、4―2.86kg、5―2.81kg。

（なお、石器については長野県埋蔵文化センター大竹憲昭氏、長野市立博物館唐沢茂氏のご教示を頂いた。記して感謝申し上げたい。）

（青木）

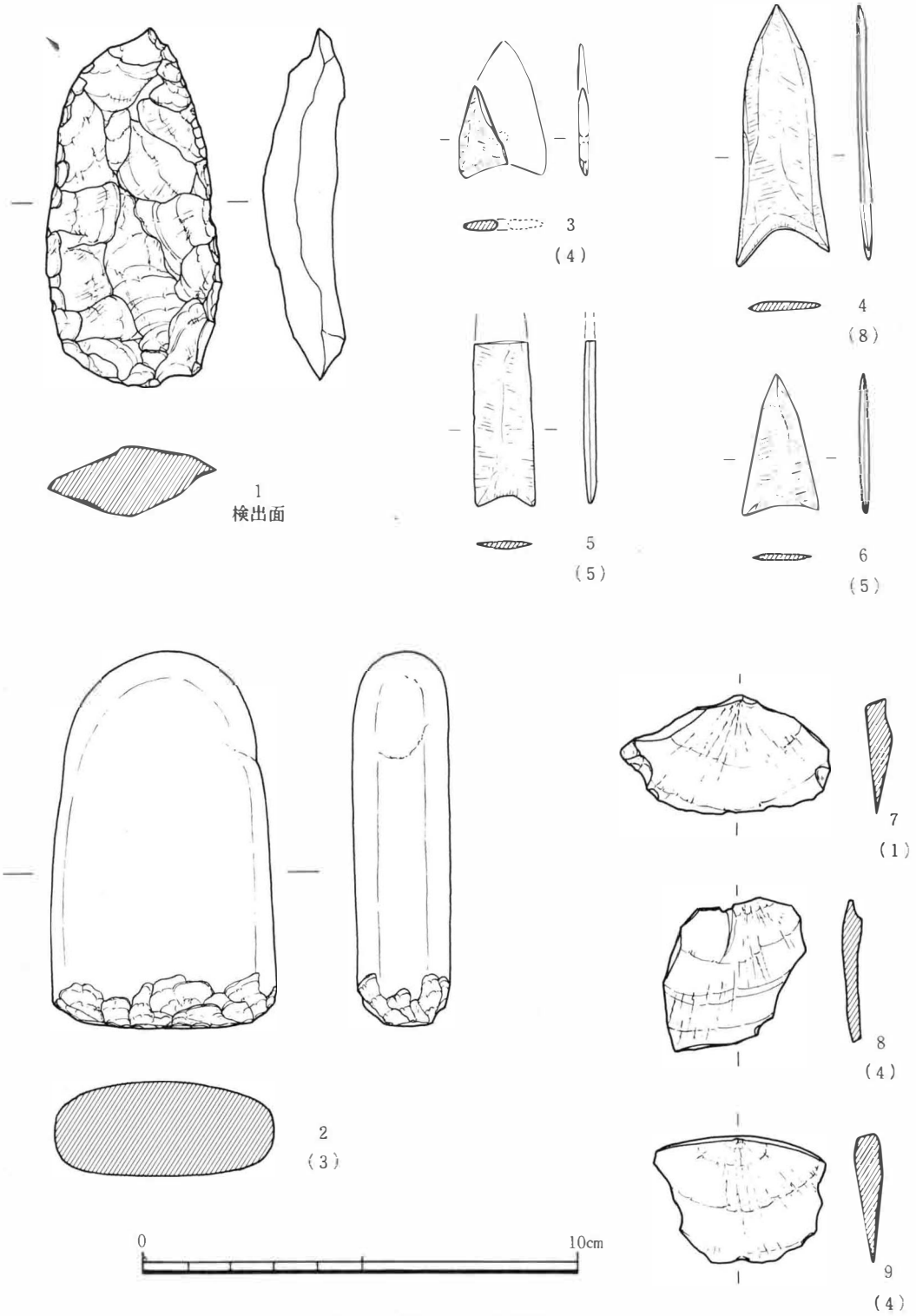


図53　石器（1）実測図（2：3）
（　）内数字は住居址番号

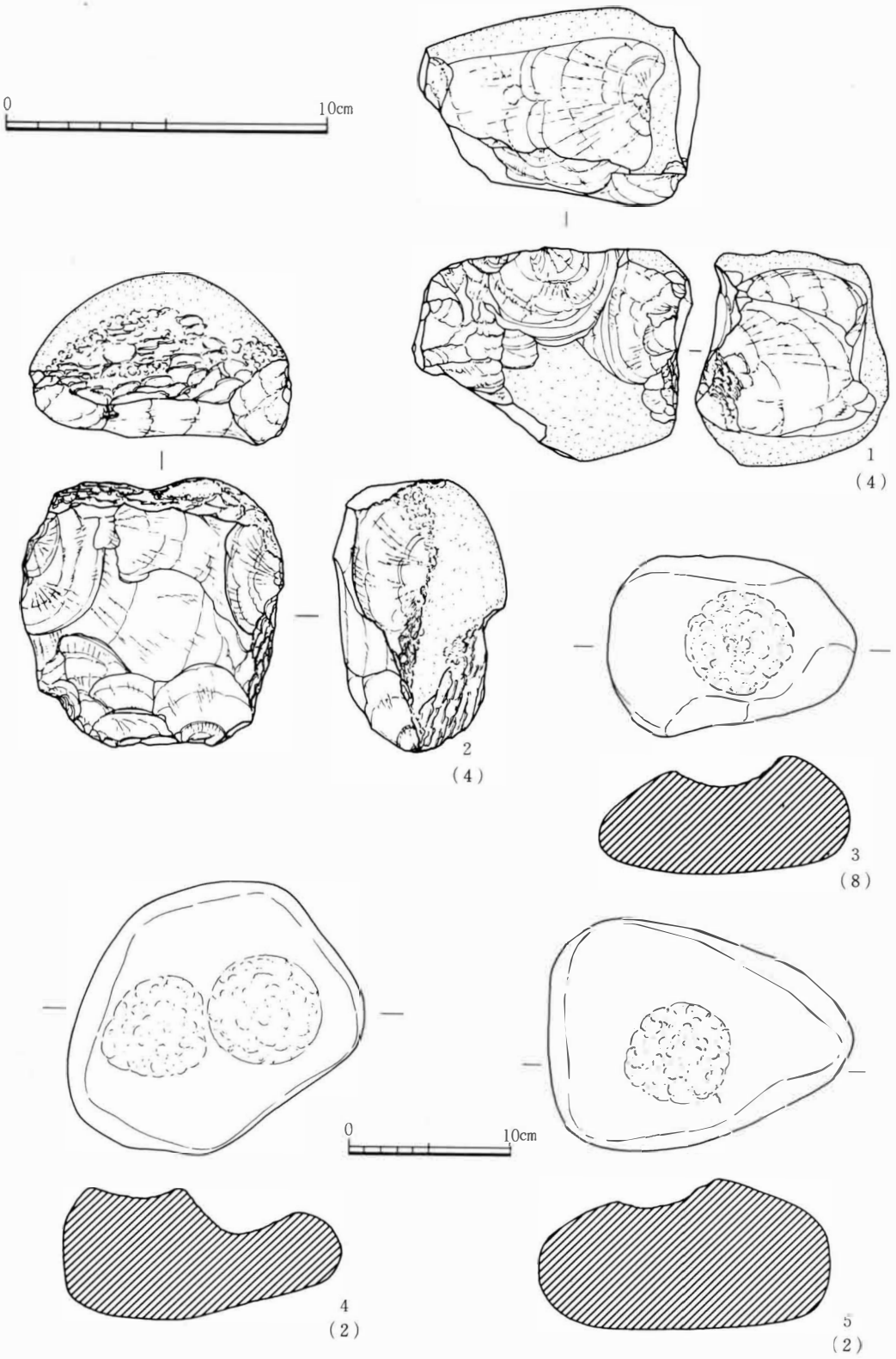


図54　石器（2）実測図（1・2－1：2、3～5－1：4）
（　）内数字は住居址番号

写　真　図　版

図版１　遺跡の全景

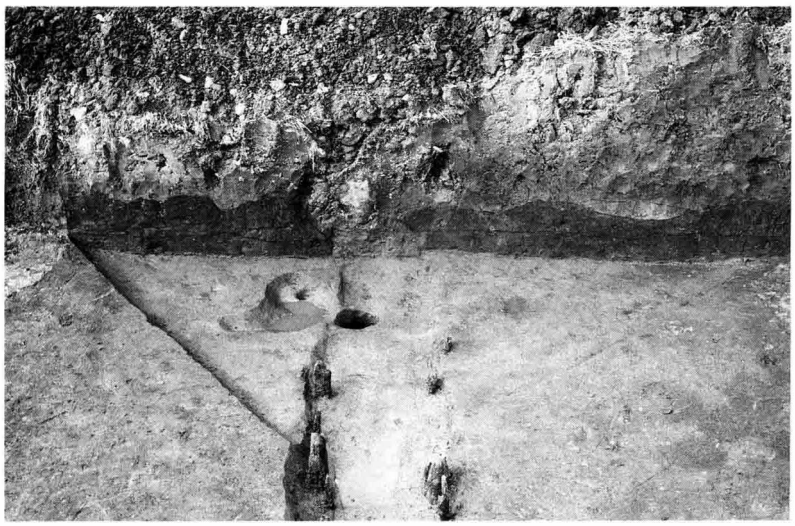
北側より

東側より
（１・２・９号住）

南側より
（手前３号住）

図版２　１・２号住居址

１号住

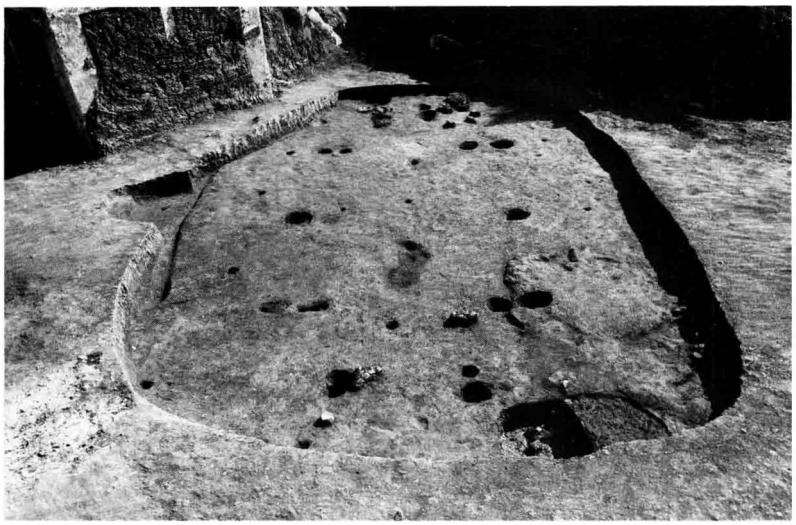


２号住
（東より）

２号住
（南より）

図版３　２・３号住居址

２号住
（左出入口
（右　炉

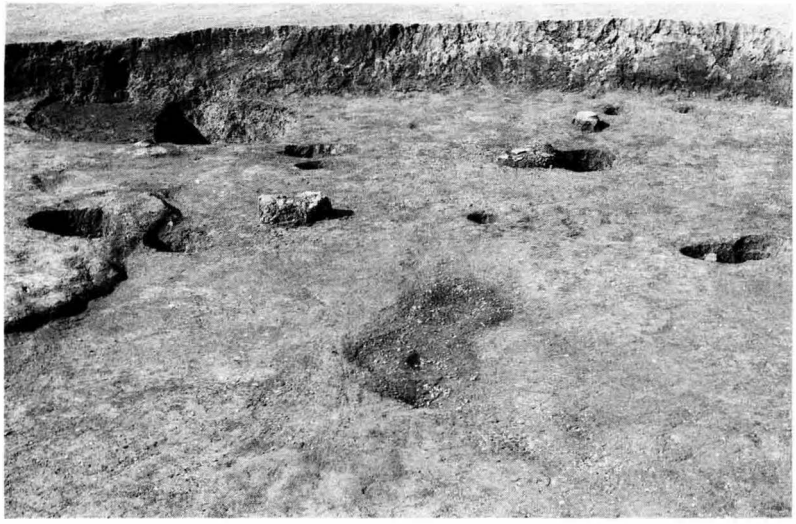


３号住
（北より）

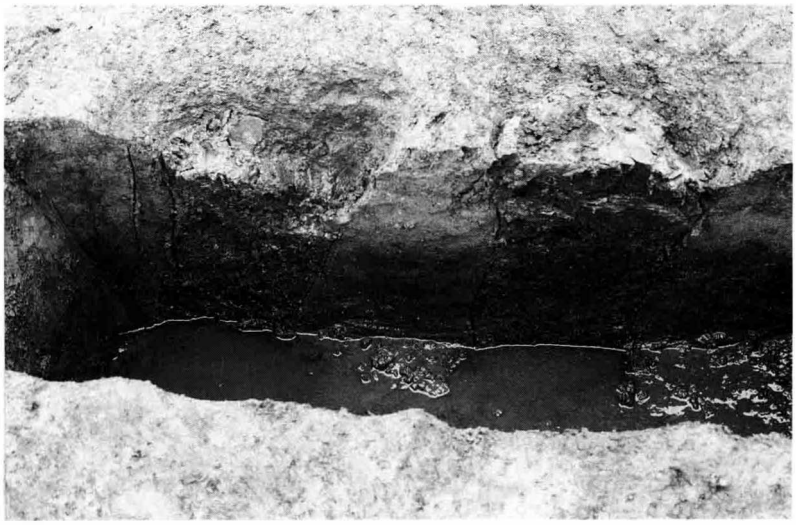
３号住
（東より）

図版4　3号住居址

炉付近

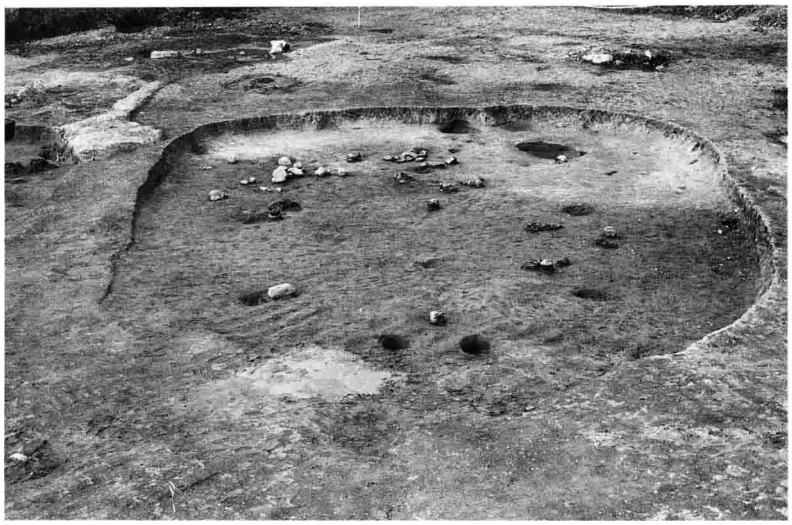


主柱穴
断面

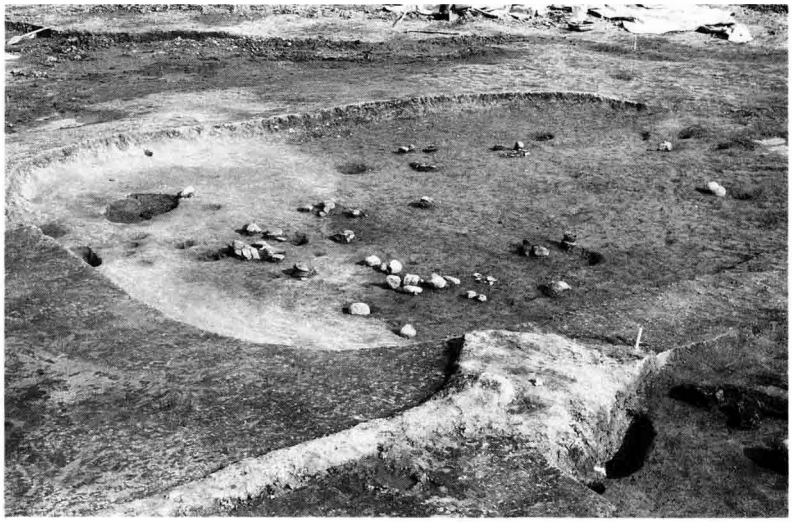


出入口

図版５　４号住居址



南より

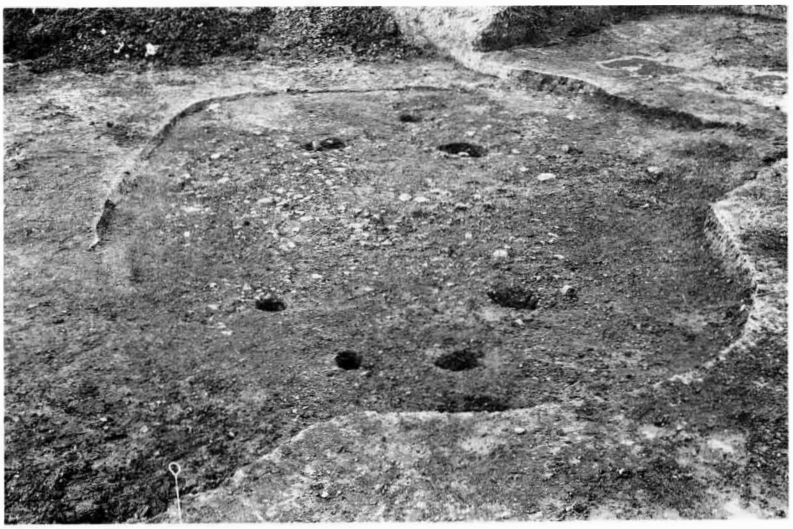


西より

炉付近

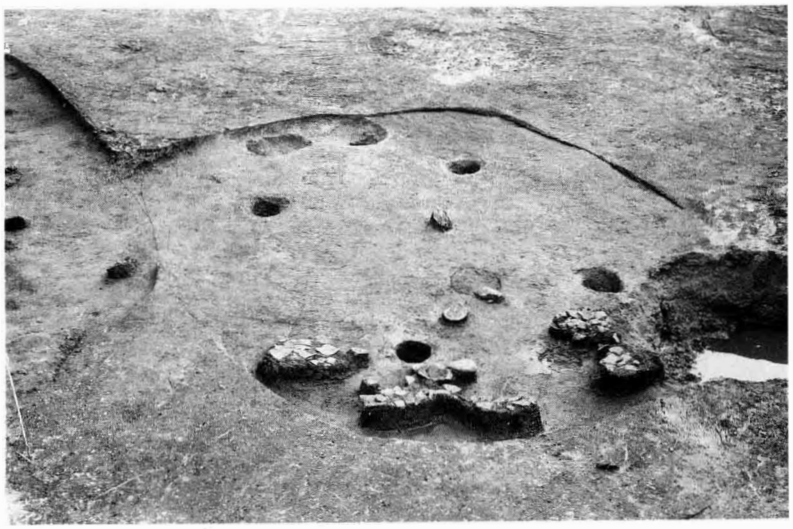
図版６　５・６号住居址

５号住
（南より）

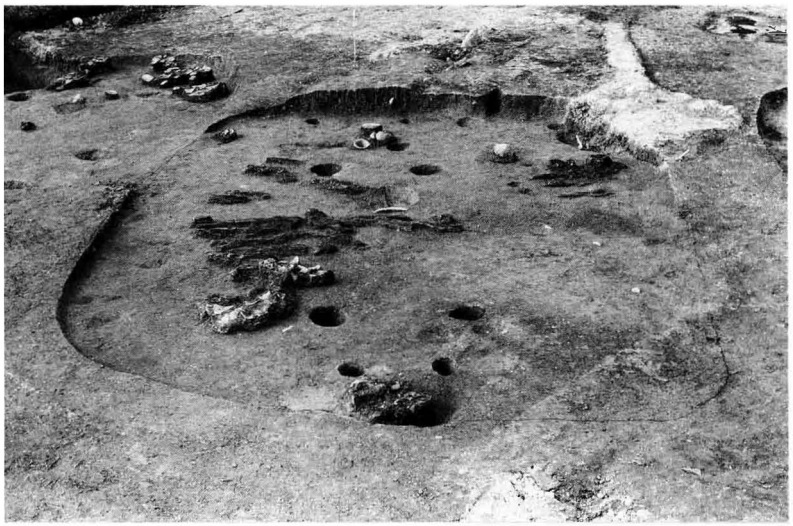


６号住
（南より）

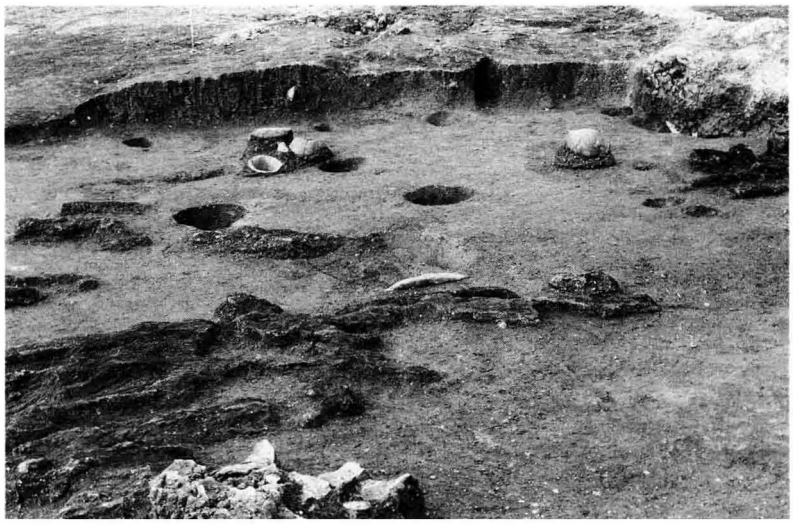
６号住
（北より）



図版7　7号住居址



南より



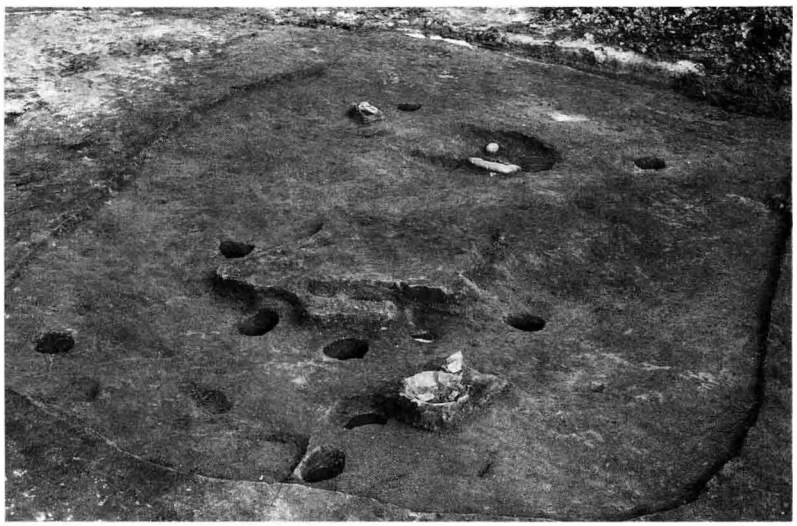
床面
炭化材

炉

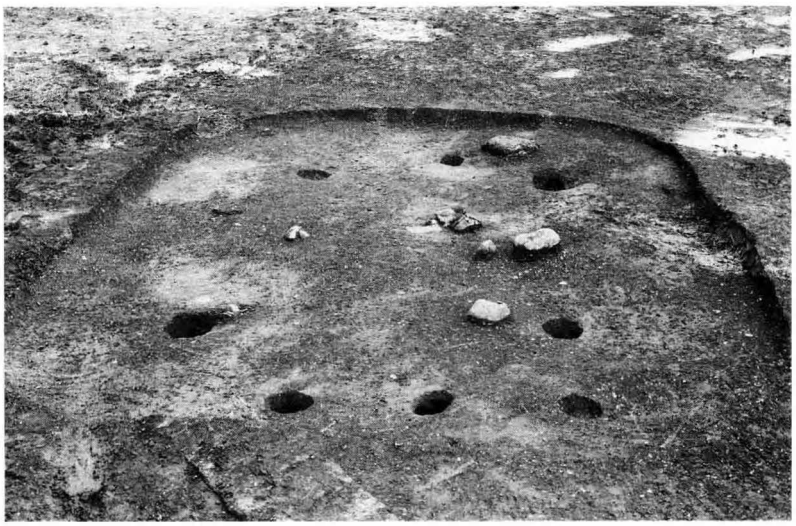
図版８　８・９・10号住居址

８号住
（南より）

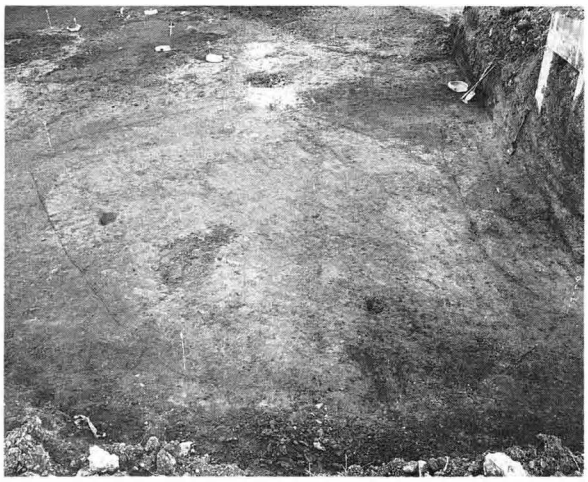
９号住
（西より）



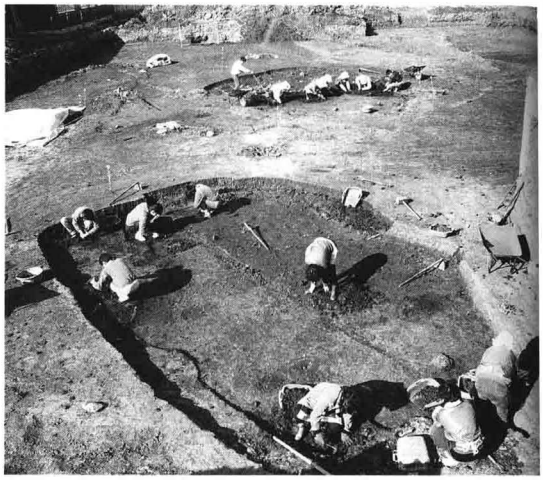
10号住
（南より）



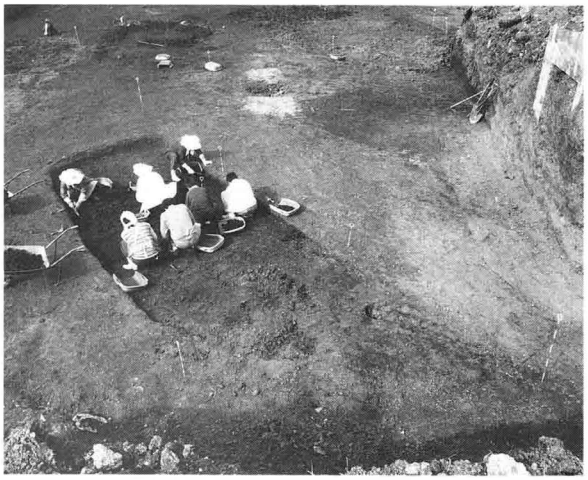
図版9　住居址の発掘経過（3号住）



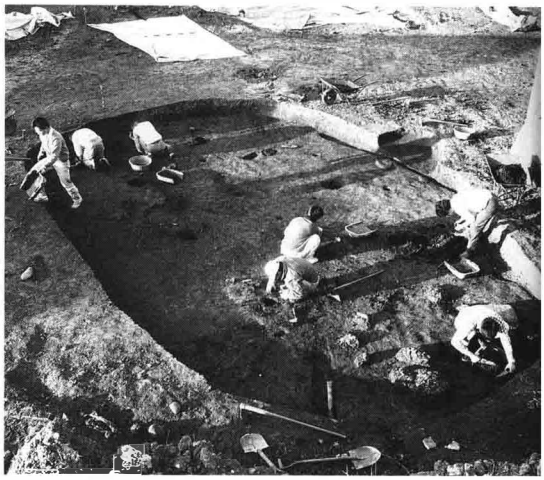
①輪郭の検出



④床面を露出する



②片面を掘り下げる

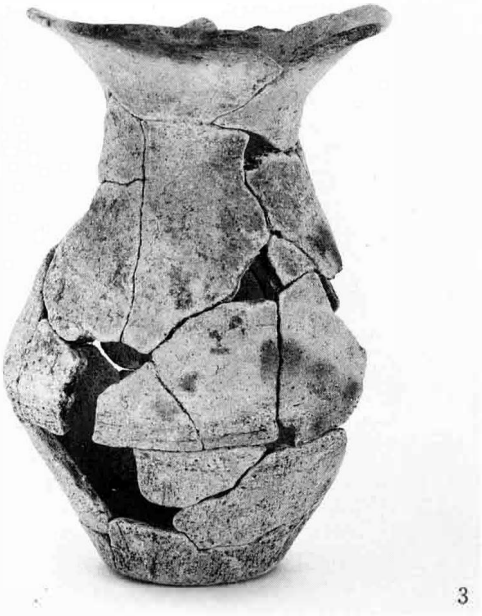


⑤柱穴・ピットを検出する

③土層を確認しながら全面を掘り下げる

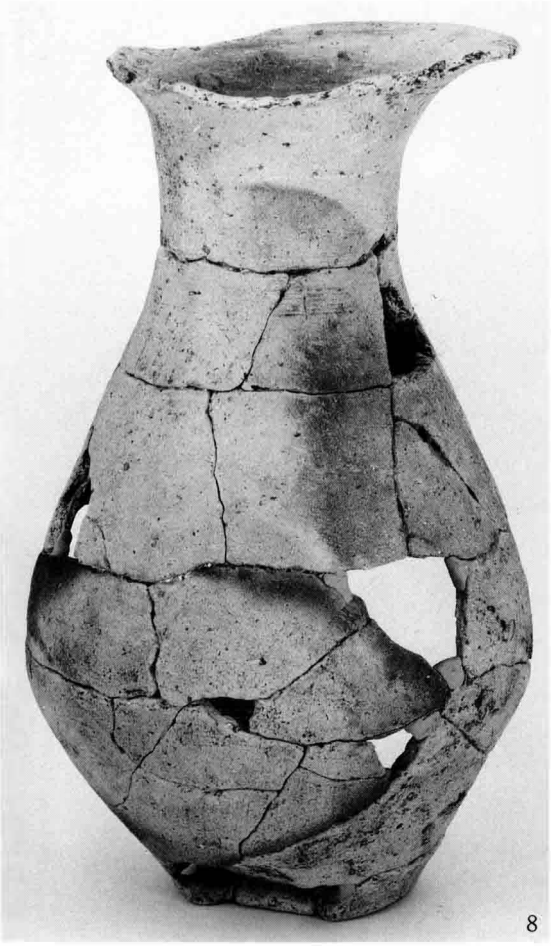
⑥掘り上がり（柱穴位置に整列）

図版10　壺形土器


3

7

9


8

97

図版11　壺形土器

149

154

156

161

160

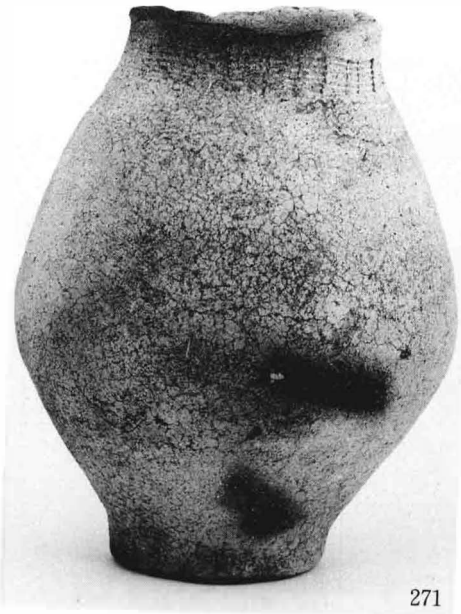
図版12　壺形土器

236

238

300

272



271

273